

墨花乃曙
全

091229-000-4

特12-627

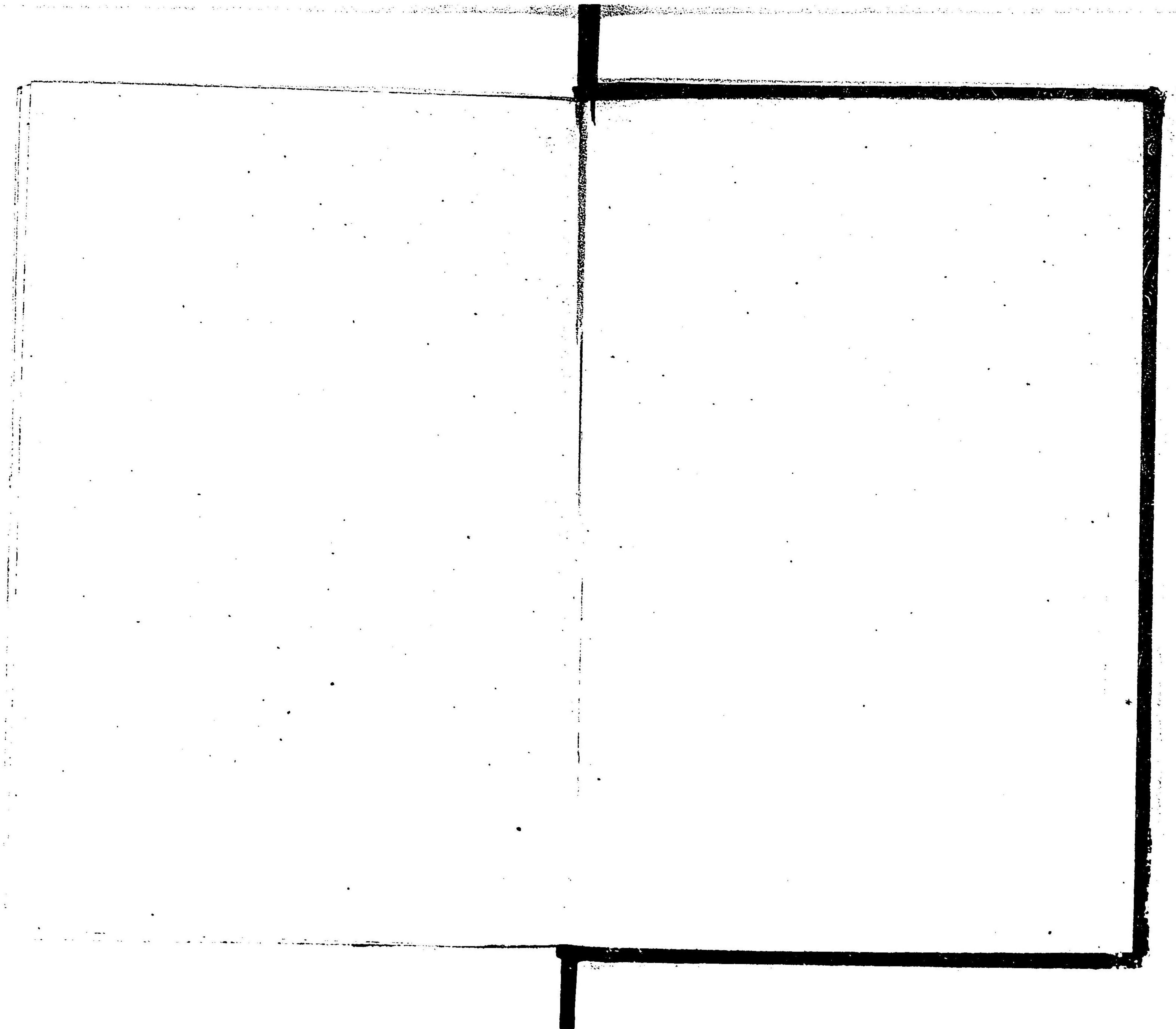
野晒於墨花の曙

何誰今夢 / 著

M19

DBN-2080





今夢子野晒か墨が來屬を綴り是を一編の冊子とし世の若
 を誤つゝ至る實は怖るべきの色慾の二道たり目下何難亭
 春情を動す此時は當て荒淫多慾を専らにする者遂は其身
 其情のあらざらん者あし然れば男女年十六にして始めて
 の亂走して兒童も逐るゝを厭すまして人間も於てかや
 親し臥す猫と雖も友と挑みて月夜も呻り靴狗を追ふ白黒
 世合の妻戀も鹿の笛の音より燒野の雉子の聲も現る家
 無益は近しと然れどを生とし活る者何誰か色を好ざらん
 前位を失ひ或は其國を亂すこと往々あり是を以て大慾の
 衆情はく怒り色を以て大ひなりと然れば國君も之が爲よ
 つ者相滅存散此例擧て數ふるゝ違あらず嘗て飯台の曲亭
 難も一度色慾も感溺まゝより大も其身を誤



人をして僅か勸懲の端も備んとせんす書肆來つて之を
 梓も求む故も予も叙を乞ふ予古來子と水魚の交わり是を
 於て予も阿墨が轉變を聞き其榮枯盛衰の速かあるを歎じ
 短息の余り欣然管城子を探り以て拙筆を染記して叙と爲
 すこと然り

于時明治十有九年五月中旬

扶桑橋の東方橋町の書肆

鶴聲社に當時居候の

夢廻家夢覺識

楊々

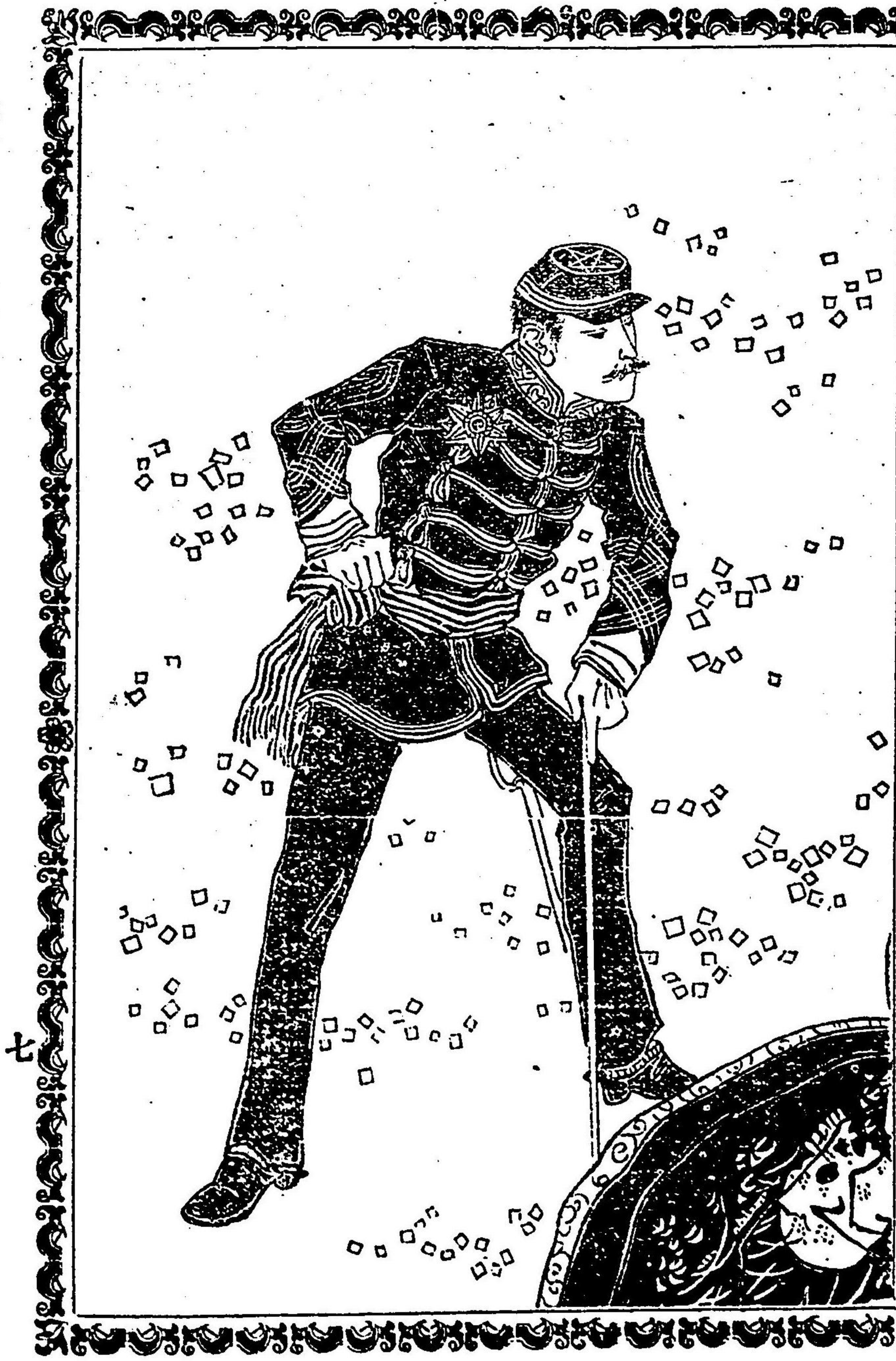


五



持多

四



櫻子

六

野晒於墨花の曙

第一回

何誰今夢綴

人間萬事塞翁が走馬燈籠の現像の幻影定住なく荷目の浮世の風は閃爍し輪回の機軸心から有爲轉變の生涯の昨日は結ぶ花丁子淡しく散りて仇夢の今日の懸路の關を身を假粧す例を鶏が啼く東都よりひくや三味線堀三筋よかよふ往還より一際目立つ角屋敷在時舊幕の頃住居てし芳野紋太夫とよぶ者の金座役を代々勤仕浮雲の富饒は時めきて何は不足なく消光せしも唯其妻の多病にして此年頃より子寶のなきを今さら憂しと啣つ夫婦が齡をいつしかよ四十路の坂をこゆるぎの心細さの限りなく焼捨山に見る月ならで兎は角をくさめかねッ、も神や佛へ只管よ願しかひや程もさく妻の妊身りお潔美と呼ぶ最愛娘さへ分娩しかば井が兩親の雀躍はいわんかたさく掌中の珠と愛ッ、餘念もあらず我とる歳も白髪の櫛齒をひく如き光陰も待たるゝ心よをさかしく漸く立てば歩めといそがれ笑へば物をとくいへと養育するかひや襟襟より人並越ゆる纏致よしいと健やかよ日を送り年を重ねて早や今年二八の春を



迎ゆれば姿容を臆闕て匂ひこぼるゝ初花よいさよう月を掛たる如く其性をまた伶俐くて糸竹の道走り書を拙きからねば遠近より二あきものとの評判たかく彼の竹取が麗姫の古事蹟此處よも夥多の婿ありて共々彼れこれ華燭催促ものゝ開が兩親の心も協ふ似つかふ結縁のらされば心ならずも過しけり

第二一回

来る春はことよ賑ふ大都會江戸と稱えし徳川の流れ淀まぬ繁昌の草より出て草も入る月の武藏の名のみよて八百八町菱をつらぬ戸毎に植ゆる松竹の緑色添ふ旭影萬歳鳥追門神者ゆきこゝ大路の開が中々武家屋敷の齊整よく門の飾も定格よかざり手桶や盛沙の符目たちし芝罫前ことよ役柄有福の芳野が家の出入もしげく敷敷狭しと積上し年賀贈物の堆たかふ奥に聞ゆる笑ひ聲屠蘇と雑煮の客款待し上戸も下戸をふしなきて舌鼓よはしらする扇子要目の新年御慶御芽出たつくしの異口同音比隣は稀な陽氣の体は此家ばかりへ来る東帝の音信るかと思われつ晝のみならず夜も入れ平常出入の誰彼と内外の男女打混り羅引かるたを年毎に催すことを恒例とせり今宵も集ふ奥坐敷との催の最中よて辨問醫の畑菜蝶巷坊子頭

を振立て陀洒落交じりよ讀立つる百人一首のかるたの本文「忍ぶ色と色よ出よけりわがこひの物やおもふと人のとよまで」とい愚老の心意氣歎。アレ於嬢さまのお速いこと私かまへは惜かあつと思つたよ。お松どんの夢中よ手を出きて周章をしたらからいつぞ御提れ申のだよエー自烈体。其様よお言であいよお竹どんのよう見計りして身方はうのつぱりかまじさいんだものをおまけよ幾度もお手附をしてさチーお梅どん。そんな味方争ひよりか互に注意をし源平の組分も籤だから仕ようがさいましてを御向ふに於嬢様よ藤岡の若旦那と御手鞠だものといつと勝てさいよおまけよ此方の權助どんさんどのはんの頭數計で一枚をとれないんだものを。アレハ其様よ馬鹿よいふてをらわんべー私が在郷で田の草を現よこのようよ取りをうすさ一ト敵も入よ後れをうしたことのマンチーとでもいよませへ引込で居てハ田印の顔汚したハハハハハ。アレ蝶巷さんいやはやだよ蝶巷で居て次をよませいんだものを。チャット合點「いよしえのさらの都の入重さくらけふさのよ匂ひぬるかな」此方のお伏でハありませんかの放痴であいよチャット其處よ。それのけふをかざりでもよ御手附二枚の御土産で御氣の毒よ。餘り騒ぎがつよいから何だか見へさくあつたアレお情

さん、狡猾、膝の下へ掻き寄せておくのだものを立て御覽それありましたらう。膝の下で、あかろう股の下へ温めてよ、さだらう道理こそ九重よ匂ひぬるだ。アレ又蝶巻さんの十八番の嘲弄が初つた。東西々々さて其つぎ、「逢見ての後の心よくらふれ、昔はをの思ひざりけり」藤岡の若旦那そりやアいけませんアレ、私先さよとさへて居り升をのぞ無理ですよアレ、誰か助て頂戴男の力がかあ、いから。お梅さん手をつめて、さ、いたい。じやと申て御放志なさら、あいのをアレくす、つて、いけません。と互に争ふ一枚のかるたの爲め、又十文字手よ手とからむ敵身方俱は氣乗の若い同志、歌膝崩して、蝶々を吹よめき、めて曳合へば、いつしか其處よすみの江の岸よよる波毛、鹿へ散らすかるたの嵐吹みひろの山のもみぢ葉と誰が拂ひて、老袖の下、た風、真中よ据へし燭臺の火影、消て淡闇くこれ、したりと蝶庵が傍の燭臺とり敢へず、さし出すと、たん此方よ、藤岡屋の綾次郎とり合ふかるたを、ひく、臆と出合がしらす、彼の火を、消すよ再び寂寥たり

第三回

火影の下、鳥羽玉のわやめも、分ぬ坐敷の体。ドロくくッ、ヤ幼怪か出かけたと蝶巻が

作即の酒落洒落を疑じて恐怖、アレと立騒ぐ娘子供が聲よつれ阿嬭おすみも其坐よ堪へかねアレと許り、又慌忙あがら傍へよ坐せし侍婢お清と思ひたがへて綾次郎へ唇と寄添ふ、姫ゆりの葉漏の露よ香ぞ傳ふ、濡る、籬の枯梗花、江戸紫の優男、兎角の葉を、手ざわりよ驚く、意の狂ひ、駒蹴く胸の百日紅、あからむ顔をお互よ見への、間間よよき機會よ握る手先、千萬無量、急る掌底よ籠る情の初戀、いもどかしきこと常態あらん折しを、次より誰彼が運ぶ火影よ、畫かされ、鴛鴦の襖を、右左り比翼を、分ち御互よ居住ひ直し、さむらぬ兼振其、場程よくつくろへ、難を斯くどの心付す、縁かへしたる歌がるた初よかわらず、打真じぬ、雲時して乳母のお澤こへ、出で來つ若し蝶庵さん皆さんたちも、ナト奥へお出あさつて、雁引がてら一杯、從上んなさいませ、しど旦那様がおゆしやり付宵から奥で、於松の御遊藝の御師匠、達と四五人の御客様がおしおふての御酒盛、彼是れ御用のある中で、於松さん初め若い御方と羨まし、今宵の御許が、出て思ふ存分遊んで、さ若しを私しが二十年若いと御仲間入をして、爲たいさんまい遊ぶもの、年とり度、あいのさチー。ナット左様よ、たをふな、四十島田で五十よ、いまだ間のあるお澤さん何處よ水氣を、たつぶりあり、さう愚老の全体生娘より、年増の事と思ひます。サヤ有難

う蝶庵さんいつを元氣でおめでとう香き中から酔てるようだサア早く奥へ御出ささい御
禮はお酌をたんとしますよ。イヤそれの有難い下地の好きさ御意のよしかるたを讀むよ
り飲む方が第一勝手の此蝶庵ドレ頂戴升へート吉例會我の蝶身振と擬つゝ立ながらサア
各位を御一處よとおすみを先さよ彼の藤岡屋の綾次郎其外男女打雜り幾間隔てし奥の間へ
各々坐をバ移しけり

奥の廣間は如畫銀燭床の法眼某の名筆高砂の松尉と楳三幅對の其前よ石州流よ挿瓶せし寒
梅の一幹の坐を薫らせて奥床し美酒佳肴の款待の殊よ等閑ならずして主人紋太夫を今ハ早
や朝よりつゞく客款待よ十二分の酔機嫌初春早々斯くまで賑かあのハ何よりだ所で於香
美幸ひは御師匠さんを來合せてよい折だから鳥渡彈初めがてらよ曾さんへ踊の稽古を御慰
みよ御目よ掛るがいらでいないかと他事さくいわれ客も主人へ習從旁々それのことさら拜
見をの是非よくと勘られていらはすれとはなほらみて恥さのみささだちぬ

第四回

日頃恐ぶる我戀の今宵耐らす色よ出で妹背の赤繩結ひ初めものや思ふと問ふ人のありもや

せんと氣苦勞を又うれしよ何事も手よ就さかねてそわく見ぬ様よして見る戀人こゝ
ろの同じ綾次郎まだうら若く二十才よ越路の雪の肌白ふ女子おしてもみまほしさいと風
雅ある美少年かねて心をかけまくも月下氷翁よ祈てしかひこをありて九重よ匂ふ色香の八
重櫻手折る思ひのどいとも逢見て後の我こゝる唯けふ限り逢ふことのわらずをあらばい
か計り昔のものをおはざる怨をあらんと兎よ角よ思ひ過せば手よ持てと深くも嗜す酒
猪口と共にやるせのあさまよ唯恍惚と情緒へのみ折々誘ふ目配の口よいわねと眼よて
まらする互の胸の一ッよ逢ふ此場の体をそれととはいかですいせんとくくせよと兩親の
促と言葉と師匠の差圖吾戀人のいかよか思わんことのおしくいあれを辭謝したく开が
儘よ音色ゆかしき三味線と粹き名題の梅の春「春げしき浮てかまめの一ハ二三四」つが
吾妻へつくばねのかのをもこの都鳥いさ事問はん云々と謡ふ唱歌の調子やつれ踊る手振り
の花柳姿態よ春よ粧ふて驟すふり袖舞舞て野邊の霞と眺むれ指す手ひく手の履仕ひ飛か
ふ胡蝶の學びあり了得の金よわかしたる日頃の仕込を思ひ遣れヤンヤくと褒る聲須臾は
ありを休ざりし是を酒宴をひと志をよ陽氣立ちつゝ離彼おしよ香や歌ハの高調子手の舞ひ

足の踏どころしらぬ踊や生酔の呂列津を解らぬ口状茶番流行拳酒時代の浮瑠璃とうた百々
逸なよくれと凝つて思案の一中ぶしを半間の聲は笑柄をとる隠し諸齋の捲ざらぬ更闌るま
で賑合へり

鐘の上野歎淺草歎眠ふ聞く音を黄昏の空の彌生の花曇夕東風添てナラとと散るや櫻の何
よとのふ無常を悟す乗りあれ物思ふ身はあやよく思めかねていと御塞しよまざる様は
さのもたれ柱よ身を寄せて戀よの脆き娘氣の吾行末を途つ追つ案を煩るう胸の潮支ゆる手
さへ弱竹のたゆげよ見ゆる雪の肌ゆるせし君を戀慕ふ夢よ逢瀬はありながら覺て墓なく咽
かへる涙よしめる枕紙神や佛よ願事をいつとりあげん玉椿筈兼茶れ髪に糸遊の風よたへさ
る柳腰やうやく起て氣晴よ端居おしたる此家の娘於壽美は花よ比ゆべく雨よ惱める海棠の
風情も斯くやと思われたり時は彼處の廻り様傳ふてこへ乳母を澤よ。「チヤヤ於嬢様いつ
よおく御寮間から御出かけで御坐い舛チ御氣分をいつとおよろしう御坐い舛かチ宜とこ
ろでいさいよ寐て居てもとくり鬱いであらぬいから庭前でも眺めたり少まのまざれやうか
と起はあきたれと矢張どうも」あきた様のは御氣惱ですから御藥よりの御自身よ御氣分

さへ御ひさ立て遊ばせに御治り遊ばすと御醫者が申て居り舛何でもキナ〜と思召さす御
心を廣く御持遊ばせ時節を追々としてよく成舛から御庭の藤が咲初める時分よは洒然とよくお
あり遊ばしませと無意と話のこの葉をゆかしき人の名よからひ藤の時節を待てといふ寛さ
口占を聞くられしと墓なきことを頼みとしおすみいといろよ莞爾と笑を合みて居たりけり

第五回

すみ「私がふら〜と斯して居やうかどふか早く治り度とと思ふけれど〜い〜として口籠
りいつと此まゝ死た方がはるかましかとと思ふよとほろりどこぼす。一、甲涙よ誠と顯われ
て賢く見へてもおぼこぎの心の丈を察し入るお澤の四方を見廻しつと聲をひそめてさわ
「アノ嬢様へよ折がさくついは話をまませんだつたがあなた様の煩の初からは兩
親様のいつそ御勤勞よ遊ばしておすみの病氣の勞症の下地と醫者の見立て其病根の氣病の
ら起ると聞けば娘を最うそちこち破瓜年期よをあれバ万一もして心よ濟ぬ事でもあつて親
よをい〜かねての氣勤勞でいありいさまいか年頃昵を深いお前よのよをや隠したてもま
ゆかふ折を見て程よく聞て呉まいかとの御願サアそれ故よ難日を彼是と言葉を尽しは賺し

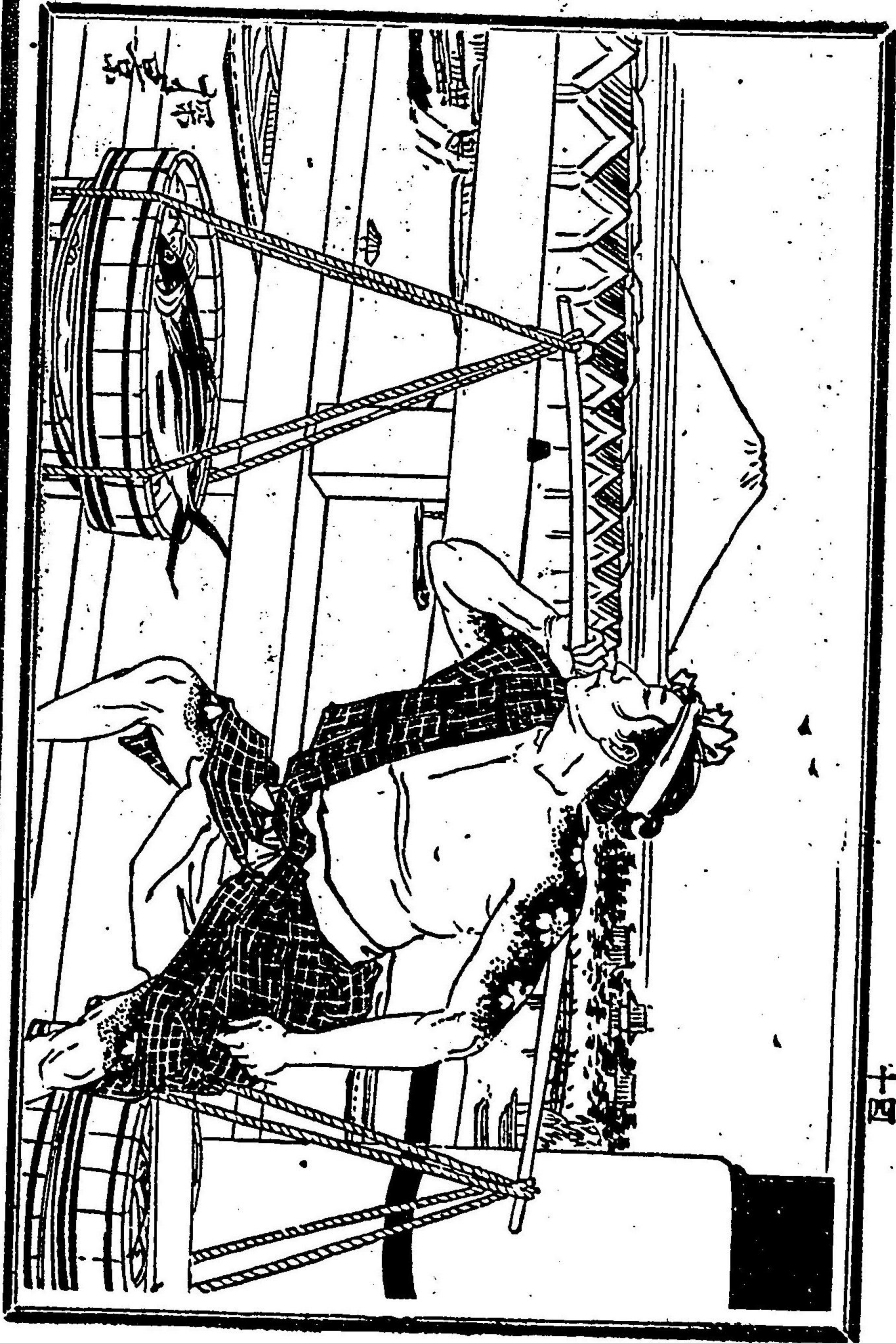


やたりしがやつとの事藤岡屋の若旦那を慕ひ遊ばすは心根を伺ひ直ぐは兩親様の耳へ
 入れあろうことならは思召のよふよと願ひ升た處それ程娘が慕うものあら嬉しむら何て
 遣りをもせん殊も先方の商人でこそあれ伊藤藏前の札差中で暖簾をふる富家でもあれば表向
 いどうよを造ひ縁組の相談をしようとの親様の思召早速あなたへ話しては嬉ませよし
 た後の病氣をめぐつかりと浮宜いから先づ安心と存じの外蝶庵さんをして先様へ御相談を
 あさつた處惣領のことであれど次男もあれは御家柄と御縁を結ぶの身取て願ふてもあ
 き合せ直ぐも御受のいたしたけれど差當て據ない都合われは今暫く御猶豫下さるよふ
 何れ是より御挨拶とをふしたさき其後何の音沙汰なくあまた様の御病氣もけふが日まで
 ぶらくと此の御容体それも結局箇の事の御苦勞もあるゆへと蝶庵さんもあれこれと心配
 して其御挨拶を承りよ先様へ出向さしとてころマア御嬉び遊ばしませ斯うですと口よいへ
 ど其實のまだ先方は故障果てす今も談も纏らず開を明々地も告をせは猶も病を重らさんい
 つと体よくいなして氣分をどうかひき立たせ出養生を強てを翻り娘の病を全治せし
 の又た詮術もあるべしと兼て必案のあるごとく知らぬお毒美の此の日頃待らよすら

信をさく嬉しさと恥かしき何んといらへ中々よいぬいふも十寸程の芒蕨をつれし
 を搔上げつゝ開がいふよしを聞居たりお澤の須史し機嫌をうかきひさわ「アノ先様の御挨拶
 授ニ、斯ふで御座り升是までの據をい都合があつておとなわりしが彌々吉日を撰んで御目
 出度御縁組といたしまししようそれにしては御座様が御病氣中での直ぐ斯うと云ふ譯をま
 ゐらす折角御養生遊ばして御早く御全快もあるようとおつしやゆたそふですマア御安心
 遊ばしませと言葉も造ろろ氣休めをおすみの眞受け嬉しさい何んも例へんものも亦之待
 かひあつて像て吾願ひし事の届さしも日頃信する神様や又た御佛の御利益と思ふよつて
 今更のよふも覺へつ思ひゆけ又さす顔打背け兩の袖も掩ふあるいと可憐まき有様もお澤
 が猶も言葉も繼ぎさわ「そふだからしては御座へ此うへい一日も早く御病氣の御直り遊
 ばすが肝心で御坐いませしよろれよ江戶の近廻りで熱海とか申す處の湯治が大とふわ
 きた様が御病氣よよろしいと蝶庵さんがおつしやつては御坐い升から日頃の御出嫌ひでも
 御養生でそから御氣分をひき立ていらつしやい舛な子御座様と頼りよおさわの御めける

第六回

「折角おまへがそらおい、だから行て見ようかネ、とそりや何よりで御坐い升御兩親様
 もさぞかしよお嬉びで御坐いませしよろ、とさうしてお前を一度は熱海とやらへ行て御呉れ
 のかへ、」行くのゆかさいのでは御坐いません是非御供をいたし升此度の御養生のことだ
 から何んでも御氣樂よして入らつしやる様よと像て旦那様の御差圖を私の外御醫者の蝶
 庵さんとお梅お清の氣輕者でい、からわれ等を連れてゆけられよ、御出入の橋屋の一す
 料理を出來て調法だから荷物の率領がてらよ雇つて供をさせると云つていらつしやい升た
 ナ、それそれはし場の伯父様を此御うわさを御聞かされてそらいふことなら幸ひよ私を湯
 治へ行きたいから道中からの會計がてら行くなら一處へ行ませうとねつしやつたそうで御
 坐り升るふするとおなた様とを七人連淋しい事ありませんそれ氣の置けぬ人達計りて
 御坐り升から「いまお前のおいの橋屋といふの、おの家柄といふ俳優かへ、」ホ、
 、私としたことが皆のいふ口よつれてつい橋屋と申升たがその橋屋と申たの、いつも御
 屋敷へ御出入の魚屋の佐吉のことと御坐い升それ俳優の家柄がこわい上と上手よつかふ
 其うへも容貌がどつか似て居るところから皆が本とうの名を呼ばず橋屋々々と申すから



つい今を左様申たので御座い升存じか知りませんがとんだ氣輕者で御坐りませす、う、かい私しや俳優がどうして行くかと思つたよホ、ホ、ト此頃又なきお美が笑顔折から此所へ咳一咳して入り来る蝶巷、蝶、イヤア嬢様の浮笑ひ聲をうかうと今日いかなる吉日だか何より以て恐悦々々其の御様子で御病氣をソントおよろしいと見へるシテ其の面白そうお話しと苦しからづバチト蝶巷へは吹聴をお澤せん、蝶巷さんよい所へ今をいまして兼てよりほうわさのある熱海への浮出養生を浮湖め申しさんさく御承知も成り升たよ、蝶、そりやア近頃結構至極とさへおされ直ぐ様は病氣の一本復又たぞる御意のかわらぬ中善のいろげだ御天氣都合を調度明後日頃の一天晴となりましよう是非御出かけの事と旦那左様やて御極よなつてはどうでヤス愚老をぞの只今でもおかまいたしのみたさき雀御宿の何所と出かけ升アハハ、ハハ、と輕口のお道化まじりお勧めたらし旅の用意をいそがしぬ〇時得て咲や江戸の花娘盛りを戀ゆへ姿の花を心から夜半の嵐は吹散らすことの惜しさよかよかくと勧めてけふの門出を日和長和けき春の旅樂しきことも愛身よの彼の戀人ともろとも住をあらたる此土地をいかよわづかの間合とて離るゝことの何と

さく波静かある品川を穩かすらぬ心地して鑢て越へくる川崎の戀の淵漸も身を沈む初めを
 りとの後又知る思ひ勞れてうとくと夢をゆらせて行く藍輿の軒端並ぶる神奈川や早や程
 ケ谷の程もなく暮れて戸塚又宿かりて翌日由縁の其名さへ紫よはく藤澤やのせよつ
 いく平塚のつかの間たへぬいとしさのをもとの哀れの大磯の蛙啼くある小田原は都こいしく
 思ひ出ていそがぬ旅を早川の村をいつしか越えゆけば石橋山の星月夜過よしことの忍ばれ
 て待る、逢瀬の根府川よりうれしき夢の縁よしと其の江の浦未かけて眺めゆかしく慰め
 ついのりよりこゝろよし濱又暫時やすらいゆくてなる伊豆の修社ふし拜み我が願事ごとくり返
 し戀の熱海又着よけり

第七回

此里や西北は屏風の峯を建まわして冬も巨燧をしらす東南の扇の海を開き夏も團扇を探る
 よおよはず遠き大島の彩雲の幕を張たるおとく近き初島の萌黄の蚊屋をたゝむ似たり沖
 の白帆の天を摩して走り磯の釣船の浪も随て躍る兜岩松の拳を握り烏帽子岳苔のひたゝ
 れを着たり滄海嶺岳の脚色天工自然の大機關と故人京山翁が筆すさみ又盡したる其風景

といひ殊も温泉の功能著しきよよりて浴客のこゝもつとて絶へ間なき世の人の知る
 處より閑話雑題おす等の一、群の渡邊の客舎も足を止せつゝ早や一週りを過す程も果
 して湯治のさゝめあらぬれおすみの氣分をすがくしく猶二週りを湯治せば本復すべき容
 体又連の者も心沈ち居て最面白く日を送ぬ或日のとよおすみの待婢を清をとるお浴みし
 はて、戻り来る坐敷にお澤がいろく鏡臺其他の化粧道具何れとなく取揃へ待ちつ
 在りしがうれしと見て、「最にお上り遊ばしました歎今日伯父様が蝶庵さんお梅さんを
 召連なされて伊豆山の湯池へ御出かけなりましたから御淋しう御座い此の御様子でい
 直よあなた様も外方出をなさる様もは成り遊ばしませう何よしてを難有いことドレ私
 一寸願つてお湯はいつてまいりませうお清さんお頼み申升といひ捨て湯場へ出て行く
 おすみの病後の憔悴さへ頼みいへつゝ今いしも秋波一注の媚をまじ春葩半露の笑を加へて
 とよ出浴の婀娜姿中形のゆかた着よ二重は纏ふ緋のしき居住ひ崩して鏡臺も向ふ縁致の
 鮮麗さ後にお清が櫛をとり鬢のおくれ毛とりわけながら、「お嬢様へ今日いつよさく伊
 淋しお坐ひ升何か御慰がありとうさもんだまチ、それく修道中から昵よなつた櫛屋の

アノ佐吉を召し酒の一杯も下さつて得意の荷屋のこわ色をおつかひせ遊ばせを手拭をま
 こひて持つッリ身の振ぶどはどんあまうまうやりますよ一体おもごしから氣性がんだん似
 ていすから「一度やらせて見たらへ」何時でもやり升後まとう遊ばせあアノ鳥渡お島
 田のをうしろかつこふお合せ鏡で見ても頂戴よろしう伊坐ひ升かと櫛の齒を紙にて拭ひあが
 らフツト氣付き「イヤ私とした事が先程髪結が参つたと此の宿で知らせて呉れたから頼
 んで置きがらさつぱり忘れてサお澤どんが早く上つてくれ、ばい」と我しらすは獨言「清
 やこゝの最い、から髪結が待てゐるから結ふておもらいなさいおしよなつていよ」
 れでもあなた様お獨りおなり遊ばし升をのこす、いよ直澤が上つて参るから「左様
 さら恐入升が他の客も有りままようから餘り待たせても氣の毒ですから一寸結つてもらひ
 ましよとお嬢さま御免遊ばせとトツカハ次へ立て行く跡はおすみみ只だ獨り指めて日敷を
 かいのふれば此所へ來しより一月餘り最早病氣をいへし身の一日を早く江戸へ戻り吾が戀
 人へたよりをしたしと心も案ずる其折から向ふ二階を借り切の二個の客が世間断し離障か
 らぬ高調子手を取るよう又聞へたり

第八回

△暮をこう打ちつめると倦がくるドレ茶でもいれて飲ふかの口ろれがよかろう餘り暮も凝
 るもんだから己らの肩まで凝つて按摩でも散財せよやアをゆゝかあくなつた△凝るといへ
 ば諸事萬端こつての尋思よわたすだ斯う申す私をなぞを若い時分の女郎買よこつて十彼
 の川柳點もある通り吉原が明るくあつて内と開ましたもんだが無財が異見の惣仕舞で目が
 覺て見ると馬鹿くしいもんだ口女郎買ばかりの凝つてゐる最中が面白いものよ此正月の事
 よ私が同町内で人も知てゐる札差の藤岡屋の若旦那が親の名代よ出た仲間の散會くづれか
 らぐれ出してよろづよし原三谷堀たから船こぐ初買よよい初夢を三ッ浦開辨天さんとそひ
 ぶしおぞと清元をどきよ洒落こんだのが稻本の傾城紅筆とやらでそれがやみつきたり雨
 の降る夜も風の日もと日毎の至盛陀多羅遊びをやらかまてナ△それからせうした口マア聞
 たまへその若旦那の馬鹿旦那が店の金を大枚ニッ箱程を徒費をわけたと思ひおせい然し評
 判よ一番頭よ悪があつて自分の遣ひ込んだ帳尻をなすつたとかいふが何よし強ひ遣ひ込
 昔堅氣の親父が度々の強異見を糖よ釘さかぬ息子が勘當の其あけくの店へ出入の齋頭が扱



い當分若旦那を自分の内へ引とつて居るうだが是だから餘り凝り過るとその末の面白か
 かしくもなくなつてまをふのよ何でも物は最う一杯といふ處でさうわけた酔心地が申分の
 ないところだドレ湯を調度申分のない程湧て來たろう一風呂遣入つてこようかと聞とを
 赤しよ耳入る世間断は此方のおすみギツリ胸まからまりし藤岡屋の若旦那と名指うわ
 さの他よあき綾次郎が身の上あらんいつぞやワット逢ひ初し其折互よ耳は口よりかわした
 る言の葉よ妹背の縁よま末かけて違ふまじと約束せしものを情けをや外の女子よ
 見かへるとの私し獨りがなく迄よ戀こがれつと病み煩ふを誰がたれを思ひまわせば乳母か
 澤が告げしこともそらだのみ悔えと男の薄状と思案よくると娘氣のきんと言葉をいへば
 ん岩よ追れて散る玉の碎けて落る涙と共咽かへり聲の立てねど忍びなき襦袢の襟をくひ
 えたり悲歎よやるせなき折から後廊下よ來る人のけりひよ吹簾涙を拭ぐひ誰とあらん
 と見かへる此方障子がガリと開けながら 佐吉よお清とんは夜食の鯛と鮑の二品ですが何よ
 して上げまきようか一寸と料理をば伺ひ下さいましチャお清とんはいさのかお嬢様か
 獨りではいくと間の見るそうよをみ手しながら扣ゆるの先程よういさの桶屋其の結名さ

へそつくりのいませ男の魚やの佐吉彼の綾次郎が内端しい息子風のことかひり藍麩微の
裕の下は小辨慶のひとへを重ね八端の三尺帯瓶 眼の手拭を肩たすさせしイサミの風体思
見すフット見か見したる顔と顔とが以心傳心戀の曲者世の中は遠くて近さと男女の道と清
少納言がいしよあらずや

第九回

夜の夏山人途絶へ遠き山寺の鐘も聞へず更闌る亥中の天の清澄て月半輪の雲巻く峯よ
の萬樹の木影あり婆々たる水の音颯々たる松の聲符又響きて物凄き山ふところの問道の乍
麼何處を熱海よりして三島への往還あり唯さへ路次の險しさは宵降り敷く驟雨は粘土滑
らふに迂りやすく踏む脚さらぬ定まらぬを繰かよ支ゆる前後の息杖喘々擔をもて急ぎ旅籠與
みひき添ふ一個の旅人あり熱海の方より越へ来る時稍々平坦なる絶頂は攀るが如く昇り果
てホット一息月影を傍を見れば山神の祠と覺しき一字ありチイ先棒一寸と立つて行くへ
カ左様スベ一モシ親方最う此所が三島の半丁場一吹煙やつて行させういくら夜が短けい
とつて曉きの中は驛は大丈夫道入り升から御安心さいますしといふつと下す旅籠の簾を掲

げて内をさし覗き彼の旅人の聲をひそめ滅法勝手がちがひますしは買あさらぬ夜路だから
嚙ぞは究屈でありましたらう最ふ勘しの御辛抱だ内よの若き女の語音ア、嬉しかつた此所
までの唯れを追つて来やアしまいネ私しや今まで恐怖やらおそ後しくつて活て居る心地
の先々が案じられ舛せ私が就ているからよやア氣遣ひは御坐いません安心しておいでませ
へ最ふ一ト息で先へ行着さゆつくりと休みましやうチイ駕輿の衆ソロソロ道て下つしと見
かへる此方の祠の椽は腰打掛て何やらん私語いたる兩人の雲助らあづさ合ひつゝ身を起し
ドレ遣りまきよふがモシ親方雨霽りの此山路夜徹しの急須の仕事定めの賃錢として一杯飲
まして下せいと申さずとを御如才をあり升まいがどふか願ひ舛せ。何んだと酒代をくれ
とか宜加減は戯言を吐け途中で彼是言ふのが五月蠅から初手は三島の宿屋まで酒代ぐるみ
貳兩貳分と高い賃錢は極めたのを最う忘れてしまつたのかチイ親方とばけてのいけません
せ賃錢の貳兩貳分との相場はづれの安直もの誰を行手のねへ此の夜路そこを行く我輩の肩
骨を曲げ込んでを質ふ直價の堅固造り違駄天走りよめへりやした御蔭があくて一すも先



へ歩行が出来ませんコウ汝等の女づれと誨どつて言語縦横強面よくする氣から鑑堂文でも遣らねへが然し此方の都合にて手間どらねへ急ぎ旅ナヨン儘て定めの外は又た何程か遠るとしようから急速と行きぢへ。そりや難有うとせいやす棒組御禮を申ねへ。親方難有シテ何程くれさつしやる。汝等が骨折て早く行着たうへの事だこゝで何程とを極められぢへ。それじやア無益だ親方の懐中が極ら奇けりやア骨折て遣た所がヤミカゲンコでぶつ拂われても文句はいへぢへナア越中。大キよとふよとふせくれさつしやるから何程と聞せなさるまでぢへ此處で下せいそうすりやア横根の痛みを我慢して縦よつン走るノ一伊豆熊と足下を見て彌々付込じ口状いめへましいとと思へどもとふせ程順ならぬ相手面倒ありと財布より一朱二個をとぶでつゝサア汝等の言ふ通り負て遣るから早く走てくんぢーと渡すを受て鳥渡改め何んのことたと兩人の顔見合せて冷笑ひ

第十回

貳朱の酒代で一朱の割まへか。知れたことよ貳朱の酒代たいたしたものそれがどうした。ナ越中ぬしやアとふだかしらねへが巴アこんな端錢をもらをゝとつて頭を下げて頼んだ

うへは禮のいねへ。うらとをく伊豆熊返してしまひネへ。合點だと其儘金を投返し、
 撫てせいら笑ひ我等がくれるといふたつた百兩あこぎな酒代の望まじへといわれてカッ
 トせき返し旅人腕を擦つて左右を見かへりこれで不足といふことなら最入遣らない分のこ
 とだ貨錢さめた此籃輿を誤読といわすよかゆいで行けくすくして後悔するな。ハフポー
 ー此の青二才身の程しらす大たバの熱を吐き其方こそ後悔するあくれすハ強てもらい
 ねへそのかわりよヤア腕でとる街道さつての名うての伊豆熊その相棒の越中虎としらねへ
 か息杖一本濁膠一合箱根八里の長持唄を吹鳴て世過の雲助とい怒の皮を腕の骨をちがふ相
 手だ覺悟しろこうなるからの吾等が較計と引導がわりよ聞してやろう此四五日の螺の坪も
 尋は濱の眞砂の敷とりの白波かせぎか手短かと思ふ矢先へ欠落をの連の姉エが強氣な代物
 彼様いふ的と引摺つて宿へバつたりよ買渡しやア一ト元手よわりつかふと示し合せて籃輿
 を勧め突込む肩へツツシリと貫目のあるの女と共に乗せた荷物よ金を澤山造化精妙と路次
 を急ぎ人里はなれし此處で有無と言ひせぬ荒仕事最うこうなつちやア勳擲いとれチへ女を
 金を洒然投出せ抵抗すりやア息杖で息の根留めると観念しろと左右一度よつめよせる二人

の利腕兩手よ挂へ向ふさまよ突放ち身よ開けて旅人の屹度身構へ駕輿を後ろよ立塞がる内
 の女子の見聞なす此爲体よ男を危ふみ身を案じ何と仕様もないジャリリ胸を潰して泣沈む
 時よ兩個の雲助のゑしやくとさく面倒かりたんで仕舞へ合點だと罵りわへす矢庭よ聲込
 む息杖を右へ流し左へ江らせ突とつけ入りて伊豆熊が拿ぶる杖を打落し怯をすかさず脊負
 投よをんどりさつて頭顛倒此時早く彼の時遅し後ろよ近寄る越中虎が微塵よあれと打おろ
 す拳の下を翻りと潜り足を飛して腰眼のあたりを嘔と蹴り蹴りれて前へひよろくくや
 うやうよ踏駐りふりかへる其隙よ彼の旅人の落たる杖をひろいどり走りかゝつて聲んとす
 時よ被りし手拭の結目ほどけて振落し顔のす面部を覗と見て心よ駭く越中の慌忙て聲をふ
 り立たり

第十一回

ヤヨ待てしはし小櫻阿兄我儕だく愚圖虎ダヨ。何よ愚圖虎とい。それ權次が賭場よくすふ
 つていた我儕だアナ。思ひがけねば旅人の月影よ透し見てよ、左様聞けば盡ふりのグツ虎
 が以前の姿の洒然失せ日よくろみふる容貌よ我儕ア今まで氣が付かきんだ。そふいふ阿兄

を被類顔の見へすは聲香へすつばりかわつて江戸調子何でおぬしを上州無宿小櫻丹二阿兄との離れあつて悟るふや然し面目次第を子へ阿兄まつびら浮免させへと詫る傍は伊豆熊が顔をしかめて腰と撫でヤツト起きつゝ苦笑ひ兼て噂の小櫻阿兄が兩人を相手は敏捷働らさかぢわチへの無理がチへへい浮免させい私の伊豆の生れよて熊藏といふケチッポイ野郎でゴンス浮見知り置いて下せい升し。ナニ詫るよ及バチへマア何んしろ早分りで互互は昔我グチへのケをつけの仕合せ時ムツ虎聞てくれおぬしもしつての去年の春賭博喧嘩のをつれから親分の人手あかり其意趣がへしよ川向ふの嘉十が持の賭場へふん込み獨り之餘さず殺害したものゝ人殺のうわさのバツトし捕へ込まねへ其内ふ土地を脱て江戸へ行さ魚うりよなりすまし名を佐吉と造り名して所々うり歩く得意先そこよ一ツの隠しといふの或る屋敷で滅法己れをひるさよし阿熊さんが湯治行きの供え雇われ先月中熱海へ來たのが始まりで今夜の末とあり行きの言わずとよろしく察しチへ。チイ阿兄人の心を察し承へてたまふ邊はさぎづめよそのマレ言の聞きしいナア伊豆熊一升おつた其うへで聞としよムアハハハ、と高笑ひ時よ佐吉の小櫻丹二のおすみをやおら監與より下るし瘡の惱みを介抱

りつゝ最う心配よ及ばぬ仕儀婿明といふものゝ然し斯ふ今までの佐吉じやなく小櫻丹二と本音を吐ておぬしが胸をさしてへい今計らずを我儕の事歴かくしをさらす不憶く問はず語りて知られたらうへい戀を情を醒とて我が怖くて居たゝまらず今更ら供侶よ欠落せしを悔ゆるなら歸してやるまいものでもなぬそれともお前が度胸を据へ大姉様よをある氣なら始めからして仕組んだ事何處までもつれて退こふが否か應かの返答を聞せてくれと問ひかけられて何の案じも戀故と思ひ錯亂れしおとみが一心眞庭男を慕ふより連れて退いての一言よそんさらそふと諾づく丹二傍へ聞せし伊豆熊が阿兄の實女殺し其うへ立派な背中の刺繡世間無類の微塵の小櫻それから異名をとつた丈け氣性と云ひ腕といひ我儕を實女惚れ込んだ甲州生れで名を賣た我が知つたる朱達摩金八と云ふ阿兄を刺繡からして籍名をとつた宜男だが阿兄よ及バおかるよ。餘りおだてゝくんなんさんおコウ愚圖虎いづ熊おぬしも御苦勞ながら手序は監與を三島へ遣てくだつし驛で一杯仲直り飲でゆつくり談すと老よら。ソリア何より耳よりなドレ行ふ妨へ辭し乗させいと丹二を先は兩人の監與をかたけて急ぎけり

時は此方の祠よりあらわれ出る一個の人あり甲掛脚半半合羽の旅立立管の小笠を面を覆ふへに腕かよしれねど二十四五血氣盛んの若者よて露地ぐらゝ丹二等の跡追かけんとせしもの、忽ち思ふ子細やありけん立とまりし脚下は元めく銀の管をひろいわけ月も透て只見こふみて落せし主をそれぞと案じ獨り莞爾と諾きて尋思を路次も引かへて熱海の方へ馳走りけり却説く阿嬢おすみの藤岡屋綾次郎を懸想して氣鬱の症とぞしより熱海へ湯治の保養旅其の温泉のさゝめよく頼み本復ゝいたりたることの悦びの悦びならで却て一の不慮爲をしいだしたる其趣きの前回は綴りしごとくよて相宿の客衆が世間話し藤岡屋綾次郎が身の上をとり沙汰せしをわやよくおすまがくわしく洩れさしてはいなき男の無情を歎きの餘りいつしか戀の脆き娘氣を乱れ初ての堅糸のもつれく怪くも魚屋佐吉が仇ある風情も心移りてやるせなき戀慕の情を汲とりし侍婦お清が淺蕪も手曳せしより人眼の關を恐び逢ひあふ度毎ふつのり易き戀の怨何をしらぬ齒の無分別命にかけても末とげん娘心の一筋も男が指圖に人しれず叔父の手元の路金を取り出し遂ひも手と手ととり合ふ

て熱海の旅宿を夜よまされ忍び出たることよして扱こそ三島へ赴く途中此爲体のありしちり小櫻丹二等の其曉がた三島驛よ着しかバ彼破戸者兩人よのあくまで酒肴の振舞あし黄金幾計かを分ち取らせて歸せし後おすまが衣装を改めて田舎娘は粧をいせ其身も田舎人よ出立ちて伊勢参宮のさまよつし心ざすことしわれは蘆が散る浪華をさして旅寐せしを幾日おいです彼地よ着けり當時不如意を覺へざる所持金のあるまゝは頼み活業を要むるの煩くひをなく灘波新地となんよ土地よさゝやかある居宅を借りつけ思ひ合ふたる夫婦となり一年餘りの快樂よ月日を送りけり深閨よ養育れし阿嬢おすみの其當座こそ賤が伏屋は離祭りせし風情あるをいつしかよ下民風習よるまり易う東都の天のなつかしく思ひざるよりあらねどもいとしき男とゆく同栖することのうれしく何事も彼が言葉よ従へり今を佐吉と假名せる小櫻丹二のおすまと思われ斯く欠落して夫婦とありし元より色を愛でしといへど一ツよの金銀を取出し夫れを元手よ浪華へ立越へ兼て聞き知る堂嶋の米商業の熱刺場で烈しき贏利を獲んもの心よ兼て計書は土地の摸様を知るよ隨ひ日々よ市場よ入込んで其賣買を試むるよ最初の程にすること成ずこと意の如くならざるなく我から利運よ向きたり

と思ふ心の油断の大敵一時米價は狂ひ出て一刻毎に飢高下相場の動搖ほど方ならず此圖をぬがさず一、勝利と有合ふ金子を賭として得敷喪敷の運だりし買手よまわりし見込の組懸日々よのあぎの金子よ追れ逐よれそれを取り留めがたく根こそぎの損亡よ加之て諸方の借金よ促られつ今の其日の消しさへ差支がらざる世帯とあれり實は理りや貨悖て入るもの亦た悖て出るとや云ふべからん

第十三回

箇様状況におもみも今はあすことなしよあるべくもあらず佐吉とかよのく相談し習ひ覺へし三味線の藝は其身を助けられ心がらざる不仕合せ住居を直ぐは稽古所と掲げる表札よ名を改め清元延春と認めつ佐吉を故意よ兄と呼び开が指南をぞ始たり當地のことよ奇らかなる清元は東都上りの直傳といひ殊は標致もすぐれたる女師匠と遠近は評判高く我先さよ弟子入なしてかよひ來つ晝夜をかけて三味線の音色を絶へず賑へり秋の夕暮我の顔は軒よ飛かふ蝙蝠の影らすくらさ三日の月とよ吹く風よ姿ある柳を潜ぐる木下闇エ一格子をガラリと開け 由次郎「御師匠さん今日はと店手代の由次郎前垂れしとひて其端を帯よ挟みしナ

ヨンの間を隠れ稽古の男弟子よしあるをの、男子との間ひでもしる、上品さ以前の風体を洗ひ髪黄楊の小櫛を横よさし洒然素顔の意氣造り彼甲延春の三ツ柏藍形のゆかた若へ辨慶とまの羽織をひつかけ長火鉢は片眩よせ小楊枝を仕かひながら愛嬌よく 延春「チャ由さんか御出ささい今行燈をとをし升よ其處の闇らくひていけませんナト此處へ入らつしやつて一吹おわがんささい 由「イヤ御かまひでの困り升参りようが早や過ぎて御氣もじちがら店の都合でつい遅くあり升としんみり稽古を出来かね升から 延「ほんよそです私の方の御出さつても差支のありません今日からの貸浴衣汗雷と云ふ意氣を名題を初めましようあきたいほんよ御さようで咽がよくいらつしやるから張合ですよ 由「御師匠さんおだていけませせん 延「アレハほんどうですよアノ由さんへフット思ひ出しておかしければ何時ぞか御尋申そふと存じていましたがあなたのはんとうの御家の何處ですへ 由「それを聞てどうなさい升延「アアい、から傍聞せよといよ 由「夫じやア申しましたしよ私今勤て居升或る店の一番々頭徳兵衛が悴で高麗橋をつひ渡りての横町よ住でいまは親が、りですから何事も自由にならず困りさり升 延「は自由よならんのがよいのですよ優美くて程の

よいあなたが其うへは自由な遊びが出来たらそれこそ娼妓や藝子あどどんあ血道を
 わげて羨慕ひをうしましよと思ひやられ升ホ、、、由「ナニ私しの娼妓買ひや藝子
 狂ひのきつひ嫌ひでよし好きよしてを何んでかまひ手がありませんものか 延「そふでしよ
 ともあなたの色男でおありささらさいからねへ 由「ほんよです御師匠さんこそその御標致
 で世間の人が悉皆惚です私のやうな武骨もの牛涯色の何ぞといふソソナ意氣ごとの夢
 もしりません不惑者なのです 延「チャ轉倒おとをおつしやるよあなたなんぞ誰でも好た
 らしひ方だと存じさいものありません若しを私よい日の下生れ合せ卜一の女でさへ
 わりましたから唯のお置き申させんけれ共斯な三平二満ですからどう思てもさホ、、、
 由「それこそ轉倒ごとをおつしやるのですしかし嘘でもさふ云つて下なる請料よ一升お
 どりましやうか、、、 延「アレ戯言でいありませんはんとです一升と申せば調度今しが
 た夕河岸で求めた鰐を鰐酸よしましたから御口よひ合ひかねまじよしが一杯それであげた
 いのですせめて御猪口でもいたゞきたいの志願からゆゑと媚さて云出せり

第十四回

由「御師匠さん嘲睨つちやアいけませんアレはんとさ御擗ひあすつての困り紳 延「マア
 能でいありませんかと手早くもどり揃へたる酒肴推辞かねつゝ餐應よある口の由次郎こと
 よ美艶と延春が酌よ數杯を我しらで過して今の微醉の猶更話しを打解し其口吻も如何や
 らん心あり氣よ思ひれける外面のいつまか雨降りいで檐の玉水音あげく 延「オヤ雨ではか
 實よ秋の空と何とやらに變り易いどの宜く云つたのですねへ先刻まで三日月さまが薄
 すりと拜めましたよ 由「アノ御師匠さん何とやらとみつしやるの男の心と云ふのでまよ
 が世間の男が皆ささふ水性ものばかりでもありません中よの實のある男もあります斯ふ
 申す私あどが彼と想つた女が若しアノ色よでも成つてくれ、べそりやア心切を盡して雌猫
 でも抱きやアまませんせ 延「チホ、、、い、口前でいらつしやること其氣休め文句で女
 をころりとをさせあすつて跡で笑つていらつしやるのでまよはんよ性悪だよ由さんその
 御酒の冷まきたろ私か御助をうしませう今御爛のよいのが出来升ナニお歸りなさるとい
 へじやアありませんか今夜の雨が降り出しましたから若衆を稽古よ來る氣遣ひのありませ
 んそれよ兄の佐吉を遠出をしまきたから歸りますまいいつそ妾獨で淋しう浮座の升からチ

あまたはゆつくりなすつて下さい御店の御都合を一晚位いいでいありませんか由「そりやアよゝよとしてを長居の御迷惑だらう延」どつちがサ然し色の處へ早くは出かけなさうといふを引留をうしては氣の毒をまん察しの通りでせうよくらしいよ膝のあたりを一寸と突きほんのり顔もさくら色延「マア由さんそふそわくならさすは私のやうさるのよを酒をおさせなさいナチへ功德になり升からと婀娜めく風采の色しかけ懐と肌へも戀風の身よしむ酔の心うかるゝ由次郎 由「憚りながら思ひざしとさす猪口を延」アレ私の先刻から度々御相酌をしたせい活々とのばせていけませんマア初めてお押へ申し升由「切角の思ひざし半分あがつて跡の私が頂戴させようコリヤア御見事延」サア由さん思ひざしの御返杯なみくどは受ささいよアノ鳥渡と此猪口を見て頂戴染付の濃き色の三ッ柏と私の名前常盤木のかわらぬ色と申す心趣サ若し由さん今夜の雨を降り出すし夜を更けましたからお嫌であけりやア泊つては出でささいさチへございようですからそれとをいひやかへ

第十五回

由「どうしていや處か然し止ませうなまなかいゝ女の側へ居ながら高嶺の花と手も

とられず悄然獨り寝るのを苦しう御座い升からアノ何やらは斯ふした文句があるじやアリませんか「草の葉もやどりし月も小夜風も生憎やこぼれてはらくと露の雨かしづくか露かぬれて色ます野邊の色」濡て色ます野邊のいろといさやア本望ですモン御師匠さん酔ひましたから御免なさいとコロリと其處へ眩まくら此有様は延春の思ひ有氣又奥の間へ用意の床を鋪のべつ蚊帳つり下げて戸鎖りまや、隙どりて立戻り由次郎が肩先へ手を打掛てゆり揺かし延「モン由さん浮寝をささつて酔醒は風でもひくといけません蚊をまた出ますし此方へ入らつてまやつてはんとらう御休みなさいよ自烈体ねへといわれてようやく由次郎起き直り由「覺へすうたゝ、をささきたが何時でせう延」最うそちこち九ツもありませう雨を降り休みませんからどうせ歸れません泊つていらつしやいよ 由「ほんとうは泊つても宜のですか延」アレまだ疑がつてサ何が起るうわりませう 由「ろりやア有難う御座い升然し夢でいあるまいか 延「いやですよ寝ばけて眞面目くなく禮などいつてさアレあふさいそんなよあがりなまさいよ酔て蹠眼をさつてサ此方ですよアノ由さんアノ手狭で蚊張を一張ですから失禮ですがあなたの御すその處へ私を寐さしてくださいよアレ何んですよふざけてい

と手をとり蚊帳に入ると跡はあたりを寂密となる鐘も早子の刻を報じけり時分はよしと格子戸を音せぬより静と開けて竊脚しつゝ入り来るに佐吉と假名の小櫻丹二後被たかく裾端折り片腕脱し身輕の出立ち闇に閃めく菜刀を逆手し取りつゝ壁岸づたい掻撈々々悉び寄り突と奥の間へ踏込で傍への行燈火口をさし向け眼を怒らし聲わらへげ問夫見附其處動く奇姦婦をろとも成敗の首と胴との物のかれ刃の切味うけて見よと閃めかしたる電光石火釣手をブツとさき拂ふ此物音は跳起きて駭ろき乍ら由次郎後ろざま蚊帳のすそを潜り出ながら早速の礫手枕をとつて投付るをハッンと受シヤアこしやくと振り落す氷の刃何處までも震縁すを飛退つて坐隅半分り垂る蚊帳を小盾も右左轉廻其身を避る過急の進退油断ならずと思惟せしが但しつゝどしの刃物三味殺害せんとの意のあさか佐吉の強ちよ追ひを迫らす猶像折柄慌忙て逃ぐる便宜をあらす其處よその儘屈居たる延春が佐吉の袖よ取すがり延「ヤヨ疎てたべいふことありと身を指り寄て止めたり

第十六回

延「斯く見顯われし上らるゝ所詮此身の如何様も刃よかゝり殺さるゝもさらゝ恨みんよ

うのきけれとれせえてのあの由さんだけいどうぞ助命て下さいこれ一生の願ひです是非あゝと絶りつき嘆くを佐吉の無解も拂はず不肖ぶせうよ身とひらかせ刃を席薦も突立て佐「ヤア野郎汝が脇腹をト穿り流つ血液で此我が汚泥顔を洗ふ氣々大膽緯をしやアがつてまだく命をかばうのかと罵られて由次郎怯憶くしなから悄然と膝折敷て兩手をつき由「面目をさき此場の不始末消え入りたき處存の外何とほ説のしよりのきけれといひつひした出来心斯ふした情由があきたでさく唯平常からあきたといふ立派な侍亭主がわるとも知らず兄さんとのみ真に請て見ればみる程うつくしひ年の若い御師匠さんやめ暮しをさせおくの遺憾をの身勝手な案じからして煩惱の犬よ退りれて宵毎も稽古をかせよ通ひ來つ御顔を見るのがうれしくをやさしくいつて下さるのでつひしか御心易立て無分別よを御一處よ蚊帳も兼しが身よくらひいゝ解さおかし編子の帯まだしをそれが不義いたづらを現し犯さぬ身のあかりなるふことあら佐吉さん此場の事は限り夢とささつて延春さんをも私も無事よお許しなすつて下さらば世を變ゆるとを思ひ忘れすいかで〜と聲ふるわせ詫ふる言葉のいらへいせで佐吉の刃を振りあげて 佐「汝謔言とふり舉れば叫やと許り

飛退る由次郎をキツと見遣り 佐「斯ふせよや腹はいへかぬれと二才野郎をおどきけおく切
て捨てゝをはじまらちへコ、どふしてくりようハテ間夫の七兩貳分は世間さつての相場で
を汝が命のそふ安價の濟されちへ三百兩で賣としやう夫れで否から刃の錆かけがへの子
へ命の遣りとり有遅々々せすよ性根を決めて挨拶せよと叫り立て菜刀を右手よりつゝ、膝
り寄る威喝は戦慄る由次郎 由「そんなら大枚三百兩で命と助けて下さるのか 佐「チ、汝が
親のれつさとした身代と聞て居る三百兩での不足だがまけて遣るから金渡せ 由「エ、是非
も子へ然し今とおつしやつての持合せす翌日の朝まで待て下さい 佐「そんならキツト翌日
の朝持て来ねへとひどいぞよ

第十七回

由「ソリヤ言葉をつがひまえた上からは命のかけがへどう工夫しても持てあがり升ア、斯
ふあつて漸やう胸の悸氣が休まつた長居は恐れドリヤ歸りませうそんなら其三百兩で結
局と事が済み言分はありませう内所の耻を世間へ出しませうヤアませませう 佐「ひ
つこい知れた事だ命冥加の青二才無駄を云すとさつさつと歸れと云ひつゝ佐吉は延春と

思ひあり氣よ見合す顔を由次郎のシロリと眺め喘喝さつていゝ出る言葉の端々俄と變り山
「コウ佐印延春おぬしを嬉々いか慣合間夫筒持せうまくしくんだ狂言を思つた盡へいふ
目が立ち三百兩と云ふ金をたどりとい餘りよすぎで冥利がわるいせ蟬の道は蛇とやら此
頃聞けば幾人か此手で甘くぐすりかけ濡手で握む泡く金指をくわへて見てをいられずナト
横合から其金を捲あげイヤサ借よふと思ひ付たが手掛りあくやつとの事で体よのチへ役な
がら厚皮よ商家の手代の由次郎色師よ化けて此家へ入り込み故意とのり氣の色仕掛けよ其
たくらみの裏をかき手元を押へた上からは手間暇いらす其筋へそびいて行くからさう思へ
とサ野暮をいふ自己じやアチへ壁よをいふ通り魚心われ水心三百兩よ及ばねへが鳥渡
貳百兩されいよ我へ借しませいそれとも我を斬る氣から存分よ遣てをらと腕から切るか
脛から切るかといゝ尻をひん蕪り傍若無人の大胡坐片肌ぬげバ刺懸い朱をそゝぎてう
つくしき一面坐禪の達摩摸樣一癖あるべき應力しいの前の店者由次郎との同貌異人と思わ
れけり

第十八回

即時佐吉の由次郎の爲体くも吃と見やり偽擬勢を造るふ奴と頼又猜して冷笑ひいわせて措
 け舌長い寒ひ文句をつらねてを其白痴威を真よりうけて吃驚つく様ナ巴れじやアネへ本名お
 かせへ胆つぶす遊人での誰もしる肩書つきの上州無宿小櫻丹二とは巴れの事だ汝が生腕の
 仕事より素人一座の内會位いで盆庭を蹴返し端錢をバ引櫻らうのが相應だ。由一开を聞くか
 らよやア此巴も名告れば同じ暴雄の甲州生れの長脇刀關西諸國を勝よかけ俠を賣た朱達摩
 金入ある凶状から名詮自諸面壁九年成敗うけ寂寞と樂の永牢を破て婆婆へ出て來つ足かけ
 二年が其間を妾を替へて諸處八方押借ゆすりの仕盡してを強を挫ひて弱と助る俠氣と旨と
 する此朱達摩浮世を座禪床として生死流轉よ心を指ぬ研さわけける根骨骨及金がたけなら
 たて、見よと身構ひおして油断せず丹二も共よ膝立て直し名告を聞バ此方よを聊か愛へな
 きよゆらず思ひ出せば去年の早月長霖わがりの最夜中よ三島へぬける裏街道で人傳よさく
 汝が綽名句。然かも其夜の月澄みて衍の響き物凄う亥中の天よ峠を越し旅籠籠よ引添ふの腕
 よ汝と見たが僻目が句。此方の心付かねども左様知る上の伊豆熊と越中虎を相手として一上
 一下虚々實々句。兩人の敵よ屈せぬ働さ开を陰ながら古祠よ我が旅寝して計らずも親ひ知つ

たる一伍一什句。敵を身方の見識合越中虎と名告られて偶平亦邂逅の談しから其方の評判を
 句。汝が履歴を句。聞くといおしよ互ひよ知つて。句。又を今宵の再會よ互よ較計の裏面をゆく句
 其の魂胆が共よ破れ此のおさまりの腕任せ一六勝負を眼前で。句。云ふよや及ぶと朱達摩金入
 懐後よせし手拭を解ひ見めく菜刀を逆手よ撮て立ちわがれば此方をすかさず小櫻丹二齊し
 く菜刀ふり翳し寄らば突んと互よ身構へ劣らず優ず足場を揺りて且く隙を窺ふふぞ延森陸
 哉と驚き慌忙此場を危ふむ一念より怖しさをうち忘れ疾視あふたる双方が際よ其軀を捕と
 しつ斯の疎暴あり云ふ事あり今宵の事誼にお互ひよ謀りし緯の謀りも得ならず謀らずを名
 告あふたる身の境界水の流れと源の其生國の異よすとを溶れば同じ蒼海の底の流れを汲む
 身なるよ爰よ雌雄を決せんとまけし魂をことよよる狂き心を白刃と共よ收めて後の分別許
 あらまはしよと奈未與美の妾は思ひ侍るより徒るよ緯を荒立て互よ怪瑕バしあるからバ悔
 ひて返らぬことよころと度胸を据て押しめぬ

第十九回

聞譯たまへ喧々と宥むる言葉よむら胆の一時凝勢のたつか弓張をゆるみて双方がいよ合さ



井上
播磨守
四十五



四十四

ねと菜刀を傍へ置てドッカと坐し意趣もいこんをなさ身あるも輕忍なりさとうち詭る胸の叢雲互はれ真如の月よあらなくて其交際を長脇差よかれ悪しかれ俠とらる壯快さ膽の未練なく彼の金八の此方を見廻り姉子大さよお世話でありし斯なるうへは雜句破落離と思ふ旨をうち明て爰は一個の所望あり不承知かわらねどもお世話の序次は姉子が紹介今日から其方を阿兄と稱へ拙劣な野郎の此己を義弟分よまて下せへ兄といわると丹二じやなけれど何えろろれば望むところ今宵の始末を水も流し洒然奇麗の義兄弟因みを結ぶしよは幸ひ宵の酒はあり肴はあまく無造作に一献汲まん疾くせよと延春を促して心措さなき友垣のうちくつろぎし團坐あり金八の小膝を進め今はた思ひ出でられる一條の物語あり憚りなきよあらねどもよこしく口を欲み後日は斯と知られお隔意ありと思われんつゝまず語り申すべし姉子をそこで聞たまへ始を云へば爾々あり終を云へば個個々々と説出たる長物語をいかよとするよ此朱達摩金八が曩時甲府に在つる日丹二が所爲よ齊しくも賭場葛藤よ人を害めいく程もあく捕縛され永らく牢屋よ繋がるも元來賭徒の喧嘩沙汰ゆへ頼も死刑よ處せられず却つて牢内名主とまで歴のぼりつ我意をふるつて在るものよ今一

同娑婆よ出で生前の思ひでお希有の暴行をさし見んと膽太くと思ひ立ちよりく入牢の悪徒を語らい折われかしと待つ程よ去年の早月の梅霖頃夜毎風吹き暴れて年並よなき天氣ぐせを最屈強と或る夜のこの半護の暇を窺ひ謀合せし徒黨と共よ牢扉と徹座よ打毀ら絆十二分よ仕透つゝ遁れ出でたる其夜さり破牢の徒黨南道連れみ途中まで北りしを自他指方を異よして東西よ別れ去りぬ金八獨り知己の方よ立寄りつ僅よ衣服調度を借り受け心的りのあるまよ奥羽地方よ去らましくして有繋よ街道の憚りわれば山又た山の間道より絡路を伊豆よ求めんとし晝夜をかけて急行旅備てこそ只ある神祠よ勢を憩ふて我えらす熟睡させしを小半時愕さ覺れば外方よ地響聞こへて人叫べり風聲鶴唳何よつけ心おく身の殊更よ油断いなきで身を起し戸隙を閉る蜘蛛の巣を掃ひを敢へず只見れば阿兄が兩個の駕夫を相手となして奮激最中要こそあれと窺ひて討らず聞知る一伍一付己がうへさへ云々と伊豆熊よ評判せられまよき機會と肚裏よ諾づき破牢わけくの旅金の事欠け明々地よ名告かけ俠氣の阿兄よ依頼なバ許容の事はよをあらじ左様せんもの雀躍して稀々外方へ出んとする時阿兄はとく早や駕籠をつらせ小半町立去るを呼とめんの有繋よて躊躇しをイテ追いつかんと

踏出す其脚先よキヲくど何かは知らず異く物あり怪しみて拾いと月明り透し見れば
銀杏鶴の定紋を高刻したる銀筭あり開が落主の取よそれと猜するものから又た更ら思ひ
得たる妙計あり轆の鮒の水を得し心地もさこそと心急がれ西傾く月影を踏ッ、夜徹し道を
走り漸やくにして其曉方熱海の里よたどり着ぬ

第二十回

恚て彼處此所の浮評を問ひ試るよ昨夜渡邊の旅宿よ希有の珍事あり開云々ある男女の欠
落よて里人等までも雇立て行衛の詮索區々ありと詳よ聞けバ左おらんと憶測せしよ違ひざ
りさ懸て己の渡邊の旅宿よ赴き亡落人を探るといふ客衆よ遇ふて告げまく欲す要件ありと
故ありけふ言入れバ更でも音信を待わびたる折からなれば男女打深り忙しく我を出迎ひ安
否いかよと問ひかくるを打消して且那よ逢し示辭皆告げん他人の要なきことよこそと無情
を言張るよぞ此方へ來ませと案内せられず長廊下三遍曲つて喫煙より誑言吐いて筒様々々
よ計らんものと寸法を腕よ秘めたる傀儡 函佛も出現バ鬼も出現る出沒自在の魂膽の佛顔
して鬼心早や小坐敷よ誘ふれ且那よやあらんずらん四十年前後の武士が心急れて坐立

ちの辭宜の要なしとくこへと小手招き眞平御免と間近よ進み口よ任せて偽名を告り
先早や懷中を搜りて昨夜拾ひし簪を彼の武士が眼前よ示し此品定て御見覺あるべし左い
くさふろらかと問れて駭く武士が開のまがふ可をさ姪なる者の所持品あり何方より獲ら
れしおや詳らよ説ね如何よぞやと膝を前めて急立つるを左様こそあらんと思涙よ語づき言
葉巧よ陳するよふ己の昨夜必需き要事ありて三島方此里へ夜徹しよ赴く途中一個の旅人が
附添る旅籠籠の峠よ休憩を見受けたり開が駕擔く夫の像を見知りの者なれば一言二言話し
かけ煙草の火素かりつゝを何心なく行過て十町餘も來し頃か山坂トりの道の傍へよ此簪の
落てあり純銀といひ定紋の高刻あるの郎の此邊よ見なれぬ品故先よ出遇いし旅籠籠の主が
落せしものをあらめと大方に猜するもの、追つかけて手渡しせんよを路隔たれば行路を急ぐ
我よのしがたし打捨て去せんも有撃よ惜しく開が儘懷中よ藏めつゝ今曉しも此里よ來て聞
バ云々の緯ありしと確と心よ符合して黙止べふをあらざれば斯くの推參仕りぬ心懸りの簪
を返へす便宜を計らず得しといと嬉しく候ふあり恥と請收め給へかし意趣ほつて拾ひし
ならねば悪くも氣取りたまいぞと掌中よ打のせていざと斗りよ差出すと彼の武士の會釋し



て受取もの、眼を觸れず小膝を撥とうち鳴らし聊か愁眉のひらくる体にて傍への従者を
見廻りつゝ、

第廿一回

鐵の行術を探るべき屈強の便宜と得たり彼等の昨夜初更過は此地を去りしものあるべし借
てこそ近所又追手を走らせ時後れての詮索だての詰餅ありしかと嘆言がましくつゞらさつ
更な思案の体にして未だ兎角の言葉を出さず緯の意のどく猜せしかを金入の故意は腹を
告げ忙しく席を立まぐせしは彼武士の急は喚いとめ其方の都合を言々すは斯ふ本事は言出
さばいかい思われんか知らねども知らるゝ通りの仕詰されば試は意見を問ふべし御身の現
は彼の旅籠籠を見かけられしのみならず开が駕夫も見知りありと在あらんより彼等の行
術を問ひ糺し便宜の夥多をあらんか我爲は只今より發足て彼等の跡を追かけあは足弱づれ
の路をかゆか未だ遠くへ去るべからず捕へ歸るは難くもならん枉て此儀を承諾れよ骨
折料の所望は任せ與すべしと他事をさく聞ゆるよぞ元より望む所はあらねど开を氣色よ
顯りさす却て困せし尋思しゆ漸やくは答ふるよ且那の御所望を理りされば無解は解せん

ようはさし勿論詭らわれし所用の仕果て徒手は三島へ歸るされば何をするのを切辛らと浮
世を渡る糊口とさればそこは頓着はひとは幸ひ某の走飛脚を稼業とさせば道中筋はいと
明瞭く追捕の恰がらゝ網裏の魚か籠中の鼠をとろふる心地ぞせらるゝといへ愛は難儀
あり彼の阿嬢の己を見識たまわねば連戻さんも賺すよを又た強るよを方便あからん加ふ
らで同伴し夫を阿容々々歸るまで争がふは適當り愆る時の若干の金を手切は損ませて該を
容易に纏むべし荒立なば家の取理緯緯便は計らわんそこの用意をあることされば某の
外は一個御家人を共遣わされまじきやと臨機の方便説得て理われれば彼の武士の御回ひ
打領さそいよくこそ心附ぬ我どもそこ迄は思ひされと所用もあらんと今朝未明は早飛脚
を江戸に馳せ緯の大畧を文通し心怜たる家僕は金員若干を携へて片時を早く馳來る様言遣
たれば遠路といへども纏てい來べし來らば彼を同伴させん其意して待ちねかしと始終思ふ
坪は欲りしかば仕遂したりと肚裏は喜び利さへ酒饌の饗應は餓たる腹をつくりなほす愆て
を永き夏日の生憎は待ちわびてやうゝとして日陰傾き海を隔てし遠嶼のくろみわたりて
水鳥の干瀉は騒立つ黄昏時江戸表より早駕よて一個の若黨來りしが言短は意を得させ我

もろ共お用意せし早打駕籠より乗りて三島を指して疾走る程は其夜の中は同所に着たり
 已れ路すがら案ずるより斯く計り遂せしうへに欠落の行術をバわざと探り骨折賃を食ら
 ん手ぬるくをわり面倒あり頼み仕果んと決するものから彼の若黨は欺き云ふよふ汝を既
 知らるゝ通り欠落人は雇れし駕人足は吾見知よて當驛の者あれば彼等も附て走跡を問試る
 は便利されば雲時こゝも憩ひて待ち不我疾く行て探りて來べしと夜徹の辻酒店に彼を待せ
 て己の獨り表へ立出で馳て二個の駕籠をつらせ此處又戻りつ再び急を欺きいへらく欠落人
 等の此驛陸を行過て左よ曲る村落路あり开を今朝しがた歩行さしと見たる者あつて駈
 げたり恠れば其行先きを大畧に己が胸に勘付バ疾く彼方よ追附ん夜路は勞れし熱海の駕籠
 のこゝよ去して屈強ある新手は代んと心企み雇ふて戸口よ待せありイザ赴かんと行立あ
 ら筒茶碗は二三杯冷酒をわをつてホット一呼吸つぎ敢ず若黨を促したて、馳出るよ東の空
 の早やしらみて彼地此地は聞ゆ鶏の聲は行路を忙すれば意を得たる駕夫の章駄天走り街
 道より横よされつゝ行と五町餘りよや人里離れし郊原よ出よけり其時金八の駕籠の簾を掲
 げながら四方を見かへり前後は人影なきと幸とし聲ふりわけて云ひ出る道はまた例の

次回も譲らん

第二十二回

「無造作料理てしまへ」と呼わるよを課し合せし破戸の駕夫彼の若黨が乗たる駕籠を一搦
 りゆつて擲げ出せば不意をうたれて横ざまに轉げ出でたる若黨を起しもやらす左右より撲
 搦く手足を捉らへる後方よいま壹人が手早くも手拭投げ掛け嗟乎と叫ぶ咽喉もとよ纏ふて
 グット絞つくれバ二言と得いわず呼吸絶へたり斯くと見るより金八の立寄り腕ひ奴だと死
 骸を蹴返し懐中よせし明巻を攫どつて紐をとくく改め見るよ百兩包二個の外時用金の三
 拾四五兩錢若干のあるまゝ、又端金だけの四人の者よ分ち與せ濡手で安房から關八州賭場か
 ら賭場よ丁を半年まだそる本來無一物最うはとぼりをあるめへから何かを味ひ仕業をあら
 ふと繁譚の浪華へ此春頃移り住んでの今日の仕誼すつかり賭ける魂膽が斯ふあるからよや
 フ大笑ひとの云ふものゝ姐公よハチト氣の毒な今の話し夢だと思ひてくんあせへと一伍一
 什の物語傍へ聞せし延春のおすみの有繋よ愕き嘆じ胸の有耶無耶たつ霧のはれぬ思ひを今
 更らよ繰り返したる小手巻の便りも絶へし吾妻ある過ぎよし緯と聞くからよ思ひくづ折れ

女氣の弱る心を己よひき立て莞爾と笑みて借て云ふよふ私しが家出をせし後の話を聞くの
 今が初めてとふせ不孝の阿婆摺の女々敷何と案じまじよふ女俠客と生涯を派出よくらす
 が身の本望といへ氣後れ才鈍く意苦地のないのハオンは我身で愛想かしのとふして
 見仰た姐公阿嬢さんかたわしかけ二年たつかたぬ今夜のよふ十遊ひ仕打の喫積升せ。
 ろんち事はどふでもいゝがチイ朱達摩斯兄弟もあつたらへは一番延春を種子よつかひす
 つしり資金よありゆきてへがいゝ考とあかるふかど是より種々の悪手段と三人の課し合せ
 押借ゆすり何くれと縦横ある處行と専らよあすをのゝ追捕の沙汰のゆるかせありし故
 あるかな頃しを文久元年よて覇政弛ぎで革命の兆もこゝよ著しく王政復古の時來り慷慨の
 志士各所よ興り尊王攘夷の說を主唱し浮浪の劍客四方よあらわき刑法を籠絡して天誅の慘
 劇を演するやど世の物情の恟々たり就中く京都三條磧へ等持院よ安置せる足利三將の木像
 を梟首せる臨機の權法頗る人心を煽動せしめ昇平無事の高枕邯鄲榮華の夢の跡錦繡絨りな
 す都下巷を修羅道場と成りを換れる世の景況と時の勢を好機會と鳥合の博徒横行し世を憚
 らぬ亂暴狼藉うたてかりけることとをあり

第二十三回

卍字欄上寂として艶歌妙絃の音を絶へ翡翠簾下恍として金釵紅裙の影をさし燦たる燭華の
 いつを散りて人初更より夢よあり塵巷の往還途絶がちよて唯鴨綠の河水のみ潺々と流るゝ
 此處三條の河畔よて櫛比の畫樓宴席のあれどもあさが如くある空莫たる景況は前号既よ
 説きおける世の物騒よよるものか夜々虎憤豹怒の浪士繁下何處となく徘徊し鼠徒豚類を乃
 殺しこれを天誅と志を唱へつゝ此處なる磧へ梟首て开が罪狀を鳴らすを常とし殘骸餘血の
 絶へ間わらで比叡下しの風腥さく鴨河の流も時として水紅ひふ暮れてゆく唯さへ哀れの秋
 の夕幽鬼啾々の音を聞かずば陰火閃々の影を見る开が慘狀ののぶる難かり今宵も此處よ
 白刃閃めき斷頭場裡の鬼とし化せる血痕満り顔色暗蒼且尖とある眼眦の裂て喉らぬ憤怒の
 容貌月代の跡生ひ茂りし廿五六の壯夫が首級を切竹よ貫ら扱て高く掲げし开が傍へ罪狀
 云々の板札あれど夜眼よの睨と見解がたかり殊に今宵の宵闇の穹たやよく雲立て雲間頻
 りよ迷出る電火のさらめき矢よりを早く颯と落しくる雨脚の篠々束ねて擲るよひとし雷さ
 へいたく響り騒立び轟々が下と胆太くも忍ぶよ便り得んとせる爰よ壹箇の斬者あり彼の切

竹は貫ぬかれたる首級を手早く捉り下し、響り口は嘴へつゝ、初來方より去らまくす時、彼處の木蔭より覆面黒衣忍び装具の武夫が突然と躍り出で癖者待と一喝めいて帯處とつて兩歩三歩後ろざまより曳き戻すを呼吸を滞り癖者の腰を捻つて丁と振り切り見かへりおから突出す拳の術の誤たず猶凝つまゝ競ひかゝる彼の武夫が臍腹を撃たし徒倚ぐ双脚踏み迂り後方より撞と倒れしも捕遁さじとや用意の呼笛膝立て直して一聲高く吹たつれば俄然としてより騎す丸胴の火影と共に積の彼地此地に埋伏せし兩三人同装具の武夫が異一文字より走り來て途行を障へ遁しらせじとすまふたり恚くあれと癖者のうちつとも凝視せず腰なる一刀キラりとひき抜き面もふらで切てかゝるを心得たりと彼方の武士一同も抜きつれておつとり圍んで撃んとするを右も應り左も挂へ一上一下虚々實々實際に練たる彼の癖者の太刀風するほど進退の輕視りがたくみへしかば最初の武夫を力を併せ背面より撃て出づれば癖者は前後より敵を引受て戦ひいよく難儀もえて三面六臂あらざる外に遁れ難くぞ見へたりける

第二十四回

さればよや彼の曲者の梟雄を初め似す稍々うけ太刀とあるまゝ、急激雄の誰彼が前後と争

ひ我撃取らんと踏込みく伍列を崩して進むを機會とし討りしものか忽地は彼の曲者の鬚然と畏を遁れし脱兎の如く頭上は閃めく刃を潜り脚下を拂ふ刀を跋ね越へ見るく圍を脱して積を南に馳せ去るよぞ彼れ遁してはと追躡る時は雨雲れ雲動けと星影のまだ疎々として行途のくろみて睨かならず彼方へ照らす丸胴の火影の中は一反餘り早や逃げのびし曲者が脊影のみ空しく撮影猿猴の臂をかるるとを捕ふ難き水の月アレヨくと追躡るも其陰あらず見へたる折から向方の陸の邊より誰どの知らずヤト聲かけ打出したる手裏劍の狙いの反れず曲者が今はた馳する前脛を裏かくまでと突裂たり深痕いいかで堪ゆべき俯伏し撲地と倒れ雲時の起を得ざりけり其時陸を下り立て破へ來たる人影を近寄まゝ、但見ば是な浪士の此隊の長年頃ハ三十齡を僅かゝ越ると覺ゆ眉秀で眼圓は耿々と眸の光り人を射つ唇朱く靑青かり處より南蠻鍔鎖の纏身を透間もさく傾具して綱を盤れる蜘蛛も似たり表の唐織ある段綴筋の廣袖の單衣を襦短かゝ被さしたる秋葉を流す飛泉の如し腰より朱輪の大刀を跨たへ足より秩葉の厚鞋を穿ち悠然とまて立ち出でし、速勝雄々しき武士として、开が膽力をさこそと思ひる此の時早や追躡來し浪士等の彼曲者と嚴と縛しめて異口同音よ



隊長が早速の手柄を賞賛つゝ、各々會釋をす程、彼隊長も一同が働さゞ慰勞つ續て傍への
 轆し石の表滑あるは腰打掛け薪火焼せつ面前へ彼曲者と曳さ据へさせ屹と疾視て措ていふ
 様汝の既首としなれる博徒朱達摩金八が同類からん彼の吾黨の義名を騙り所々の金穴富
 家も押入り軍用調達を辭柄して米金を掠奪るよし探偵も因て詳らかも知り斯の天誅も處せ
 しかり开が同類の巨魁と頼む小櫻丹二と名る者の追捕嚴密も沙汰するも未だ縛し得ざるよ
 り恠るともわらんかと手配おせしよ果せるかな我推量も違ひすして彼夏虫の火虫も似たる
 諺も洩れもせで自から死地も陥りし天罰思ひ知つたるか博徒の張本小櫻丹二とい汝から
 んと問ひれて駭く氣色もなく彼の曲者の其方を仰見察しの通り我許の該小櫻丹二あり義弟
 が首を奪ひ返し埋葬せよと斯の竊み近づきしを其絆からず生擒れしに微運さこそと我か
 ら悟り疾く吾首を刎ずやと從容として死を待つ待の嚮も朱達摩金八が死も臨みて怒髪逆
 立ち罵詈訾もくの爲体といと異様も見受るものから匹夫の似氣なき覺悟と彼隊長の肚
 裏も稱へッ、やをら身を起し有撃の博徒の張本と仰る、たけ潔よき开が覺悟よめんじ人手
 を假らで自から斷頭いたしくれん斯く云ふ我の此隊の隊長乙骨太郎國香あり觀念せよとい

一さるる鞘をばらへば明晃々夏を寒き水の刃右手に引下げ突立てたり丹二の頸を差押へて透巡倚り纏の手際のとく知りぬ切口美事よすつかりやりチト些も怯まぬ大膽と腹を見認て乙骨太郎イザト前を振翳す太刀の名作をの研手の熟練一刀兩斷面前と自外の派士等拳を握て見つめたり時は閃めく電光石火照と鳴たる太刀風は骸の彼方首の此處血煙たて、所落せしと思ひきや拳狂ぬ微妙の刀尖八重よからげし縛り繩フツト断ち切り丹二の依然と屍居たり緯不用意よ出づるをのから繩目の解けても解さかねる此場の仕儀を怪みつゝ見廻る丹二さをもこそと太郎の刀を鞘よ收め以前に如く腰打掛け莞爾と笑みて情て云々様義名を騙りし小櫻丹二の今早や誅戮を加へ畢んぬあれども我父た造化神秘の機手を假らで現せしめる小櫻丹二の無靠再生と云まくのみ斯ふまでよての猶疑りんが方今國事多端よして我輩が死生を忘れ國よ尽せる赤心の今更よいふを要なし憊る時勢よ際りての豪胆決死の聲よろ頼みなれ汝が一死を輕んずる大膽を見るよつけ可借壯夫をひざよ切捨んことの惜くて斯の言しものよこそ汝志を飄へし今より我隊よ隨身し一臂の力よ竭せかしと真心みへて説諭れば丹二の俠氣よはやる性故斯く我を知る者の爲よ一死を措ひよたらず自再生の恩義を

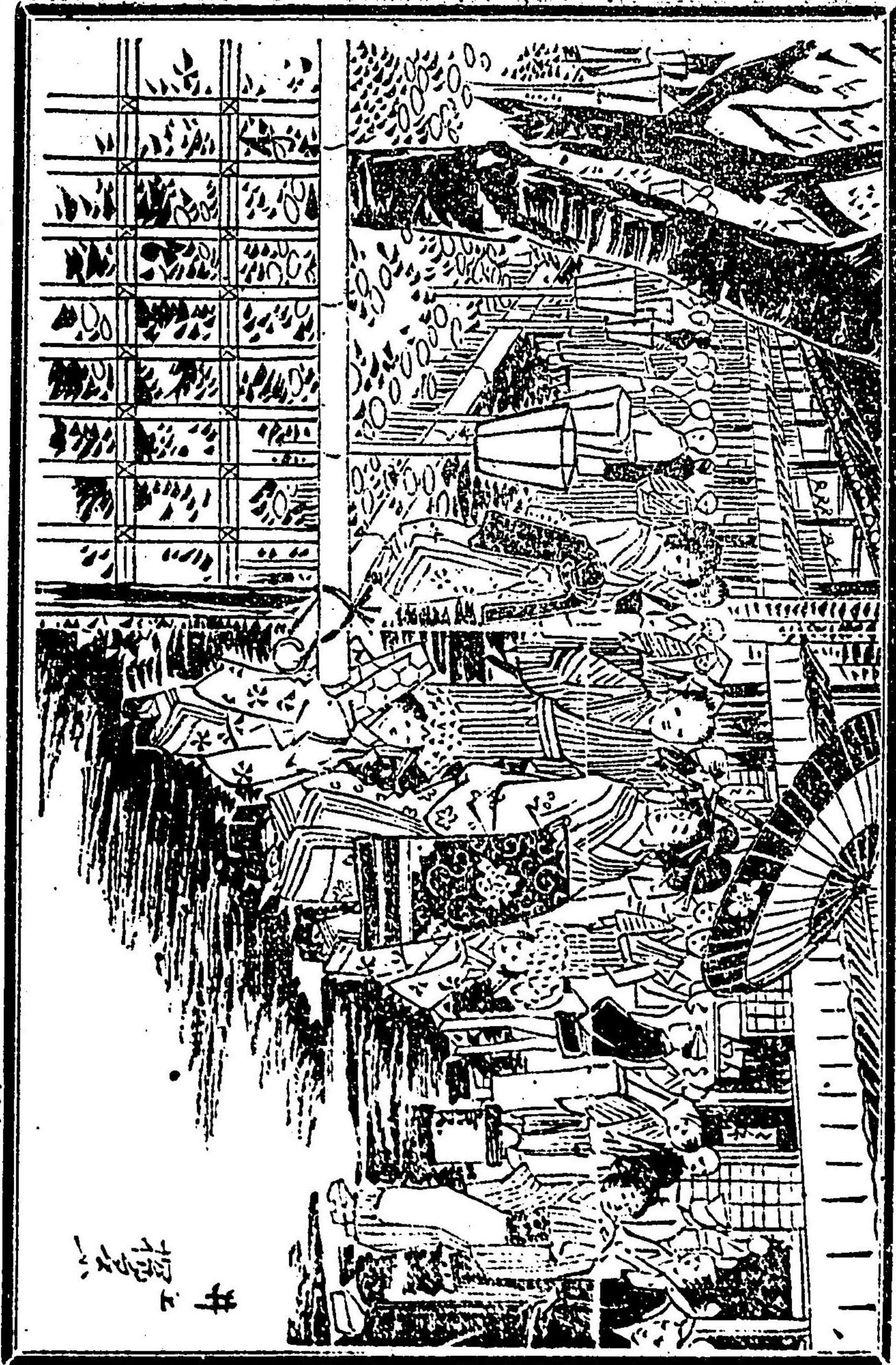
あれに承引ばやと思ふをの、現は義弟の仇讎鬼せん角せんと猶像しが忽地よ思ひ返し義弟よの既よ志しを致したり不諾ことかわと心よ決死再生の恩を謝し一臂の力を盡さんと自承すれば太郎悦喜斜からず頼の承引満足せり今より我の關東の動勢を探らん爲め旅行んと欲すれば汝も直よ供すべし心得たりやと他事もなき言葉よこれを辭かね家よのこせしおすみかうへ思ひざるよのあらねども進退ともは儘やらねば未練として再び思ひす彼朱達摩の首級を請受け深痰を堪へ歩行ゆ、雨ゆへ水増りる鴨川よ水葬せり丹二が疵よあやむを察し太郎の藥籠を忙しくとふで、奇藥よ與ふよ即効殊よ著しく頼よ痛を忘れけり憊りし程よころくと五更の鐘の響くよなん太郎の指折り算へつゝ早や詰且よ近付きぬ恐ぶ身柄の夜明ぬ先きよ都を出で、急ぐべしと丹二を促し大津の方へぞ馳せ去りぬ

第二十五回

蜀山翁が粹哦よ全盛の君わればこそこのさとの花をよし原月をよし原と其全盛の君がうへをうつし出ださん艶文字を烟花行情よあらぬ記者の筆よ物せんよしをなく斯くやあらんとトバのりよ想像する旨を書いつけり實よ不夜城と稱ゆある芳原へ雨の降る日も風の夜も



六十四



井
上

六十五

通い曲輪の標客が同じ榮華の夢を慕ふも千差万別一様ならず情趣に遊ぶ買情的なれば色界
 のみ耽る戀の奴隷あり粹たらなき吳客を送る昨日の花の辻占り今日のかきく夢と消へ又
 た野暴奇越客と迎ふ雁來燕往定めなき時雨は袖とぬらせを笑顔とつくる花の照り低りの
 愛嬌を見せ浮き雲がくれ朧ろげは月の眉の翠めてをうれしき逢ふ瀬の夜半の襖は戸隙の風
 を生憎と嘆つ其糸竹の勤の身悲喜をくくの魂胆に入り山形は二星松の位の太夫より局
 女郎はいたるまでなくて叶ぬ客衆の應對文のささの口紅の人情をまどとし朱羅宇の煙
 の薫りよの魂魄を飛ばしむ手練手管の幾様なるは花天月地の情態あらめ閑静休憩つ慶應の
 未つ頃より世の戦國のごとくよして蒸雲天は張り弾雨地は瀝ぎ去をいつしか空も晴れたり
 照す月日の明らけく治る御世を迎へつゝ人の心を寛裕くなり太平謳歌も理や雲去る後の月
 影とさやか見へ雨のぼしたの花の香とかぐわしく覺ゆると都て浮世の人情よて花の廊柳
 の巷其頃をけて賑ひしかりき爰は芳原大雛命兵衛大黒と唱ふ青樓ありそれがかへは花鳥
 と呼ぶ娼妓の顔は三月の櫻花に似て雨を厭ひ風を恨る風情あり姿は秋夜の新月は優て雲は
 蔽われ罷は消さるゝ歎きあるが如し其性ことと華奢を好み意氣地つよきを不可思議あると

煩惱の色界は身はありながら殊勝もも浮屠を信向し暇ある時の念珠をつまぐり彌陀の稱名
 を唱ふを常とすされば延年の春を契る玉町は植る花の色は色即是空と悟りけめ後朝の別れ
 を惜む淺草寺の鐘の音を諸行無常と聞くあるべし猶その心旨を猜すればかくなん浮世を觀
 せしか「有漏路よりむろふやしなふ早咲のかりなる色のとかあさいまどろまで見る夢あれ
 やあらべて閨の木枕を碎きて見れば花をば春の空をもつ雪や氷の下紐をとくれは
 ふちと谷川の水は迷ひの月の影有無の二ツをとなれての心よかゝる雪をなくきたらすさら
 ぬきぬくゝのわかぬ別の鳥鐘をうらむることもかか空は何が残りて罪となる文字よかゝれ
 ぬ睦言の教の外の傳へて墨繪よかかし松風の音」よきなん昔し禪機を悟りき名よし高頭
 の色街ある地獄太夫が唱歌よして彼の花鳥と此地獄が心趣を慕ふのあまり开が風采までも
 さらふよや別は情由ある事なるか常は用ゆる補襦の模様は我から好みつゝ異様も野晒し
 の觸體は尾花を添らい縫帛せしを身は纏ひまより誰れ云ふとさく花鳥をば野晒太夫と呼び
 そが名の云ずあるよつけ自身を又た呼ばれる他人との思とすしていらへをさすの慣ひと
 ありぬ奇を好む人心まして標致の優しゆへとひ来る客の絶へ問あかりき

第二十六回

秋が早や冬近く枯嵐は吹晒らしたる月ひとつ河邊柳は水鏡のうつらふ夜寒を肌よし
 幽けく音す紙砧いと物寒くある鐘の陰よこをりて聞ゆる折り只ある橋傍は悄然と獨り佇立
 ひ艶女わり姿の花も心から夜半の嵐は吹き萎れ匂ひこぼるゝ黒髪は肩は掛るを妖嬌お柳の
 糸よさを似たり二度三度吐息つき思ひあり磯よりうづ波の胸の悸と押す手さへ嬌げは見ゆる
 嬋竹の色は惱める風情よてあやよくふ派より落る涕の雨は微妙の袖と物かひ腕たを絞るべ
 かりは哽かへり音よこそ泣ぬ空蟬の身は憂事のまつわりて解きかねたる玉緒の乱れそめ
 んし玉篋はぐれし髪よ力なき憔悴し姿を見かへれば我から怪しむ影ぼろし薄き縁よしの簾
 木か葉陰は洩れし露の身の藻よ住む虫すらちゝと戀ゆ子として父母の慈愛報ひを得せで刺
 さへ身のいたづらよ此の日頃家尊父母のかん嘆き壁へていりゝ夜の鶴燒野の雉子ひとり鳴
 く吾罪劫を我と吾良心のせめは悔れども斷ことかたき執着の羈よ狂ふ意の駒は釋き易から
 本再び思ひ出でられつ我を忘れて獨語よふ任せぬもの人のかへ盈れば虧る月を見ても
 去歳よ今年をかひらぬをかり果しり吾身のうへ今宵過さずうたかたの泡とし消る身なり

どの夢よを思ひ計らざりしいかある星のたゞりやら生涯此身と任したる良人が都の三條よ
 て無慙よを浪士とやらへ捕へられ刃の錆とあられしと人傳は聞く其悲しき若やと思ひ且暮
 の悲哀の中よ日を過し今日まで待と音沙汰なき生死の峰上隔てし山鶏の雌雄としされる
 ものなるか哀別離苦の誰人を脱がたき世といゝながら強面をのり蜻蛉の命よころとうち
 嘆くあけきの霧の籬よは忍れぬ身ぞ形なきいつまで物を思ひんより身を淵川よ沈めつゝ我
 罪劫を河水よ流さばのちの世頼もしく現世の苦艱をまぬかれんとかくせん覺悟さわめつた
 どりつきたる死出の河今際よ物をおもひじと思へどもをよ父母のこと亡き良人のうへさ
 へをわやくよ思ひでられ縁返したるかだ巻の其縁言と愚痴ありきと涙香こみ我と吾弱る
 心を勵まして忙しく走りのほりたる橋の真中の欄干よ片足かけて見下せば折から出汐の浪
 さわ立ち黄金を流す月影の彌陀の淨土よありと聞く佛の御坐の光明かそれかわらぬかと計
 りよ浮世の月を見残してわれや真如の影頼むいとくゝ西の天よこそ導きたまへ彌陀佛と唱
 へを敢えず身を躍らせ夢の浮橋はきれつゝ泡沫夢幻の境よいりぬ

第二十七回

おいらんお氣がつきなんしたかほ眼が覺えなましたかとゆり動かされ夢の行衛の野晒木夫
 駭きさえて擡げたる枕の邊に新造浮橋寐起の顔をさし覗きおいらん何か怖い夢でも見
 ましたか大增苦しそふよおびへなんすから起すしいしたと云われて氣着く娼妓野晒し今
 曉しを未明に早飯る客を廊下より送りすて飯さよ見かへる欄子窓隙より天の霜曇り斑ら
 く曉星のさへたる影の二三つ四つか五つを重ねたる草履鳴して不如意を運ぶ素脚も冷
 徹り朝風凍る寒さ堪へかね再度をどる吾部屋の巫山の衾を見し夢の行衛のやち雲とな
 り雨と奇りしか知らねども今の娼妓たゞ獨り鴛鴦の屏風の圍へども比翼わかれし片枕又た
 寐の夢を結びしが開け往事の正夢までありしなりかく思ふものから浮橋を打向ひ妾が今
 身のうへよかりいした悲しい譯をありくと夢を見んさすすから夢語たのでありんし
 覺ての後も何だの夢の心地がせられいとホロリと離す一平湯は無量のゆへあらんと猜ひ
 するものゝ慰めかねし浮橋の用をかこつけ次席へ立つ跡は娼妓野晒の火影幽けき有明の燈
 かへげてむつぼれし寐覺心を忘れ卿烟もなしてをあややく見し其夢から往事を思ひつゝ
 けて忘がたく吾身が渾華ありし時二世と契りし良人をなくし悲哀の餘り淵川も身と沈ま

せし其夜の有様今見し夢の如くよして其折絶し玉緒を喚びかへせし正夢の淫橋ならで河
 口よ夜半の沙先漁火して獲物あらんと待受し漁業夫からち下す網を掛りて救ひ上られ開が
 介抱し蘇生てもあまじ捨たる玉緒をとり留たるの却因の縁ざるものかとそら怖ろしく再度
 死なんと思ひしが又た考がふれば斯く救われて存生うへに今一度吾妻の天よ立歸りそこよ
 在ます家尊家母のうへをも問ふて其上よ死すとをあとか遅からんと惜からぬ命をがらへて
 吾妻へ下る都合を謀るよ問ひ談考をさす人あらねば心ならずを开が以前にさ良夫が手なり
 し某も囑托しより又も此身よふりかゝる災難の彼の某恩義を忘れ吾妻よ歸る便宜とて言葉
 巧よりまゝと此身を誑し京の島原の傀儡を妾を賣しるなし开が身の代を捜さらい何地と
 んなく出奔せり恠れは不幸の其うへよ不幸を重ねし事あれば歎くよ餘る次第なれど此折妾
 の性根を定めいかかる難義のかすくを凌ぎて一端思立つゝ吾妻行をば果さばやと鴛の浮
 寝のうさ竹川も勤めあしつゝ月日を送りぬ

第二十八回

時しを世の中騒々しくことよ東都の戦争の巷よあらんとこの世の風聞かくれなし开を聞さる

がらを縵子の盤身を焦すのみ詮をなく梢へ色かゆ花紅葉二星霜あまりを過せしが漸やくよ
 して便宜を得たり開の東都より此地へくだれる是眩某が遊女を彼の地へ抱へ歸るよし告る
 者あつて知りぬ我身よとりての盲龜の浮木優曇華の春待ち得たる心地せられて頼も樓主よ
 請継り賣かへし身の代よて現在の年期ぞ濟一東都よ其名月花の吉原よこと住みかへしも
 吾父母のいかよやらせ給ひけん音沙汰たへて聞よしきく期したる絆の書餅ありし开を理
 りや徳川の流を汲し家邸の蠶の餌木生ひ茂り苦者樂を待く種ながら無茶も飽ふ素人が訛
 りがちなる茶つみ唄京よ田舎を見る景況よかわり果しを諸客の評判よきよて歎息し斯くわ
 らんよの彼の時よいつと藻屑とありぬべきを悔しきことをしてけりと物思ふ身と夢よさへ
 過越かたを見るをのよと我よ問ひ我よ答へて頼を憐れらうづめつゝ雲時物業じよ届する折か
 ら屏風の外より禿小蝶が聲をかけおいらん御湯がよふさますと喜助どんが觸て來ましたと
 報げて出行く禿を呼びどめ昨日の夕と先方へ耽かよ届けてくんなましたか福本のお菊せん
 よ聞てごらん忘れるときよいせんと云つゝよろゝ床よはちれて起き出るの化粧よりやか
 らるるべし〇何時とても賑ふ巷の夕景色火影まばゆき燈籠よ見世清撫の音をさへて羅々



の色競らば梅が笑へば柳が招く冬としいへど此廓のみ艶陽の景色を粧をへり今宵も金兵衛が高樓より彼の野晒しを買おじみの糸屋政兵衛人呼び略して糸政と稱ゆる大蕪が黄金の花を散しつゝ廓の相場を己が手よ狂おさんすの至盛遊び坐を賑わしの陽氣を撥み客を三筋の糸よかけうかす手練の内歌妓艶吉の腕よわれば坐持ちよ巧者し滑稽洒落痒いところよ手のといく機轉頓知の牽頭の善孝が舌よあり憐る名手の客扱かひよ糸政はとく興入りて腹を抱ゆる斗りあり

第二十九回

糸政「ナイ善孝息つきよ一盃のむがい、足下が奴郎賣の蜜詞提さよい、立てた新案の當世穿ちの面白かしくつて餘程い、思ひす臍をよらせさせ 善孝「イヤ難有し旦那の夜詞とさての鑑定つきの藝的櫻川相傳十八番の一と崇め奉つるなそこでほ盃を飲ま女郎衆の御初會から失禮ながら裏を返へしモシ一ツ獻じ人皇御維新と致しませうナニ押へはナアル底をわれば蓋もあるか是非頂戴な艶ば御手和らかよマヨじりか酌チット散り升チリレットンと忘れつすモシ旦那實は妙と云ふことかおせへ升せニ、ト先づ此天盃添けさく下さつて且

那の方へ捧げ置きそこでモシ旦那色の思案の外とつひ通り世話口よまふしましよふナ此中から熟々惟みるを大增だが胸よ手を當て考ひ見れば親じヤア私より年がうへかホイ違つた糸政「ハ、何と云ふかと思つたらつまらぬ然しかいらなんぞが思ひを懸すして居る女の方から惚られる杯が色の思案の外とを云のかの 善孝「いかあこつてもは挨拶ハハハエモシ旦那考がへて侈るうじろ遠さ古へよわめていそれ景清などが川柳よもある通り景清が三保谷よなる五條坂で彼の阿古屋よ遇ふて二十五夜の戯詞を結び深草の少將が雪風の厭ひなく九十九夜小町の家へかんくをさめた杯のなま優しい魂膽でいさいと思召せ近く例しを鶏が啼く吾妻吉原よ女よヤア憎がられねへ男ありと申たらいわすと都合點でムリましよう 糸政「ハテナ誰の事だ 善孝「ヘエン斯く申す櫻川の善孝トサをふしたらいつもの茶羅ばこと請て下さるまいか正 眞正 銘思案をつめて色よ成たどす譯柄をナヨッじりは聞か連度ねコウくおつやさんくコレヤ女房共旦那だからい、として互のうへを雜句ばらよは話し中せ つや吉「チャ善孝さん人聞きが悪いよ止ておくれ何んば野暮でもおまへさんの色の引合よまでは出ませんよ好ねへのふ 善孝「チャット人前の先づそよいつたをのよ芝居の

濡場のよふ良人杯と人目を眩すもたつかれては外見よくねへ流石は善孝か色だけあつて女のたしきみと堪へ情が強いところは且那見上たをんでありましよふエヘンそりや何の矢んす艶吉さんそをや二人がなれそめり思ひ大津のしへ屋町吉原としたいね戀れよるべの矢橋ふねさしよはちれて力なきうさが中よも樂しみのト云ツ つや吉「アレサ大がいの戯劇ておゝ且那此善孝さんよやア自惚が増長して恥をかいたと云をかしひ話しがあり升よ善孝「ヘンかめへでいあるまいしドレ私くしの誰い心いさと鳥渡とうなりましよる舞さ仲直りよペコヤヤンと弾ておくれヤット待たりあの廊下の上草履の音の儘かよいらん閉月遊花無類飛切鳳凰の舞姿が舞込といふ出場だ少し本舞臺の杯盤狼籍の小道具でもいたづけべしかト云つ、忙しく立廻つて舞くところへ静よ入りくるの桃李物云ふ花の容貌が補綴を名よ因ひ野晒太夫の嫣然と笑み「ヨウ來おましたと會釋しつ糸政が傍り近く坐を占れ俄よ絃歌の調子をかへいと賑はしく囃しけり

第三十回

大門よ今ど入さの月の影水よ二ツの桂男のわかつ刀の鞘ちらで心の星の空さよあたれば

のぼる男氣のどちらをかどの石と岩中よ女郎の萱草花を咲して誰彼の詠めあかさぬ手練の巧者野晒太夫の許へとかよひ共よ全盛を競いめる客としいへるは糸政と呼ぶ相場師よ國香といへる武辨の官人彼とこれとを線筆よ虚を眞の多玉章今宵の武官國香をへ迎へんといへ送りしよいかやしけんいまだ來らで明日を約せし糸政が不時來りて开が機を猜して殊更らよ晝夜仕舞の全盛遊ひ座敷を程よくさり上て情の海か戀の淵實よ人間の桃花源溫柔開裡よ坐を移す客の即ち糸政あり开が膝よをたれ俯るは巫山の神女が夢の面影をのこせし妖艶たる花魁野晒よて緋縮緬よ裏襟つきの寝衣姿の婀娜好み帯だらしなく結び下げ朱羅宇よ薫る返魂香情致をふくみ流眸よ客の顔よ見やりつゝ煙管其方へおあがりおんしとさし出し野晒「明日のは約束でござんしたが今宵のよふ來おましたいづそ嬉しうござんす 糸政「イヤ嬉しくもあるまい鬚印の的込みもあるじやアチヘカ 野晒「チャ何ざんすへ主公やアかつうからんでいゝますから否でせよ 糸政「さうだろう子何れ巳のよふナ落をんり可愛がられねへのが當り前さ 野晒「アレそうじやアおざりいせん御氣お障つたら御許しおんしと痴話をいつしかとけあへバ 野晒「アノこんを事を御尋ねをふまいますを失禮か知りいせんが

御心易だてよまふしいす主公がこんちよ立派の御身柄よきんちすったのは今の御商賣がら
 ですかこんち訝奇事を御聞えふしいすを馬鹿らしうおすが實の私の兄が大坂で米相場をい
 たしいして大損をしたんですよそれこれでも私も苦界よ沈んだのですが主公の全盛をみるよ
 のけ淨世と云ふものいさましくだと思ひあんすといつゝ戀ぐ體あれば系政のうら笑ひ系
 政「そんなら花魁の兄といふ人を此商賣をしちすつて破産をしたのかおいら杯を運がいゝ
 といへばいへ今こそ斯ふして居るものは七轉び八起きとやらだ此商賣の人よ勸められちへ
 鳥渡した話したが己の心苦はこんちよのよと云つゝ片邊よ酔てある猪口の酒をバ飲みはし
 め

第三十一回

襲時又危険相場をバ輸か贏かの一六勝負豪膽で強た時ぞの开を失敗た末局ハ人よ顔向を
 ちらねへ仕儀ろこから他國へ走らんと旅草鞋まで用意いせしを其時からして幸先よくト
 拍子よ運が向いたを吉兆とし今でも年々該日をバ草鞋祭と号つゝ身祝をちす常例だが
 此商業よ限つてハ昨日ハ錦繡を装ふても今日の襦袢を纏ふも知れず榮枯盛衰掌底を反覆と



いふも嘘ぢやアネへ野晒 ほんさんすかへアノソノ兄が不始末もそんなものかと悟るよつけ
 依頼奇き身が悲しくありんすヤ私としたことが主公の心も猜せずよ自分勝手身のうへ
 話柄無おさげすみあんなせうが馴染グいの御免しせんし今を申しす通り頼みの身い身ごま
 すから行未かけて可愛がつてくんあましいつと主公ヤア御客の様と思われず内親のよふご
 まにから勤氣はあれて恥かしいのも打忘れ身のうへ話をしいすのよと媚めく姿を夜の梅を
 さらぬ香粉のうつり香よとめかねたる春心客がまよく手折なるべし雲時談話を閉絶つ
 枕を觸る玉珊瑚簪し撲地と落ちよけり〇乱れし髪を搔あげつ左手は流紙持添へて蒲蓑ぐ
 ると襦をとりいそく來かゝる花魁の野晒太夫と待ちつけて福本と云ふ撥亭の女房お菊の
 小腰を屈めつゝアノ花魁といふ敢へす密々何か語やさて「濟ませんが今宵の首尾どうよか
 花魁願ひ升と兩手を併せ拜まね迄よ再三頼みさこゆるを笑顔でうけて野晒の「どうさんす
 さら私しが胸でどうよか末をつけよう程よ早よ戻りて心配せず御客の機嫌を取ら一時と
 つておいで都合の此方から報知いすよ鳥渡表坐敷にいる艶吉さんよ其辭で用があるんです
 から此處まで来てくんあましと言傳をたのみいすといはれてお菊と打悦ひ「花魁有難う又

た後刻よと忙しく降る段梯子程なく艶吉が来つ花魁何事か用でそかと立倚る肩へ袖
 をかけ耳よ口よせ何事か語るよ諾づく艶吉が思わすホ、と打笑ひそんなら花魁がさしづめ
 敵き役私の役の不相當と此秋の仁和賀でした鏡山尾上の役のしぐさを擬へてとよよか爲
 てみましようが花魁跡で笑つていけませんよと頼みを頼み諾あへば野晒を打笑ひ當時な
 がら艶さんの氣性のいよの感心しいす何しろは客がは客だから目先をさかせて随分とを
 疑た仕打と頼みいとと再度耳をとりかわし右と左よ別れ行く

第三十貳回

廊下はづれの角部屋の野晒太夫が居間よして内藝妓の艶吉が心ありげよ立寄て屏風よ耳朶
 傾けて内の動靜をさすまし 艶吉「糸政さんお眼が覺てよとか願がわつて來たのですがア
 ノ花魁の其處よ居なさい舛かと問へる聲音の内藝妓艶吉されば糸政の身よ起し 糸政「艶吉
 か花魁のたつた今出ていつて已れ獨り誰よ遠慮をいらねへから先づ此方へ這入なよと何心
 なくいふ世辭を好機會として艶吉の「お寢の間をお妨げをすみませんと言あが屏風
 の端を僅よかた寄せ枕邊近く身を進せべつたり坐る艶吉が標致の花魁野晒よ優らすとをま



探りて

た愛嬌の花言蒲翻る、露の風情のあるべし。糸政「ナニカおれは所用でもあるかね。艶吉「ナニ
 これと云ふ用事でのありませんがアノ願つてみて呉れと頼まれましたからそれと申すか且
 那が萬事は通情ていらつしやるから御衣服お持物杯も鹿雜がないと今も其評判を樓下で
 仕まして殊もこの頃お好でお造らせよまつた蒼蛇のからんだ體を淨彫ました金指輪の結構
 の御品だと私が吹聴したら衆諸が拜見をしたがつて私に懇望升から鳥渡拜借が出来ましたよ
 ふか伺ひよ來ましたのよ。糸政「そんな事かありやア色断のと思つて楽しんで居たのよ。艶「アレ
 程の善い事をおつしやるよマア何よしる貸て下さい升か。糸政「珍重する品でもねへが見た
 いといふのか。艶「ハ是非願つて呉れと申し舛た。糸「そんなら借して還るからもつて行きな
 どい、つゝ指輪を抜き提んとするよ指の凝んで左様なくぬけず斯と見るより艶吉が「私が
 抜てあげましたよふとい、つゝ床の上よ小膝を進め糸政よ寄添ひながら兎角ふして升が指輪
 を抜る折しを屏風を颯下はね退て突と入り來るゝ別人あらず敵媚の野晒太夫よして柳眉
 さかづり瓢核の如き齒をくひしバリ面相かへし有様よこのも如何よと糸政の呆れて未だ
 一句を得いわず艶吉の早くもそを猜せしものか遠く駭ら慌忙つるも此處よ立場をうしき

いていと面目失ふひかへ居るを眼角よりけて野晒太夫「コレ艶吉さん戯劇た所作をしなま
 した昨日今日歌妓よむありの身ぢやア奇し麻の沙汰を知ぬいていなますくせよ大反行た御
 客と寐とつて我もの顔所をあらふよ此部屋でこんお仕打をしいすのり到底私を踏つけて恥
 をかゝるふとするのぢやあつせんかへエ、自烈恥と有合ふ朱羅宇の烟管おつとり拍ちを仕
 果ぬ有様よ糸政慌忙ておしといめ 糸政「ナイ花魁しづかみしネへ外方の聞へもあるものだ
 何を艶吉が此處よ居たとして开を彼是とかつう思ひ過し悪猜するよを程があらア譯を聞きや
 ア笑つてすむ絆己の指輪を云々と吹聴した故見たいと望まれそれを借りよ此處へ來たのよ
 野晒「ナヤ馬鹿らしひ主公までがおつう其方の肩を持つて氣休めをいゝおまどが指輪を借
 るをすさまじひ大方彼の妓よやんあつたのでムりいしよ主公が浮氣を程がわりいすと嫉
 妬さ悔ささとりませて叱言がましく怨ずれば艶吉漸くそこへいで 艶吉「モ、花魁モ、太夫
 さん入房後からあなたの御留守よ心をつかす御客と情事がないよしろ伊部屋へ遣入たの私
 の誤りとふぞ堪忍して下さいこんお事が内處へでをしれる日よやア身のうへよも係り外後
 生ですから花魁といへど返事を碌よせで 野晒「こゝの用はわりいせんさ何さと彼方へ行

ささんしとソツケよ言れて艶吉の手持あくを説言しつ疑ひ係りし指輪を戻さ其坐を立つを
 野晒は故意と送りてヒツジャリと障子たて切つたり

第三十三回

野晒「はんよ蓮葉の歌妓だよと憎まれ口も素人よ増りたる嫉妬の念我から胸を焦しつゝの
 れぬ想をいゝ足らでや糸政が膝よとり絶り涙ようるむ聲ふるわせ 野晒「不束の再身ですか
 ら主公よ愛想をつがされて秋の扇と捨てられいすを是非がわりいせんが人もムりいさよう
 よ内歌妓の艶吉よ見替へられてはさんば野暮い私しでも黙止ていられへせんよく考へて
 をみさまし畢竟主公と思へばこそ腹を立のですよ主公やア又た私よ恥とかいせよふと浮氣
 をささるといゝわんまり邪見でござりいす 糸政「コウ花魁いつもの氣性よ似もやらを悪る推
 量を大概よしてもらいたい帯紐解ひた寝姿を現在見たといふでいなし开を彼是と文句をい
 ふのハナト野暮たらしく思われるせ 野晒「私いどうせ野暮でありいすからかまつてくんさ
 舛ぢアノ意氣奇艶とんを可愛がつておやりなんしと背向よあつて物業に吹す烟草を噴沸の
 火焰有繫伊達者の花柳通と自から許し人も又た稱ゆある糸政も苦肉を穿つ手管よは悟るよ



八十七



八十六

七なく斯ふまで我も眞情をつくすよやと心の中は悦ぶをのしすがは纏れし痴話を假
 粧し言解くよふもあらざめれば所用よかこつけ明日の夜を契りて今宵と此儘は歸んとせる
 糸政は件の指輪を野晒し與へつゝ無二ある心ろの證と去右説左論と思さめて心遣して出て
 去りぬ雲時して此樓へ積亭が案内の提灯照させ歌妓辨間も扨従れ動器さ上る客の離る前文
 既も解譯ある乙骨太郎國香もして彼の志望を貫ぬさて維新の勳績著明されは纏て上位の武
 官とまで榮進し衆諸の阿諛尊敬を大方あらぬ富貴の身分となるもの、昔しよかへぬ開か
 性之豪放磊落あるものから閑暇ある時の柳橋の月よりたひて歸るを忘れ又た芳原の花も醉
 ふて華宵郷の遊ぶめり彼の英雄色を好ひてふ語は吾ためお作爲せし贅辭あらめと自負とよ
 いたる慥れべいつしか野晒も馴染て色香とことよ賞るより屢々廊へ通路たへす今宵も消息
 を得たりしより逸早く訪ひ來らんと心構へをせし折から生憎も用事いできつ初夜過る頃福
 本へやうやくも到りしかば早や先着の客あつて彼の君が部屋を仕舞てと聞くは當座の望を
 失ないそが客の我と競あふ糸政あらめと猜するものから殊も心も快からず己が運參を悔も
 せで眞卒擯亭が不用意といゝ罵り數献傾け醉在三味疇癖いよく烈しうありてをてあすす

をの、此日頃得意の上客あるものからいかで機嫌を損ねたと开が席上は雲時歌妓辨間等も
 遇待しめ福本の女房お菊は野晒太夫が許し馳せて今宵の首尾を頼みしかり偕てこそ艶吉を
 語ふて偽せ狂言も角目立ち故意と其坐をしらかせて表面は殆ど不興なるも自然糸政か腔子
 裏も相愛の情を醸さしめ程よく此處を送りだし又も國香を迎ふる虚々實々の苦界の手管
 傍看も計り得べくをわらす閑話休題の國香の醉脚踏跟と他肩も介けられ自作の唐詩もや
 わらん國訛りも聲を可笑く國訛りも吟する譯の次回とあすすべし

第三十四回

腰間秋水排し歎手今夜章臺擁ニ美人と高らかお吟しつゝいり來る部屋も立迎へたる野晒太
 夫が笑顔も醉眸とくるが如く稍々見つめしがこゝも心の察着しが忽ち唾を催ふしつ开が儘
 閨裏も玉山倒れぬ
 冬の夜もがらいつか更闌け素見ぞめさも早や途絶へ按摩の笛をたへとゞも世間も寂とある
 頃刻野晒太夫の寐をやらす部屋との二の間も只獨り坐前も据し小机も白木の位牌を真中も置
 き香花を手向け繰返し抓ぐる念珠も唱ふる稱名回向も時をうつせしが纏て觀念の眼を閉ぢ

南無願生菩提花素天香信士俗稱小櫻丹二殿罪劫消滅往生安樂南無阿彌陀佛と再度三度唱へつゝ合掌なして伏し拜じ我もをわらず聲うるみ涙は袖を潤をせり時しを向ふの裏二階誰が部屋あるが情客を娛しき寐間の陸言や苦界の心苦と三味線又世間を忍ぶしのび駒ときれくみ聞ゆる淨瑠璃「つらい勤の中情のうれと心までうらぬ私しが苦界のまこと縁よ引れてはま弓のやがて曲輪の年わけて名をよびかへておかをじと樂しむかいを七種と選たゝいてなく涙眼をはる雨よとめぬらん 野晒「アノ上るりを聞くよつけ妾も苦界も身を沈め情の賣と心でと清淨無礙の尼法師色の所譯を何のその臙脂白粉を誰がためぞ且な夕なの化粧水縁髪梳つるも阿彌蓋頂我から送る菩提心樂むかいと彌陀淨土二世の契りの一蓮托生聽て曲輪の年わけて名を呼びかへて墨染の淨世を夢と思ひ捨て佛に仕へる身の覺悟と思はずを獨言折から又を聞ゆる上るり「ちればこそ身よふりつる花ふりさ 野晒「身も家出して幾莫つるも苦患を前世の因果 上るり「はかなき縁のあはせとよ 野晒「二世と契りし良人を先立て 上るり「かゝる思ひのあらふとは神ならぬ身の權入が祝ふて落す前髪を 野晒「嘆きのあまり黒髪を 上るり「涙でもんでそりおとす向ふ鏡よ小紫男わりせし像と聞ゆる時しも上

の間の屏風曳あけ立出る乙骨國香ハット駭く野晒をマ、とばかりよ呼びとめぬ

第三十五回

今しを睡の覺より計りす傍聴く一伍一什緯あらしき問状ながら和女が吻づから云ふのみ歎其處の位牌又録つけ在る俗名小櫻丹二とは血縁結がる者あるか左ではあるまじ二世かけて妹脊を契りし良人あらめ借てこそ彼が非命の死をうち歎き後世のとむらひ等閑なく憂ひの川竹の勤めの身よして开が本懐の節操を搦かで尼法子どもあらんとこの至誠の歎言聽得て感じぬ故も兎角ふの心酌なく此坐へ罷り出でつるを和女も問ひ試みて告げべき緯のわれはなり包ます語り候へと言われて訝る野晒が雲時思ひ惱しがあまじいと思しだてせば悪からんと頼み心の決せしより小櫻丹二が身のうへを明白さま告ぐるよなん國香の數々領づきて歎くの要なき野晒大夫死せしと思ひ誤てる小櫻丹次の今亦是此世も存らありトサいわばいよく感ふて解くことなからん詳らま緯の由來を説くべし心を静めて聞かかしと第廿三回と第廿四回も説しものがたりをえりかへし丹次を三條の積みて首刎んとして歎ひし件りを一伍一什を告げし後ち再度語を次ぎぞれより我の關東も丹二を伴ひ秘密も内外の事情を



探偵り東西同黨の氣脈を通ふに臨機の畫策其圖を獲ること澤ありしとて丹二が江都の土地人情を能く會得ての周旋よよるかれハ彼の功多しといふべし爾後ゆく程をあく風雲の機會よ相遇し我は畏こくも錦牌と肩よ翻し奥羽の戦地よ向ひしが此折を丹二を引供し



彈丸雨注の間よ晝夜奔走し風よ櫛り雨よ浴して戦功屢々あるものよ是又た丹二が助よよれるかり斯ふまで我よ隨身して死力を盡すものから我も無二の者と頼めり恁て或日の戦争よ彼の丹二ハ大胆よを獨り扱けがけして敵將の首を提んと敵陣よ潜入りしを候ちよ見顯ハ

探偵り

れ多勢を相手と戦ふものから面部其他は手負まで殆く命も危うかりしが機能く身方の助を得て萬死の中は一生存を保ちたれど痲瘵治ふ數日を費し戰果つる頃漸く癒へたり慙くて我身の今の武官と登用されるれば彼の丹二が功勞を報いん爲ふ生涯扶知し得せんと云たりしは彼の开を望みして却て身の暇を請へり故へ如何と問ふたりしは派華と遠せし妻女ありて开が安否を知らず欲つす思命叛くは似たれどを枉て暇をたびたまへと頻に請ふて休ざれば本懐あらねど留めかね遂ひは其意を任せつゝ金若干を旅用と與へ妻携へて再度當地に歸るべし其折の兎も角を世話し得せんとまで約したり今はた思ひ合すれば派華と遠せし妻としいへるは花魁和女とぞわらんすらん慙る知遇を因縁あらめ左にあらずやと説耽る往事の長物語野晒太夫の聞毎に且駭き且嬉びて夢から覺すありてはしと唧つまで歡喜の泪は咽かへり雲時言葉を得いぬすありしが何と思ひけん右手は携ふ念珠の緒をフット切りア不思のしと投げ捨て形を改め國香と對ひ今初てしる丹二が身のうへ死せるとのみ思ひつめしは今猶此世に存在ふとの再生の思ひをせらる開をどの知らず且慙は彼が菩提をとひ吊りいし鈍まじらよ此うへども主公が情にて彼の丹二は一度めぐり遇ふよしわらば嬉び替ふる

よものを奇し計らいてたび給へと又た他事をなく聞ゆるよぞ國香の兎角も慰めて慙くあるうへは和女郎と身請し一端丈夫の想を懸し事なれば一日たりとも側室と奇し彼の丹二が音信の早晚我方もあるべければ其折は未練なく身の暇をどらせ吾身更に媒妁して芽出度元の夫婦とし得させん承諾べふもやと期を推せば野晒のうら嬉び開ふてもなき仕合よよとよしな頼み奉ると相談頼み調ふものから身請の沙汰の撥とせば糸政が邪魔せんを計られずと野晒よりして主人金兵衛は緯の意を得させつゝ國香は巨額の金を投げ種便は野晒を身請しつ手挿の花とし詠めたる後の物語は如何ならん開の次回を解釋るを聞ねかし

第三十六回

此處は名を猿若の劇場にて興話情浮名横櫛と云ん名題せる瀬川如早が筆下しは意匠をつくせし評判高き狂言を今し幾幕か演劇し畢り但看れば本舞臺の源氏店妾宅の塙として三間の間黒塙上へは窓びがへしよき處三尺の入口さいみの三布中暖簾此下を竹のひらき爰より出入り此上手正面の塙へ切抜き窓竹の格子内より掛け簾下の方見切りの地ざがい路次口建仁寺垣など黒塙の下は用水桶これへ雪の下源氏店と印たる所書塙より見越えの松海棠を

ぞを見せ都て妻宅裏手の模様流行唄も成り山鹿毛下馬橋掛りへ這入る跡井澄屋の手代藤八
 仕打あつて「ハ、ハ、ハ、ハ、まづ香爐の一件をアノ平馬が手形をばどり落したかをもつけの幸ひ
 調度こつちの手練のかけ毘彼の品の我等が手で盗み出し松兵衛をも吞込せていたれば是
 をよしと○此上は邪尸なる大番頭の多左衛門めを仕舞を付るの○ム、○それよは是じや
 て○ト仕打あつて毒薬包と懐中より出し見て「いつぞや弟の海松くいめが何か入用だとい
 ふから態々届た此薬又た戻したが天の與へ是さへ用ればわけは奇しと○其上奴がこゝな内
 へ圍てれくおとみとやら、おとくとやらいふアノ美庵中年増を此藤八が獨りじめ○それで
 一生の望を足り○これが當時流行の藤八五文奇妙じやデア、そふうまくゆけばよむが○ト
 思入此中風の音と冠せ湖さ雨車「ヤア、コリヤ合戀ぼろついできたわへいつそ此家で傘
 を借りよふか困たものだとまおト思入れあつて手拭を出し頭頂へ載せ見越松の枝の下で
 雨を凌ぐ思入れ春は流行唄もあり向ふよりお富好の着附下女のお福浴衣を抱へ付添ひ兩人
 とも駒下駄又て傘をさしかけ湯蹄りの体花道より出で來たる藤八これを見て故愁と待合せ
 る思入れ宜敷お福「申しお内室此頃の日和ぐせよを困るでいふりませぬかお富「それでもま

ゆい降りのあるまいよ○此傘はよく禮と言ふて直ぐ戻すがよいぞや お福「ハイ左様いた
 すでふりまじよふト筒様事を言ひあぐら舞臺へ來る中はお富が藤八を見附けお福へこきし
 お富「アレどあたや雨を凌いでお福「どふか見たやうお方ト此中藤八花道の方へ行さか、
 るをお福見て「ヤお前さまの儘はお店の お富「藤八さんではいんせぬかへ 藤八「ヤおまへ
 ○チ、大番頭の休息所の内室じやナ お福「生憎は降出して無ぞお困り成れまじよふ 藤八「扱
 々女中方は目かどがつよひわへ○私しは先だつて多左衛門殿が内よゝるその時鳥渡と此
 處へ來たことゝ來たが此源氏店の同じ様お家造り計り故とんと氣が附きませおんだわへ
 富「最う今よやまませよ御遠慮おしよ少しやめてお出さされませ○コレお連れ申しな
 福「サア、あまたお出なされませ 藤八「イヤ、女中計りの處へ參つてお世話なつてい
 富「何のそんなお心づかひがふりまじよふ お福「傘をお店のが參つて居り升 藤八「お詞よ
 従ひまじよふかナ お富「サアお這入り成れませトお福先お立つて件の入口へ手を入れ緋金
 を扱て扉をあけて藤八「ハ、ア爰へ入口がふり升ナ お福「ハイ此處の裏口でふり升 お富「マア
 お這入成れませトやはり雨車かすめし合方よてお富先へ藤八思入あつて這入る跡ふお福緋

金とかけるを道具替の知らせ風の音を冠せし雨車より右の合方にて此道具ゆるやかよ
ン廻す

第三十七回

本舞臺三間の間常脚大坂土下地窓の欄間上の方三尺の床の間まれへ續き大坂土の壁腰張の
好み下一間上下二段の押入上の方中窓同じ壁船板の羽目家臺一面大和ぶきの庇二重の下
腰障子一間の家臺前づら竹の打付け窓此前へ栗丸太好みの門口を押し出し四ッ目垣卯の花
のさかり海棠の臺幹庭模様のおしらひよろしく二重よき所は箱火鉢菓子籠鏡臺など置
らべあり前段の鳴物にて道具納るト下手よりお富藤八お福ゆいて傘を持ち出来る 藤八「成
程此方が表口じやナ此間はこれかろ参つた故裏口のとんと勝手が知れあんだわへトお富先
へ門口より這入り上へあがる お富「サアあなたお上りなさい 藤「おかたじけのふふり升見へ
〇ト天を見て「エ、コリヤ爰へ這入たらわれく〜だんく〜雲がれがして雨がやみ升へ
富「マア〜爰で一吹お上がりおされませ御茶の仕度をお福「ハイ只今仕度いたし升〇ト此
中行燈へ火をとをしよき所へ直す事あつて「マアこれを一ッお上りなされませト有合ふ土

瓶の茶をくみ藤八へいだし捨臺詞よろしく お富「モシあなた湯免成れませト會釋して鏡臺
をいだしお富髪をかきわけ化粧の仕打よろしくお福こんろへ鉄瓶の湯をうつし表花の仕度
此内藤八思入あつて煙草をのみ居る お富「只今直にお表花がでよ升るマアこれを一ッお取
なされませト菓子籠筒を出す 藤「ア、モウ〜かまわしやり升ナ多左衛門殿の今日の替爲
仲間の参會へムつてどふでお戻りの遅ふふりましようその留守へ参つて無遠慮千萬〇ア、
だんく〜雨が止み升へ傘を一本お貸なされませコレハ御内室いこふ御世話も成りました
トもぢ〜立かけるゆへ お富「アレは待たされませ珍らまいあなたのお出今折角は茶の仕
度を致ませたマア一ッお上りおされませ其儘はお歸し申ては内で戻ると私が叱られ升よ藤
「ア、モシめつこうお前さんを叱らせては私がすみません見へ〇そんなら折角の御心ざ
しお表花を一ッ下されませふか〇と又た煙草入を出し思入れ「然しマアお前様を叱らすま
いどて私が長居して却て多左衛門殿は私が叱られるかを知れませぬわへ お福「是はしたり
内の旦那のそのような事よいんどとかかまわいなされす誠は粹なお氣質でふり升わいな藤
「サアその粹な多左衛門殿おれはこそ斯ふまた粹なお富さんと世話をしとかつしやるデ

十〇とい云へ女中二人の所へ私等が様な男が一人長居して居るのハ壁へよも云ふ猫も醜節
 ○醜節の本土佐じやがかんじんの此方が啾喇猫かも知れぬわいと思入あつていふお富化粧
 しきから思入す笑ひ「ホ、、、、。○本よをかしい藤八さんじやわいなト此中ね福茶を入
 れしもふ藤「ア、こんなお世話ある事やら何ぞお土産でも以てこねばあらねへのアノ
 どんな事じやわへト思入よて紙入をいだし二朱金を一ツ鼻紙へくるみ外よ一包こしらへる
 事あり時よ雨車やじ お福「サアお茶が出来ましたトお富の湯呑へ涙で置き茶碗を添へ「サ
 アあまたお上りおされませ藤「是くいろんならおじぎなしよと急須よりついで番事あり
 お福「私しハ傘を一本戻して参り升ト立かゝる藤八ひき留貳朱の包を出しやるぞお福「イ
 エこん事ト捨置詞のよふよ断るを藤「ハテマアトよろしく包を與へ別よ酒肴をい付
 る心いさよて紙包の金をみせ仕方よて頼むゆへよせとお福手よて仕方する藤八ハテ行と
 云ふころいさよろしくお福是非なく「どれ傘を戻して参りましよふかト下手へ這入るお
 富これよ心附ぬ思入よて此中化粧をして仕舞ひ鏡臺をかたよせて お富「おまへさん一人捨
 ておいて化粧をして居りました故お構ひ申ませず○藤八さん堪忍して下さんせ藤「何ソの

く心置なく何ありとをさつしやりませ此方も遠慮おしよ羨花を御馳走よ成りました○ア
 大増よひ茶ゆへよふやら浮されて今夜のどうか寝れぬやうだわへ お富「お前さんが御茶
 よ浮されおさんしたら何處やらで嘘を嬉しがる女中さんがムりましたよふわへ「アハハ、
 よして下さいおだてさつしやんな○トおさしあつて少しすりより「イヤ先程風呂から戻ら
 んした素顔を奇麗と思つたが今化粧よさつしやつたら又た格別ようつくしいものじやナア
 お富「ニ、モウよして下さんせ藤「ハテよせと云ふてさふよされるものじや○ア、誰お見し
 よとて紅鏡粧つさよぞ皆なぬしへの心中立との難有いト詠ひの合方よあり思入あるお富心
 いさあつて「ア、モシ藤八さんそんな事いわしやんすから早く戻て下さんせ、ちつと腹立
 つ思入れ藤「おんじや戻れへそれでもおまへがア茶がはいるゆるりとしてゆけと云たじ
 やないか○ト仕打あつて「ア、思へは是が浮世の慣い一ツ旦那奉公はしていれど多左衛
 門殿の稼者どいふものをよくせさよ果報をのなればこそお富さんによふお女と思われ
 それを自由な寵愛してゐるといよくくよい月日の下で生れたと見へるわへア、うらやま
 しい事じやナアトこん事いながらだんく側よるお富迷惑おさしよろしく右の合

方時の鐘此中向ふより蝙蝠安薄綿のとてら下へ浴衣三尺帯のこしらへ藁草履跡より向疵の
與三五分月代刀疵の跡ある盤面体へを刀疵つひてあり廣袖の下へ同じく浴衣三尺帯好の手
拭みて面覆り藁草履よて出で來たり花道よての蚤詞の次回

第三十八回

與三「斯ふ手めへがいつたのいあすこの家か安「そふよ何でも唯の圍ひ者じやアチへ與三」
まかけてみやあト双方よろしく舞臺へ來る此中藤八の蚤詞納るお富さてわと心附思入時よ
門口を明け蝙蝠安向疵の與三とをよ内へ遣入る安「アイ御免ささい〇トまけく見る事あ
つて仕打藤八お富呆れし体よてお富「モンお前方向を何かへ安「アイ〇と肩の手拭をととり」
チットお願ひがあつて参りやしたお富「ろりや何の願ひがへト言かけるを藤八仕打あつて
「ア、是く私掛合升わへ〇ト思入あつて蝙蝠安よむの」コレこなたしゆは何處からム
つたト言ふ中蝙蝠安やアくと椽へ腰かけ「へ、ン私ちかへ近所の者よト腰を探り「チ、
烟草入をこの夕立であつことした一吹かしささいト思入藤八とさくして有合の烟草箱烟
管を出しながら何じや近所の者じや〇近所の者恐怖のさいわへ何をこの家のこなたしゆ

よ合力無心いわれるよふト曖昧の者じやアあいぞよ安「何だ曖昧者者じやアチへ〇へンラ
ろんでたまるものか〇モ御前さんの爰の御亭主かへ藤「イヤ旦那じやアチへ爰の私が店
の大番頭の休息所この主人の出まゑて留守内より居りませぬわへ安「その大店の番頭さ
ん話がわかりそうだと思つたから参りませした〇ト藤八へこなしあつて親指を出し「それじ
やアおめへの爰のレコじやアなひのか左右だ後うよ〇そんならとんだやじ馬だアすッこん
でいさせへお内室へお頼み申そふ〇トお富は向ひ「へ、へ、〇アノお内室へお願といふの
の外じやムりません爰は居る若者の私が友だちでムり升が據ろチへ息張づくの間違からそ
の時うけた体の疵暑さ寒さよ打身が起り苦しがるのよ見てもいられず友立がひよ方々さま
へお願ひをふし今度湯治よつれ行くつもり〇どうかそこをよろしきやうよ合力して下さり
ませ修願ひでおざり升お富「何の事かと思つたらその事かへ折角のお頼でいふんすが今言
ふ通り内の人が留守といふ心許でよいあらバママとふ成としましよわいナ」安「そこをよ
ろしうお頼み申し升ト此中與三お富へこなしあつてだんく様子を窺がふ思入れお富立て
床の間よわる小箆箆へ手を掛るを藤八とめて「ア、これく〇ト私よ任せろと捨蚤詞小聲

よいふお富よせといふても聞ず藤八鼻紙へ財布より小銭一すじ出しくるく巻て安と與三の間へ持ち出で「コレ今聞た通り御亭主が留守の事私の餘所の者じやが女計りいる所も居合たが不幸じやよよつて仲をとつて私が扱かひ升るじやこれを持て去で下されと件の銭を出す安とりわけ見て與三へ見せる兩人を笑ふ仕打あつて 安「何だこいつア○大そふ言卿をぬかしやアがつて何價出すかと思つたら○たつたこれか○見りやア見る程問扱面をしやアがつて肩書の附たお兄いさんを大がい馬鹿よしやアがれ立派な野郎が二人そつて譯を云つて頼むのだ僅か百とは何のこつたへ○コレナ丁稚小僧が運立て伊勢参りも行く鞋錢でも氣のきいた所じやアこん事ばしねへわへい、かげんよ白痴よしるへこん事物の不用へわへと投返して思入れ藤八右の百錢を取あげどよしよと當惑の仕打此中よお富筆筒の桔梗袋より額銀三ツづつを出し煙草盆よさまたる小杉の紙よつ、む事あつて 藤「お富さんナトコリヤむづかしいナア お富「それだから先から私しがよい様よすると云ふよのさあんなせ○ト立つて安へこきしあつて「モシおまへ方腹立たら堪忍して下さんせ此人は何よを譯を知らぬらじやわいナ○お前方が打揃つて折角のお頼みどうかしてあげたけれど何を

云ふも内の人留守とぬ、よし内も居たとても高の知れた主人持ちあり餘る身分でいふんせぬふせうでもふんせうがこれを取て承諾して下さんせ、蝙蝠安右の金包を鳥渡とり思入あつて 安「それだから先刻から此方の御内室へお頼み申すのだ○それよやじ馬よ出やアがつて何だその面ア○ト藤八へこなしあつて與三よ向ひ「オイ兄い聞たかお内室の流石苦勞人だ何の通り段々いゝなざるもんだから○こまをおもらひ申ておかふかのう○ト金包を見せ「額が三ツづつ、二包あるの○少チへけれとこれでおかふじやアチヘカ與三思入あつて 與三「よせ、返して仕舞へ 安「エ、それをあんさ譯を云ふよ、合點のゆかぬ思入れ 與「返して仕舞と云ふ事よ 安「そんならこれでもとけチヘからか 與「知れ、事よ是からア己が直接お頼むのだト與三前へ出る 藤「あんだ人の内へ手拭を覆つて 與「やかましいわへお富こなしあつて「ソリヤあれ程譯をいゝ氣を付てあげたれとまだ金が不足かへ 與「とふよ己が直お頼からの愛の内のおらひざらい根ころげをらわよやアあらチヘのだ お富「とうしんとへト思入 與「ナイ内室イヤナニお富さん○おとみ久しくわねへのト思入あつて手拭ひをとる合方キツパリとなり藤八與三の顔を見て喫驚ふるく震へてベツたり坐るお

富與三をよく見て驚く事思ひくかふもり安ざてりと思入れあつて片よる お富「ヤ○
 そんならお前ハト思入れ與「與三郎だよ○お富ギツッロ」おぬしは己を見忘れたか お富「エ
 、ハトあされる思入れ與「しがあひ戀の情が仇命脈のつさも切れ果たをどふと留てか
 木更津から廻る月日を三年越し江戸の親よの勘當うけ據さく鎌倉の八ツ七合の食つたてを
 面へ受ふる看版の疵がもつけのせへゑへよ切れの與三と異名をとり押借ゆすりも習ふより
 慣る時代の源氏店そのしらげの黒堀は格子造の圍ひ妻死たお富が居よふといお釋迦様で
 も氣がつかチヘト思入れお富を仕打わつてお富「アイ○私しをその時あがらへる心ならね
 ば湊から海の深みへすつる身のたゞよふ涙の夢うつ、漕ゆく船も引上られよくせき死され
 ぬ命やらツイ生延て今日が日迄わだよ消した甲斐あつてまた今日愛でお前の顔を○思ひが
 けなひ與三郎さんよふあからへて下さんしナアト思入れ是より多左衛門との掛合與三再
 度立戻りての色合の出遇等よろしくあつて擧げ標聲々幕をひけバイヨ成田屋音羽屋舞鶴屋と
 思ひくは稱賛の聲騒立て雲時の響を休ざりし此日の日曜なるものから看客殊々群集して
 立錐の地もあらず綺羅錦繡を着飾も澤ある中よひとさわ眼立つ東看棚は黒紋附の長羽織胸

お金鎖を輝し八字髭を捻り居る开が傍へは婀娜嬋妍の美婦人ありわがねし髪も當世風七分
 珊瑚の金簪を投ざしよし衣服の好を華奢風流誰か權妻かと思見る人毎々艶羨垂涎せざるのさ
 かりき

第三十九回

御菓子よしかな九年梅よしかな番附役割鴨石と喧しく賣歩く折しを茶屋の若者が御浄水
 よいらつしやい升かチト何方で御休息をせし御案内いたしましよふと彼の東看棚の美婦人
 を下婢をろとも誘引ひつ吾妻屋の奥二階茶を薦めんと會釋して立つ若者をしけく見つ
 めし美婦人のアレマアまつて他人行誼を程があり升藤岡の綾さん久しぶりの御見よこそ
 とみせれて駭く若者がろふ云ふああたの誰様と頼み心附ざるを理わりや是此の美婦人の彼
 の野晒太夫よして第卅五回又説如く乙骨國香よ身請され權妻となるものから本の名のおす
 みと呼び斯くの劇場見物をあそことよて果て昔の竊窈たる阿蘭風のあらざれば芝居茶屋
 の若者と今の成果し藤岡の綾次郎數年をこへて出逢ゆへ瞬間業じを附ざりしがやうやくよ
 思得てアノ吉野のお嬢様お須美様か、ばかりよ呆れて未だ言葉なしおすみハ、ハ、と打

笑ひ私しの當時あなたを忘れねばこそ一目視てそれあなたに御見忘れ、申すもの、御互ひに替り果てたる外見風采途中なんぞでお行合ひ申しても知りませぬ、知れませぬと云ふは綾次郎の首邊を掻き實のところの今朝かゝりして別嬪の御客様と思ふゆへ外方あらあきたの御顔を屢々見てもあきたの心附ざりし鈍ましき、眞平御免と云ふ傍ら居住する下婢が會釋して私をあなたに御見忘さつたるふ以前芳野様も勤めて居る清ですといわれてまじく綾次郎の驚きつアノお清さんかそふどの知らずよろしくイヤ斯ふ昔の御馴染が不意に出遇も不思議の緯といふをお清がかひとつて左へ思召は御道理然し私等にあきたが此處においでで事を聞知てお目をじしたさな態々愛御茶屋へ來たまはたのよかすみ様の御代は私から事の次第を詳し御話申ましようと思つて膝を進めて語出す开が頼末をいかよとするは彼のおはみが苦界の淵瀬を身脱して乙骨許の權妻とありすまはし花の春月の秋葉華も浮世を送りしが或日の夕暮番町の住ひなる屋敷横路へあがしくる門附の三筋の糸の細ひ縁も根へゆるしき其人の身の成果を思ひやられおすみの隔より呼といは何かな語聞せよといふよ衣服をやつれたる婦人の世間を憐かりの手拭眉深も覆りし儘調子あわせて唄ひいでぬ

第四十回

「春氣色浮て云々三味線の音色の己が掌ころよあるよつけ何どのふ聲音の癖は耳をたて竹簾掲げて格子目より添ふおすみが但見れば彼方の面を手拭も覆いながら姿容有様とれかあらぬか疑ひの唱歌を今の昔しある我初戀の其夜より扇子の手振唯雄の蝶夢はかなくも無何有と悟りても又た思ふ元木もまた謎は未練ながらも問ひて往事の音信を知るよしもがあとおすみのとらるる聲をかけ弾く三味線の面白さ聲音もどこやら愛ありモノをお清と名告てし人よ有すやさの無かと問れてギツクリ門附の婦人の初て格子の中をすかし見てチヤお嬢様お清であるふお久しぶりとお互に計らず出逢女子輩清越方の物語ろこの門外で憐かりありいざとばかりよ呼こまれ甲的の如何乙的のどふせしとおすみが問ひ見聞せし成行を詳し告しい一二條芳野家が娘おすみの家出しより母の旦暮打歎き遠ひよ歸らぬ人となり又た父親の弟某が看護せし熱海行よりかゝる珍事のいで來しなれば一端の狂氣の如く彼是と探索沙汰は日を費やすも尋ね出よし若黨を音信なく同胞の弟と何時まで怨みんよふなく有樂男の思切よく前世の因果とあきらめて弟とが末男を養子とし幾程もなく隠

居して世をはかなみ通世の志を起し圓頂黒衣の形をかへ諸國靈場へ行脚せられて其後の音信をさかず時又世の中おだやかならず幕府政權を奉還せられしより芳野家の當主幼少あるものから橋場の實父後見して駿河の國へ遷たり又藤岡屋綾次郎の一端おすまると婚姻を結ばんとまでの相談ありしをフとした事より芳原の紅筆と云ふ娼妓が色香を迷ひ遂に勘當の身となりしを兩親がよる年波の心ぼそさと出入の鳶頭の扱ひを半年たらずして勘當もゆるぎ其頃よりして兩親とを老病よかへり前後のあれど其年中もなくあれり今の綾次郎の身代とあるものから再度遊興を耽りつゝ金錢を湯水の如く仕ひ捨て彼の紅筆を身請しつ華奢三昧よくらすものから身代のいたく傾き加之へて世の中騒々しくありて札差の業のこゝろ絶へ總て損亡もあるものから大厦を支ゆるよしもなく裏屋住いとなすよいたりぬ其後紅筆を開を苦病で死せりと聞ぬ近頃綾次郎のいさゝか昔しの馴染は継り猿若の吾妻屋といふ芝居茶屋は奉公するよし知る人あつて慥に告たりしと一伍一什とお清が語よおすみの數年心は係る事柄を聞く喜びあつて又た兩親の成行を打敷く悲喜こもりの心の裏察するよ餘ありこれを縁としお清の乙骨が家へ住み込て隔ておくおすみは仕へり絆の大第の然あれ

と今お清が綾次郎に對ひての明々地地告げず言詰巧み只綾次郎が此處ふいませる事を己が告げおすみが慕て故意に吾妻屋を名指して來たりたる淺からぬ心趣をさこへつゝ今日はゆるけく談をさらす何れ首尾して御遇せ申さんと昔しよかわらぬ進葉のお清がとりもちよ又たいかなる物語かある回を追ふて説續べし

第四十一回

都下一大の熱鬧場ある淺草觀音の境内の老若男女群聚して櫛の齒をひくが如しさるからよ所狭まで掛わたせし種々の勾欄の木偶の人形活動が如く狙公の演劇人爲均し田樂舞々呪師放下刀玉の刺技わり足引の山猫舞師の鼠木戸を客を留め黒玉の替人角瓶の腰を捲て按摩の手あり木と傳ふ電氣機關妙に寫す寫眞鏡架空壓氣の龍宮城の硝子の細工は顯れ開明の外國態巴里倫頓の市街は閨機關の眼鏡を見ゆ崎氏が柳腰を客が的をばすさぬ弓店の姫娜者莊子が蝴蝶簪を翻々媚をうる閨扇の新造田川萬梅の酒樓は名高く餡餅鮎うりの所としてあらざるなし方は靈驗いやちこと稱なる佛陀の功力よよるとい云へと泰平無異の餘福あらめ恁る繁華を餘所よ見て又も懸路よふみ迷ひ縁よしみからひ煩惱の深い心の淺草の觀音さんへ

参すると飾言なして家を出て權妻おすみの清を従へ忙々この境内の裏巷路をどどりつゝ
 但在る待合へ潛みいれは豫て案内やしたりけんよふお出といひ迎ひ助才内儀のとりはや
 しアノお伴の先刻おいでと奥の小座敷に御待かねイザと計り誘へり誘はれよいへる事わ
 り他人の風采見て我身をつくるへと世の人なべて情慾の餓鬼たらざるは稀よをあらす唯良
 心の佛坐は居住崩さずあるものゝ一度奈落に陥れば情は慾を喚び慾は情を惹き恰も人は情
 慾の機器とも見らるゝあり試み日々發布の新聞誌に注意よ色も濁るゝ放蕩女財も惑ふ盜
 賊男等續々輩出きて跡をたゝす孔子が千言の道徳論を釋迦が萬語の因果説を只佛座の良心
 を養成するの工夫よあらん陳腐る狐狸窟の論をれとおすみが淫奔の率爾ともくしく説
 來るは所謂勸懲の微意よして他人の風采見て我身を反省慮よとの編者の用心懇くお解さぞ
 と期をおして却説く奥の四席半人眼の關を打越へて相逢坂の睦言の酒の機嫌よなまめらつ
 彼の綾次郎が小膝よをたれおとみは展然打笑みて「アノ綾さん今はむかしとあつたれど私
 が家出とあしたをつもりあきたを御慕もふしてのこと途中で悪者よ勾引されそれからいか
 い苦勞をしましたが和君が爲よはおしからざりし命さへおしまれてよがくもがなと祈つた

第四十二回

取果よ今日といふ今日あきたと此處よおし合て斯ふいふ首尾がわるふとの夢のよふであり
 升よ今の身分の不自由をがらとよは私の胸よありますから末の松山末かけてかわらぬ縁を
 しかわいがつておくんささるゝよチ子綾さん

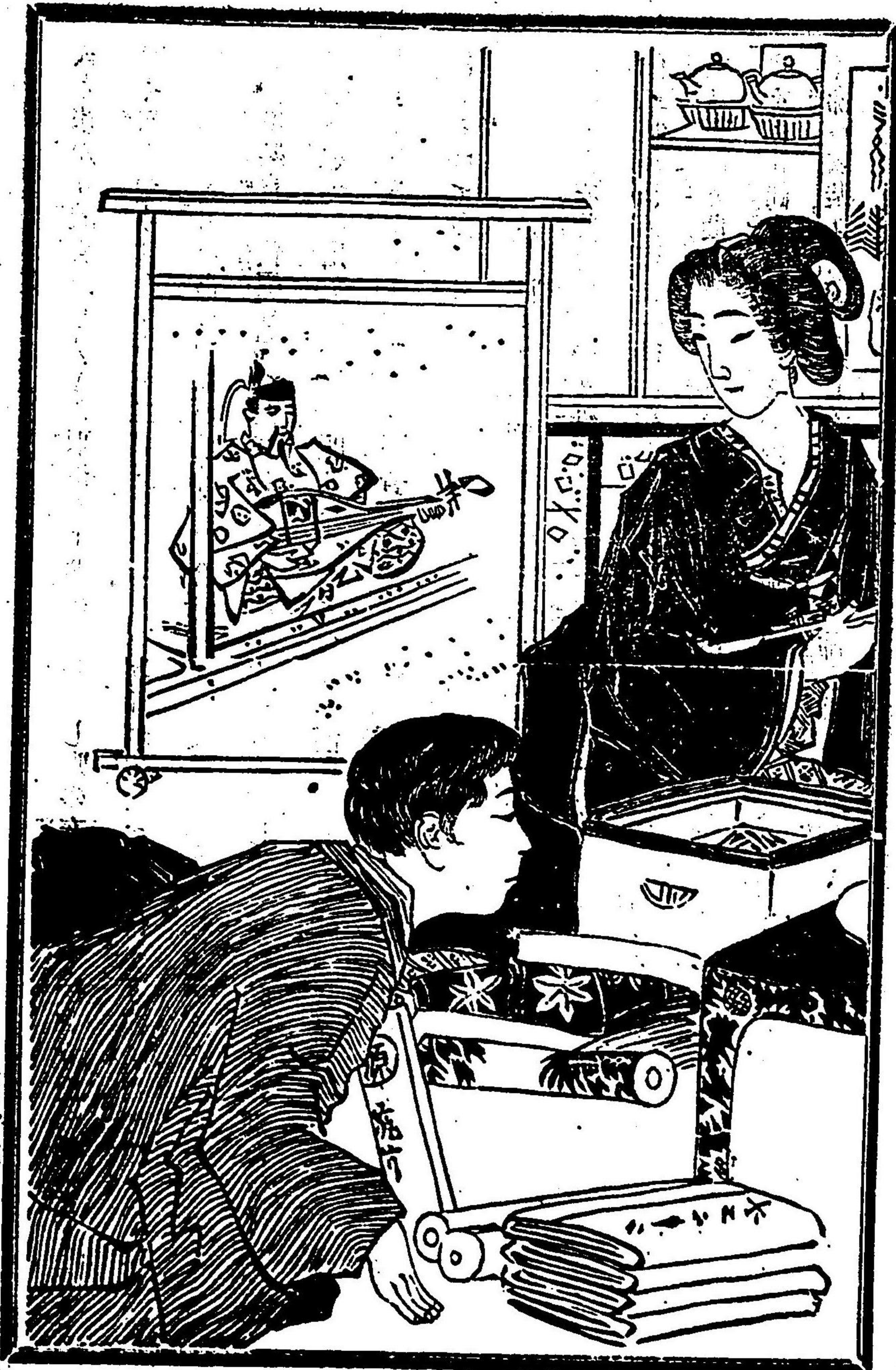
綾さんといわれて綾次郎のをじくと流石の元來の金穴の家よ生長名残よて素直の氣性の
 語氣ぬるさ開の私々あきたよ申す口状昔し忍べるゝ今の堺界我と吾身が愛想づかし無放爲
 浮世とくらす身を以前の知己とお見捨てなく斯ふ喚でくださるを悦ぶよつけ愛れしよ今
 の主あるあきたの身とよなる事か中々よやさしく云て下さればいよ倍思をひ詮をさふ獨こ
 がるゝ夜の鹿高嶺の月を仰ぐのみありし縁よしを有明て夢とし悟る外にさし浮世の義理の
 しがらみよ關止らるゝ陰陽の涙あふり離れの今日の首尾苦しき胸を察したまへと打詫るを
 おすみのいつそ姑息がかりコレ綾さん濡ぬ前こそ露ををいとへ互よ二世と契りし身が浮世よ
 つれし聊の義理よ見替てよいものかそれともあきたの此身をば色香露落し秋草の霜よ風情
 のささよくらへ身限る心よおなりのか左右といひ知らず常日頃あきたの爲よ血道をわけ戀の

瀬情の海は漕ぐ我や迷いの空船繋ぐよしなき意馬心猿男女の差別のあれど今来し途は興行
 せる彼の奥山の生人形まねぎも似たる吾身のうへ雲も坐臥する仙人を戀の曲者白塵もうつ
 ろふ下界も失脚する意の同じ我も又た糸の天女といわばいへ斯ふおつこちたがおまへの因
 果のきらめがしの假言をいので否か應かをいふてたべそれで私の覺悟をありとキツパッ
 われ綾次郎の他の權妾のおすみの身末へ遂がたきのみならず開の成行を案するを元より惚
 し女の事かさ口説かれて悸ろく胸胸の有邪無邪迷いの霧はれぬ思いを想風も我と心を鬼も
 して綾次郎のうへさいつそふまで思つてくださるうへの私を度胸をキツ極めいかある辛
 苦を互も忍び彼の猿若の芝居でしたおとみ與三郎切さいおまれしよふ事事を今から覺悟決
 して怨のありませんと真情見へし男の言語おすみの嬉しく奇添ふて痴話をいつしかそら解
 の帯紐からむ其痴情看る人よろしく猜し給ひね

第四十三回

蕙蘭の盆栽を好むものは培て水を漉き塵を掃ふて葉澤をうるのましくし花香をかんばしから
 む妖艶の權妾と愛するもの又開の意を迎へ歡情を促がして嬌態をうぶかし媚辭を吐しめんと

す無情の蕙蘭すら猶を然り況や有情の權妾とやされば乙骨國香は今日まも公務の休暇を得
 て家より最愛のおすみを坐邊近く侍らして唐木造りの食卓は濃味の軟肉を盛り淡純の美
 酒を置き松江の鱈魚やらねと玉川の香魚総房の鮮魚鱈何れと羨をし羨をしおとみ
 が嗜好の品を撰らみ俱も杯をめぐらして笑談をこころなるもの、浮世話しは劇場の評判或
 んおすみも嗜むなる三味線をひかせを去て打興じて餘念なし時雨さへふりそ、庭の眺
 めをひとしはよて梧竹の蒼々軒を覆ひ薔薇紅ひよ香をたかく籠々も咲とめつ、芝生の築山織
 氈の如く清泉の盆池明鏡も似り松樹鬱する處も茅屋の茶室あり柳梢垂る邊も土築の小橋も
 たせりかく景色を雅美もつくられしを家居のおすみが旦夕の眼をよるこぼす為せり主人
 の用意を至れるかなかく愛らるゝおすみが心の裏表もて思ひ中もあれは自から顔色も顯れ
 て浮きたるぬ日を儘わつて痾病の癩も惱むといふゆり去とて醫藥を嫌ふて用いず佛の冥護
 を仰ぐよしかしと月毎の幾度となく淺草寺も足を運べり怒れば別て此頃の國香のおすみ
 の機嫌をとり斯くの終日酒宴をひらき遊戯氣隨も消さすものからおすみの好事もいやま
 り衣服調度の新規を競い彼の此的と請るゝまゝ主人は髪を捻りも得せで唯々諾々と頷け



百十四



り今日しを出入の呉服屋の興闢あわの折もよしと堆積荷をおまげつゝお消が業内よ次間へ

百十六

入り来たり談言たらしくは取散らす花の錦のよし野の春菜紅葉を流す立田の帯地あれやこれや目うつりよおすみの二品三品をとりわけ開が綿柄を撰る傍より商人口の暗しきまでよすめつ、開のあきたより極くは似合意氣よして高尙ある綿柄といひ色合の五分をどかぬい當世装且つ代價を甚だ低しそこの助才を候らひじ、その品も又た別品島渡近所の薬師ぞへは出かけのは衣服よりうつつけの洒落たくすし綿へ、く、難有ふこれも如何とす、ひる度おすみよ請る國香が迷惑といひへ氣嫌をそこねじと請ながら云出る、次回よ記すを祝て知らん

第四十四回

おそみよ衣装を好むのも疑て、思案よ能のざらめ大概よしておさねかし綺羅錦織の幾葉も体三個おき人頼よ一時の用ひよ供へんよふなく、梅へ、梅と書ける上衣よ柳を寫す上衣を、共よ着飾方便あらんや梅の梅柳の柳梅柳畔さき春を粧わんと、の出来べふをあらすかし今や文化よ誇る歐洲人よかたむける區々の風俗人情英の飲食よ住味を欲し食へども厭となく佛の衣装よ盛飾を好し着かざるうへ、飾を競ふ開が例しなる一場の物語あり、この是佛

國の巴里てよ唱ふ大都會五層の樓閣たて連ね市街兩側よ嶽然と鑿へ車馬絡繹の際よ、綿織まばゆき貴婦人の往還を澤あるよ就中、富家の某女の常よ衣装よ意匠をつくし優美高雅の裝飾の都下最上よ品評して誰が口端を稱譽て休すなれども其女已れよ、満足あらすして遂よ有名銀行諸會社へ融通よしを預けた巨萬の金の切符を、幾斤か衣裳の飾よ縫い下げて身よ装いつ、誇がよ瑤佩を鳴しつ、駿馬よ轍をさしらせて往還大路の、人毎よ眼をそばだて指さして開が盛裝を未曾有と稱へて愕かざるのなしとこの外國の異聞なれど好事の至極の左を許あらめさて、陶朱の富あらす、開が満足の覺束なしおすみも心得價ぬかしといふよおすみの打笑ひ開の身勝手の口狀か旦那が他處出ようわき三昧愉快しきから聊かの衣服好を兎や角といわれた義理で、あらずかしお清とよとやアさいやへと酷冷の詭子取替て持ち來るお清と顔見合せ打笑ふ意あつてのことあるかとの知らざれば、國香を共よ阿々と笑ひ女姓がなべて身を粧衣服好のまだしを理あり甘味くもあらぬ唐茄子や薩摩芋さぞ雑多な物を嗜ひのはとく、解しがたかりと打戯むれて把杯よおすみの酌をしきからよ旦那の口の伶俐しくをとんだとて、言端を遷理りめかしておつしやるよ其口前が私の苦勞アソレ、大方の別



掃景画



品々馬鹿と云ふを黄瀬日新様と奥さんを見白事おつしやり升ドレ私ハ御殿と待たれ一杯
 飲で行とらす盃を受頂か一二杯を傾けて毎度御用を難有ハ御馳走様と呉服屋の手代はと

こを退去けりこの是國香が一日の家居の爲体を寫せるよてこをもて推バ常住の華者の消し
 を思ひやらる或る日の事よかすみは薄草へ詣るとして湯浴化粧に半日の日暮をつひやし蘇
 裁さ衣と纏ひお清をつれて忙くと正午の頃よ立出ぬ跡よ國香の只獨り奥まりたる小坐敷
 よ籠居て物の本をぞ練りひろげ又の二三の新聞誌を披ひて無聊を慰さむ程よ开が紙面よ
 かいつけある怪有の雜報こそ見出せり「京童べの口是非さくい、唯すま、又翻載るは番町
 邊よ住われて何省へかお勤なさるさるやんごとなき官的は佐渡よ其名の惚藥如花の春をは
 のめかし有語の花やら有情の柳おしなべ己よおつこつ、我からゆるす玉の盃さ底はかとあ
 き色狂ひしから此頃よし原よ萍草生ふる川竹を水鏡して野晒しの鬪談を料よ化粧せし妖狐
 の心身魔殺て有頂天外身請沙汰玉の興いれ楳の君よありすませしゆよかつたが」讀さし
 て、と小首傾げしが次の條を讀つぐる「纏て魔性をわらわしてお精の塵のみ掃ふて居す
 或る優男を招き茶屋人眠の關と濡の幕忍ぶり戀の本調子といへ何時か二上りの互よつ
 る相惚の浮名たつたる以上よ主人の耳を聳がねて波風騒立つをりもやわらんまづそれま
 での伏線くく讀畢りて國香は忿然と怒るものゝ文意明々地ぢらぬものから手をこまねき

て案ずるのみ折りしを庭の柴扉をホトくと叩く者あり誰ぞやと問へば同寮の吾甚敵の友
 なりき

第四十五回

心よわだかまりある時の歎情を醸さるのなべて人の憤ひよして乙骨國香の計らざりき新
 聞よ嫌忌の箇條を讀得るより氣色を損じ慄然として案ずる折から訪ひ來たる客ハ兼て甚敵
 の友よして園藝のことよ好む技よしあれハ雀踊して迎ふべきも心常ならねハ怡々たらす去
 として無意よいささんよふをさく雲時して出迎よ客某ハ待かねて先生幸ひよ御宅先夜の
 輸贏を果すべし退ひて彼の時の園藝の況をつらく再考せしよ我が一目の押手の石と誤り
 たること全局の無覺をとれり先夜の恥辱を今日の雪めんイテくと主人が心といかで捕せ
 ん友垣の奥底なく遠慮も得せで床の間の碁盤をかたげ出すよなん主人國香ハ今日よ限てあ
 らずをがふと思ふものゝ流石よ日頃の友誼をあれハ否ともまぶか斷りかね其儘碁盤よ對つ
 石を捻てうち出す鳥鷲の争ひ混亂興闌わよあるにつけ嗜ること故いつしかよ國香の心
 を碁石ようつり微妙の手段と疑案ものゝト局外よ思ひ馳せ日頃よの似をやらぬ手誤りの



四十四



四十五

多かるより我を呆客を亦た不思議を抱きながら健偉と口よいへり憚る折し手書の小
 猫今日の愛らるゝ主的おすみ家が家みわらざれば誰が膝も臥し寝も寝よすがなく徒ら日
 向の椽又蟠居り籬の花へ来る蝶も時折戯れいたりまがそれすら倦みしかおそまが粧室よ
 ぬしを尋ねて啼きつゝ徘徊いたりしがおすみ鏡臺の匣中より僅又端をあらわしたる文筒
 の挿めるを見出し小手と弱して洒落かゝり又たの嘴へて曳き試むこと二回三回つひは文筒
 を嘴へ出し我物得つと嬉こふ休めて逸脚いだして此方ある主客固甚も餘念なき座敷の真中
 又馳せ来り又を彼の文筒を双手よおさへ弄遊ぶこと最初の如く甚盤問近は洒落つゝ馳す
 るは眼まぐるしくもあるものから國香と叱して追ひのけつゝ見やる眼前は彼文筒のあるま
 へ何心なく手よとり舉宛文を見つゝ眉を蹙めて訝かりまが忙しく中なる文よとり出さ
 ながら雲時御手休くだされと客は會釋を背面よかりて开が文を繰ひるげ口の中は讀居た
 りしが我よをあらで太息をつき面色忽ち蒼くあり又た赤くありコハ捨置きがたしと獨言
 て舉止定まらぬ爲体くも客某しの訝かりて不時の御用や生せしかさらば遠慮なく仰せられ
 よ心静よ打ざれば折角の暮を娛からじ再て来たらん暇申すと主人の機嫌を討りかね言短か

ふ會釋してぞ立去りぬ國香の庭口は送出でテト心掛の處用ついで來ついでふ不禮を仕ると
 いつゝ見返へる坐敷の方よおすみや歸り來たりけん女の聲の暗ましく聞ゆるは國香の愕然
 と庭下駄と打翻し飛が如く馳せをとりぬ

第四十六回

おすみ留守の爲体く憚るべしとは神ならぬ身の知るよしなく雄鷹は奇るゝ取暖鳥羽翼を
 のべし心地して假寐のゆしの不思議よを又を繰ましを綾次郎开がかき送る玉章よ正午の頃
 より家出しつ淺草さして行くものゝまの女戀路はさて暮あさよ例の茶屋の裏坐敷人目をか
 ねし出遇めて今度あふのが命がけさまでは思ひ過さずを彼首尾を氣苦勞し末はどふして
 こふしてと語るふ節を寝みだれの潤りがちある枕紙よをす泪の白粉をその顔かくけむりな
 酒酒よ喜嫌をとり直し別れとをなき袂を別ち我家へ歸り入相の日影沈づみてまだ明き表坐
 敷へ來かゝる途端主人國香が急立ておすみくゝと喚立たり心機知らせか何んとのふ取を
 つ脚の猶豫つ見かへるおすみをお清の制め早や行けがしよ手示して共奥の襖をバ開く間
 おそしと主人の國香は怒る聲をふり絞リヤサレ幻妻をこよ居よ汝の答の露顯せり彼の楊震

が四知の誠め壁も耳のある世あるを何状知らず果つべさや汝が寺佛へ參すと語り我眼をぬすみ密男と忍び遇ふよ去我よく知りぬ殊恩を忘れて淫猥の行爲僧面目のありとし思ふや人非人めと罵り責ればおすみは吐嗟と打騒ぐ胸を沈めて言語を改めこの計ざる仰よ去て冤罪も事よぞよる日頃又惱む瘡をバ癒さん爲願かけて観音薩陀ももうするよナニ勿休なく禱り侍らんかゝる不正事と誰が告げけんか聞まはし身又覺へなき濡衣を乾での休じと言解を國香の聞て冷笑ひ此古狐の大胆ある未だ疑すまみ班し尻尾を隠さんと欲するかこれ見て我を折り答ふ服せと懐ろよせし最前の新聞誌を面前に差示し云々なりと讀聞すよおすみは心又探訪の秘密を渉るを駭くを去り氣なき面容して言語巧みのふるよふ且那は御心のつかざるや此の番町は土地ひろき所で所々知らずとまで世話口よ申さずやまして番町邊とわれ誰うへを記せしものか明々地名指のなきものをよし又た我々が身のうへを誤り傳へて記すよせよ記者輩あぞと常日子旦那の卑めたまわすやそれ等が毫も成文を證となして云々と罵りたまふことかといふよ國香の急立て黙れ幻妻舌長し富世那の辯もて説けばとて何状眞偽をたがわふべき猶此うへよも陳するやと再度懐をか探り取出したる卷多を右手

よサラリト投披くを見るより畫跡又覺われバエ、トばかりよおすみか仰天をを此女を如何よして彼の手よ入りたるやらん今朝綾次郎が許より密に送り來しもの、一目見るより返事を認め逢瀬を約し其儘に捨を置して錠ある手匣に藏め鍵の我身を離さるよと兎角の案を出されバ思ひすを首を垂れ言句途絶へて冷汗の頸をつとふ計りあり左もこそわらめと國香の屹度おすみを疾視彼の新聞とい、此の多とい、證據分明なるからの汝の口を待ざるも侵せし答ひいかで免れん定めて多の吾手よあるを駭きをし不思議と思わん是れ天の罰するところ粧部屋の何處よりか小猫が囁へ出せしを散も失すよ吾手よ入つて先よ見たりし新聞と符合せるを立々宇宙よ鬼神あつて能く感應を司どり非理を制せといわまくのみアナ笑止やと云を聞おすみは憚りと心附き彼文を得し時の慌忙て手匣に藏し文をさらすして邊に散しと思ふ折から襖越しよ人の舉動の聞こへしもの慌忙て手匣に藏し文をさらすして邊に散し櫛拭ひの紙斤よて紙斤と思ひ違ひ鏡臺の下に挿入しは大切の文ありしか慙して俄よ其坐を立ち事よまぎれて心附ざりし鈍ましよ今更よ千度悔ればとて詮ひあし有儘よ白狀して彼の爲様よ任せんものどふなるものかトおすみが決心モ、旦那へ最う未練のいとません成程

あまたの眼端をぬけみ男狂いをしましたから黙止てをささるまい切るとも穿くとも御心晴よふ存分よしておくんささいそれとも一端抱寝をして馴染と思つておくんささるなら此儘こゝを出てゆきますすいづれもあり思召と女は似氣なく言放てり

第四十七回

三都府歌妓の風采をリ諭ふ雅男のことは京都の校書雨中の海棠浪華は月前の梨花を比へん然して江都の淡粧洒落意氣爽かよして燈燭たる姿よ合ひ暗器は眞是竹外一枝の梅ならめと説得て妙と思ふよつけ昔し所謂白拍子の今いふ總ての校書の鼻祖か千手が琵琶を弾でつゝ殊勝よを亡國の重衡を慰さむる静女が舞曲と奏しつゝ貞操よを幕府の頼朝も屈せざる千古の事情恍として艶羨するを其詮かからんといわでもの事よして梅てふ稱ゆる品評を今いあだなれ婀娜柳風のまよくなびきてい賣夢妓よ伯仲す何れ昔蒲の色競べ謝安もし當世よ在しめば東山よ興を醒し聲妓の下風を嘲るあるべし閑話休題つ都下狭斜地と唱ふ柳橋あるは水路の便宜よさまよ春の探花秋の泛月納涼賞雪の夏冬つけてこよ往來の客多く岸よ連なる船商よとり混せ酒樓の費高く眺望ことと絶景あれば到る處繁華せりとい

いへ斯地の繁華あるに此よ非ずして彼よあり彼とは何ぞ歌妓の脂粉の容姿絶へよして嬌歌妙舞の巧ある他所よ類もあらぬより紅消數を知らぬまで客つとよいわれあり此處よ尾花屋すよ八として近頃自まへよ開技をせし校書あり顔容の艶ささうへよ地い清元よして技遊たけたり坐敷のとり囃しを巧者なれば評判順よ擴がりて晝夜をかけて繁昌せり是別人よわらず權妻おすみが身の成果よして所詮此世のかりわけの戀ようさ身を投げ島田若がへりたる姫姪姿を乙骨許を不首尾よして暇とあり其時より綾次郎を誘い出ま當坐は彼地此地よ假住ひまて爲事をさく過すをのゝかくてい行末覺束おまよ心案定めて校書となり綾次郎も表ての箱廻志を渡世とし其實夫婦の如く語いけり恁て月日を消す中或日の夕暮只在る酒樓よりかへりし座敷は米商估の大一座すみ八の外お幾人かの校書よ酌をとり混て呼び迎へたる涙出遊び今晚アリーの紋切り口誼ざんざめかせし坐着唄おやかましようを序開きよ飲や唄へと喧々く打興じたる折からよ上坐の座が浄水へと何心なく立つ跡よ目はし早くつさ來るすみ八酌器片手よ椽端よ客を待ちらうけ瀧ぐある水心われば魚心我からゆるす自惚の手を握るおぞ見る申戯い酔たる人の慣ひよして「アノすみ八と近頃の評判ものゝ男艶殺いぬしかと

見廻る此方よすみ八がよつこと笑み「おめづらしい系政さんといへ見忘れでいふ怨み
ですと云れて駭く系政が「ナ、左様いへバァノッ、おぬしの野晒太夫ハ、變つた所で遇ひ
升たと猶ほ問ひをし聞かせんとする折しを二階、甲乙の聲として「系政の旦那さん、同伴
が探さなさいませす系政さん」と呼立られて系政は「また酒か五月蠅やつたと心のこし
て立ちをどりぬ

第四十八回

此地の處も柳橋側、繫ぐ猪牙屋船開が一艘は装置を出来客待折から船宿の女房が案内よ
彼の系政は名指でよびし尾花屋のすみ入をとものふて棧橋づたへ乗移る船の川意の酒
殺他人交への相對は溫柔會と知られたり「旦那浮雲あり升と聲かけあがらすみ入を高松下
し乗移る船の上木、指を掛て身を反しつ、内よいるを見て船宿の女房は「そんならすみさ
んよろしくヨ旦那御機嫌よろきゆうと船頭一寸押す手よ力かけれど开を機會よふんばる
竿、開く船大河さして漕出ぬ時、系政小膝と進め「かく名指で呼だも他でいさい先頃仲間
の密會で偶然、遇たを折るく碌、話しませあんだ故今日は寛裕話すつとも先づ差當て問

ひたさりのそなたの身のうへとふまて廊内を身脱けして洗いあげたる肌の雪ツキ、素顔の
薄化粧左様の境界とかわるを疾き浮世でも斯ふまでとは思わざりしこれより定めて子細わ
らんと云ふよすみ八云々と眞と偽言うちませて言語、艶をもたせて云ふ様「憂き川竹の勤
の身の何事を心よ任せず思わぬ人よ思われて身請されし、去年の冬さて斯ふあると廊下
せず素人の物堅いのがこらるさくそれ心よ染む相惚から堪忍仕業をあるされと金ゆへ假
よ任す身の却つて廊内よ居た頃の粹、あなを客としてうれしい首尾をあつたものと廊下
つかしく思ふよつけ我から其所よ身退き二度の勤、あならねども遊業生れの浮調子三筋の糸
の世渡を念がといいて邂逅といはんよ狂言の筋のよふですぞよ最良よして下さいと話半
分、爛を出来先づ一杯とどみ八が酌をしながら再度いふよふ「あなたの私しの身請の頃、
さつぱり廊へ足踏をささらないので何事の問ひ談考を出来さいの、今でも御怨みをふし升
すいわれて見れば沙汰さしよ身請させしは此方よか今さら云ふを野暮なりと系政阿々と打
笑ひ其怨みのさる事だが商賣柄の己だから平等よ浮世か渡られずたしかアノ時を米相場の
狂いから夜を日よつひで奔走り一ト月餘りは登樓あかつたが其後聞ハ花魁が身請沙汰よ腹



つゞし握つた珠をとられた心地然し縁よしをつささいで斯ふ邂逅ふからの親身よなつて世話せんと舌たるき口状の心を猜しすみ入は柳詞よ練あせと今の苦界よめらぬ身の妹脊かたるふ隠夫よそよ心のうつるべき此後とても糸政の屐すみ入を口説ども男の肌心願わつて神かけ三年は觸まじと誓ひしものと言つくりい當世風よ似合ざる奴校書と緯せしをいつか夫のあるよしさへうわさせられて始めとかわり客趾も打絶つ貧しく消す其うへよ夫綾次郎の病ひの床よ臥よけり

第四十九回

裏河岸の格子戸よ尾花屋墨八と筆ふとよ舊附し看版の軒提灯开を諦視しか行過る腕車を此處よ乗りすて突と入んとして躊躇の別人あらす糸政めて家内よ叫立言葉のはしく要こそ移れと佇立て耳朶傾むける傍の羽目よ密着と身を寄せ頼冠り點燈頃を幸として潜くみてこれも此内の爲体を立聞す其人物の善か悪かこよ分解の要せざれども其状の怪しげなる廣袖よ辨慶縮尻下りよ結ねたる三尺帯片襦かへげし装立の問いでをしるさ破戸もの糸政とれよ心を附す思ひ凝して聞居たり家内よの老婆が齒漏せる澁枯聲をふり立て「コレ墨八さ

ん黙止て居すと何とぞか所置をおつけであいか明日をもしれぬ年寄を困しめて元利をふんで仕舞ふといわんまり冥利もなりませんせナニ人間が悪いから静かよして呉るホイ年寄といふものゝ地体か聾耳で氣が短かいからツイ聲が大きくあるのさふひのあんのと云ふ了見の子へ左様だろふヨ標致といふ腕といふ殊々自まへの立派な歌妓一度轉べり貳三拾圓紙幣を握つて起る艶的へへへ、シテ御話のどふなり升へ一日おくりの氣休めも最う聞あきた今日が日限りいさくさのある譯をおかるふ元利をろへてツイ鳥渡とそれが出来ずの質物を流してをふ分のこと然しこの雜作を書入ふなつておれの直ぐバツマリは買こかす此方の注文即刻家遷りをしてもらいましようと思ひ延引させぬせり語言語は墨八はとく當惑し「左様かつしやれば」をさく二とい申せぬ仕儀ながら不流行の御茶引廻し加えて此中から親身の者の病人でさどふわがさても出来ぬ金子トサヤしてを今日とあり御聞入はさるまゝいが去とて質物が流れぬあつては明日から拾利を拂つて坐敷着衣をとり出し家業が出来ぬのみならず此土地は住居をあらす路頭も迷ふ仕儀ですからあらぬ所を幾へよをせめて一錢日歩の一口丈は明日の午時まで都合をしますから慈悲よとふかお安さんと云ふ顔シロ

りと打眺め「あんとお言だコレ墨八さん年のとつてを此婆のまだわいよくよ老若せず猫おで聲のしら化をふ、ろうかき誰うけよふ土地で名代の高利貸者屋あらしといへばいへ朝は借出す鴉金其夕方から地廻りして家毎玉の數をかぞへ日上するの私の商賣それから綽名を蝙蝠か安馬鹿とするのも程かあらア親身の者の病人なんぞへんしらねへと思ふのか箱廻の優治的綾の野郎が深間まで隠し喰いをしてゐるとか先刻承知の其うへよこの頃病氣で奥の間より引つり込であるといふ贅澤まで睨た眼ドレ踏込で眞体をはらして観しようかいとどふするへと怒鳴りし折柄格子をガラリと明けぬ

第五十回

「其落着は己がつけふ墨八任せでおさす」と云つゝ入来る糸政を見廻り駭くお安より墨八いとい面目さく「チャ旦那といつたのみ黙然俯首て言語なし糸政やから坐よ着て「コレ蝙蝠お安とやら今よそおがら聞くとこのの貸金が元利積つて幾何とかりろの又た證文も持参せしかかく云ふ已れば墨八の馴染客遠慮よ及ばず頼くいよ子といわれてお安は追従笑ひ俄に形を改めて「左様旦那がおつしやると無端をふした口狀が今さら後悔いたし升老の一徹墨

さん堪忍して下さいシテ勘定ともふすのを旦那の目からい些い金の金子三兩一が一口で此
 雑作を抵當二拾五圓その他は坐敷着共衣服三枚金の指輪を突込で拾五圓一兩又一錢の
 日なし利子夫らの利子の滞をりが概略四五圓証文二通のこれありと帯の間より取出すを糸
 政受て一目を通ふし傍へ置きつゝ「今云ふ金の指輪といふは若も蛇形の細工はあらずや
 ウ、左様だろふと領ひてそんなら金の元利ども墨八は渡し置の暇どらず衣服其他をとり揃
 へ受取来たるべしと事應揚取扱かれか安業の最前の擬勢をあらで世事たらしく墨八さ
 んの仕合せをのこんな立派な旦那を持って随分共大切な世話さるが身身の爲どの申さ
 ずとをの事であつたと尻高は辭義をそこ〜旦那難有うと言捨て表へ出るを見送つて糸政
 の貪慾婆を去したれば最う案ずることはないと云ふ墨八手をつかへ「日頃よりの深切
 まして此場の不始末を救つて下さるの禮を何とをふしてよかるふかと云ふを糸政おし止
 め「難の〜これしきお禮を云ふは及ばねへンが墨八此うへとも瘦我慢をいださずよ
 人の意見は従がつて身落着ととるが〜心一ツで歡樂自在貧苦の夢も見やせまいそれと
 を奥の病人は心のこしてイヤサ心悪の親類の人すら洒然されいよナ、ある氣なら療治代

をいなり出して遣ないをのでもないこの所をとつくりとぬしが胸は義理人情をか
 み分て味ひ返事をツイ鳥渡とをゆくまいから再度で聞来るであらふと思ひあり磯の汲ひ
 しはよからまる言語の端々を繰つ紙幣で五六拾圓「什拂のこりの釣銭は聊か乍ら當坐の
 小使よつかふがい〜手渡を請ね濟ぬ今の難儀去とて請し以上は糸政の言状を無解よ
 せん術つきながら又たよい思案をあらんかと墨八の思ひ返しつ禮をのべ請納むるを糸政見
 やり笑を含んで立歸りぬ

第五十一回

春あちで臆空の霜曇り宵の間降りし雨脚を小夜吹く風よふさすみて月代塞く角田川は流
 す浮名の都鳥中洲は雌雄のしよんぼりと双羽濡して身を託つ世を牛島の川端よおぼろか
 らも來世を待乳の山の死出三途翌日の今戸の朝煙更行く路次は人影の有や無やと三圍て是
 が名残と引寄つひつたり抱き月影を粹を通して雲隠れ暫しの何を庵崎や堤よあまる穂芒の
 穂は顯てはらくと落ちて行衛を白露の無分別なる置所霜とし結かひもあさ果敢あさ縁を鳴
 虫の洲崎の里よすがれ行く秋と唧つよ恰も似たる男女を誰とする彼の墨八と綾次郎よて身

の詰りより諸共此河水は浮名をば流す心はなりしより病さらばいし綾次郎も此地死に處
と墨八も介抱されて漸く堤を越へて河岸の棧橋として踏躡つ互ひ顔を見合せて哀れ
を添へる小夜礎うるみし聲も息たわしく傘を力み身を据て綾次郎の墨八も打向ひ綾次郎
道すがらを彼是と思廻せば私こそ此肺病をかゝりてより三月越の永の苦惱所詮本復の覺東
おければ何時迄御世話ならんより身を淵川に投るとも緒繩を首に纏ふともして死ぬべし
と豫てより覺期のあせどほやよくもなたが切なる情を纏はれつひ一日くど過せしを今
更歎くべくもあらず我身と違ひをあたこそ此懸縁のつちがらす榮耀の身もならんを甲
斐無己を見拾すして共死あふと言て下さるは涙の出は嬉ひけれと生て此世も居られる
身姿の花を小夜風も散さで跡は生かからへ我あき後一遍の回向を浮たのみ申す時とホロ
りと翻す一甲涙を顔を背けたる男の膝も取附て重き眼瞼もふくれ毛のかゝる始末も成行を
元より前世の約束事何状未練のあるべきぞと思ひ定めし墨八はあかく聞入す墨八「綾
さん何を言ふのだへ共々死のふと言ひ替せしおまへと一所今此所で死ぬは私の本望さ何
娛しくて生らへん今さら云ふを愚痴ながら浮氣を稼業にして居れど心で解ぬ下紐の昔氣質

の木地藝者當世風もそぐりねバ何時か秋風霜枯も客趾絶てあらぬより嵩は高利の日さし金
日々催促られて苦煩とも可愛男の病をみとり癒らば夫婦共稼ぎ早晩は今の辛苦をば賸物語
よそ折あらんとのみし果も情ぢや金ゆへからひ糸政が私へ懸慕の無理難題いとしおま
へと縁を断せ己が持物もせん爲よ安が借金と立替て恩義をかせよわる口説さらす金を
調へよと云ぬ計りの切迫の掛合言解んよを言語さく去とてお金の工面は出来ず何様考ひ直
してを死ぬより外も思案を出す所詮此世で添れねバ來世へ往て憚りなくおまへと夫婦にく
らすが樂み私しや嬉しふ死も舛る綾「スリヤ夫程迄も思ひ詰死ぬと覺期をなされ上り最
止だてはいたさねと甲斐しよさ身も此月頃御世話も成△△し御恩を送らす情を仇て返す
と云ふ者墨「アレ他人らしくお言でない井筒ようつゝ禿髻幼稚馴染の夫なり婦あり此世の
縁は淺くとも水の深みへ身を投げて綾「手あ手を取て冥途の旅墨「人目に掛らぬその中も綾
「幽かよ聞ゆる長命寺の墨「通夜の念佛を便どさし此世の名残と兩人が手を取かいしれよく
る折から諸行無常と響くある淺草寺の鐘の音を水も沈みて陰かよさこへ空も更行真如
の月も雨氣ゆへも影薄くつさぬ名残を互ひも願し河岸近く進みより南無阿彌陀佛と唱へ

ゆゝ前なる川へ諸共飛込んとする折しも渡し小屋の裏より突然顯わる一個の曲アハヤ
飛込んとする墨八が帯際とつてひき据たり

第五十二回

前回既又説如く綾次墨八の兩人の諸共入水せんとせし折から誰と知らず墨八の帯際と
つて曳き据たる爲体くの不用意ある綾次郎の驚き周章を必竟吾輩が入水をとひるの厚
意さらめと頓又猜慮するものからコハ上ささお情あれと死あで叶わぬ兩人の身お見通し下
されと言つゝ近寄肩頭を邪ひろぐナト癖者が板金剛の拳の一突何かをいつて堪るべき骨
細のうへは病身なる綾次郎の宛から枯木を倒す如く後方は浮走て川へ入水と落入たりッ
レト見より墨八が疾嗟と計り身をなへ捕れし帯をふりはどさくさくくくと輪廻りして
同じ淵瀬を身を沈めんと遁れ馳るを左はさせじと飛かいつて襟本をひすと掴んで引倒せば
女おがらも一生懸命倒れおがら癖者の足を双手はすくうよぞ思わす向方へチキと迷
途おがら踏といまりエ、小擬勢を腕立と彼癖者が鐵拳をかため疾く撃かゝる瞬速の進退い
かで入水の暇を得んかおわぬ迄を墨八が捨置たる雨傘おつとりサト開きこれを小橋は右

左りふり亂したる緑の髪づら砂を蹴あげの緋の裙命惜まぬ女性が舉動いよく噂る癖者が
微塵よされと振り上る拳支ゆる雨傘を脚下に破羅離と突裂たり怒る勢ひの禦ぐべくおわら
すといへる身と覺期の墨八強ち又駭かず开が一撃は身を反し避つゝ其方をキツト見仰
げ言語忙しく怒するよふ敵視か報仇かしらねども現在情夫を先立て共死おんとする妾を
手荒に障碍せんよりも撃るゝ覺へはあらねども撃て心のはるゝおら氣儘に撃て早や去りネ
死期いそがるゝ妾なるを覺悟さわめて身動きせぬを癖者見やりて冷笑ひ左様死またくバ
手問暇いらす殺してやるよが其前方より引導が有り云て聞する事があるお冠りし手拭かひ取
て肩に打かけ「おすま久しく逢ねへ」といわれて喫驚墨八が見れば面は刀痕五分鉄の洋髪
お相写かかれと見違ひおさ十年前わかれたる小櫻丹二其の人おれバエーとばかりお俄か
お仰天をこそおわらめと小櫻丹二破傘尻おどつかと坐し「しげねへ戀の申越から心の駒を
走らして驛路の鈴の五十三次とまりくの旅舎でしつぱり汗は浪華ある難波新地は二年越
し夫婦となつて消したわけく義弟金八が斷頭を奪去心で様をつく雨夜を幸よ三條碓見谷め
られた其折の命の綱も切果たを太郎國香の情でとめ據るなく江戸表へ供して來てから奥

羽の戦争かく面体は疾をうけそれがもつつけの幸ひよならない事をなかつたが浪華は残せしめてめへを案じ暇をとつて處々八方尋ねめぐんで此土地へ歸つて開け櫛橋工一格子よは神燈死んだと猜せし其おすみか藝者姿よ素化て情夫狂いの情死沙汰といは釋迦さまでも氣がつかずへと云れて墨八の愕然たり

第五十三回

丹二が言語を聞毎又且つ呆れ且つ駭ける墨八は漸く思ひ定めて借いふやふ「現在私しの不行儀をおまへに見られたうへからの兎や角いふを詮きければ三條橋へ切首のわつた浮評が浪華まで聞へた時からおまへの歸らず夜の眼も寐せず待ちこがれ音沙汰なければ此世で所詮遇ふ事なり難き刀の鈍みおられしと思ふものから哀別の涕は呉て世をはかぢみ身を淵川へ沈めしを死ぬは死なれず助れら東都の兩親よ今一度遇ふて死さんと未練を起し若干の苦難をへし身のうへいと云難きことながら君傾城とまでおれど其折までの我と吾心の探り崩折すといふを丹二の啄入て「エ、喧ましいハ、其言譯が今日の間は合ふと思ふカへこ骨且那は請出されし始末柄から此己が戻つた上りもととの夫婦よさそよと約されし情を

仇は密夫狂ひ思ある人を踏附て左袂よ世を渡り此世の義理や人情の八ッ乳の皮と面厚く名を呼びかへて墨八と片名のこしているよしを骨且那の話でさゝ何時か怨みを晴さんと手前の住居よ近寄て内外の様子を窺ふ時悪乞婆の來合せて世話場の魂懸客某しが扱ひより色仕掛の口説まで耳引立てよく聞け彼の密夫の奥の間は病づゝあるを能知たり要こそあれと其の日の立ち去り今日踏込で存分よと來かゝる路次の夕間暮手ゆへが戸口よ近づいて入より先よ外よ出る忍び出裝の男女の姿怪しみながらを倍へと勘附き欠落みならず情死と先を括て見へ隠れ詮術あつて跡をたたい來るのを知らず痴話三昧聞よ得堪ぬ腹立しは幼稚馴染と吐言たる綾の野郎よ見かへりて己よ愛想をつかした女引率いて何地の傀儡屋へ二度の勤よ賣こかし开が身代で執膺を冷してくれん左様思へといふ顔墨八うら眺め「チャ私をバ殺してやるふと強面の凄みお文句の虚言で最初から私を賣る氣かへ「知れた事よ當世よ生身を其儘殺し賣り「ハ、チネと墨八顔杖を屈がみし膝よ立きながら何か思案の体なりしが「そふ云ふおまへの心おら身よ誤まりのある私賣るよを厭ねど眞實私の心といふおまへが此世よいなさると聞た初め眞よりうけて悦んだのを待ちわびた果の氣休め虚言と思ひ辭し心よ

りつひしかかまへ見限られ言譯さへを立ぬ仕儀夢から覺てはしけれど造りし罪の悔て返
 らすそこをどふか了見して情夫の骸と同様水も流しておくれなら元來通り夫婦も成た
 い私が願ひいかでくと打詫て袖も縫りてくり返す雲過見かす月の顔丹二の心も思ふよ
 ふ蟹這ふ澤邊と世の中を直より行ぬ此己の持つ女房の相應く以前よりを見上たる度胸と
 い、縹致とい、ア、然なりと言語を和げ「ろふ根情が直つたら執念く野暮を己もいねへ
 兎も角此處を立去つておめへの住居も歸つたらへ委細談をするとしよふ「ソ、心から打
 解て夫婦とあつて下さるか私の身賣の其替りか金を儲ける手段があるぞへ「それも歸つた
 うへで聞ふドレ行ふかと手も手をとつて墨八が行か、りつ、見かへれば「サイ墨八校の野
 郎も未練がのこるか「アレ氣障な事をい、であ、い、つ、思わす身をふるもし「エ、傑
 とする河風とさすが女性の氣を弱く暴く見へてを心よの念佛となへて去るあるべし忽ち月
 の雲隠る朦朧々々となる鐘の早や十一時を告るよぞ丹二墨八の兩人の夜更闇の中よと急脚
 り堤を過る後より追ひかけ來つる足音を怪と見かへる兩人が際も其身を押し入て行をと、ひ
 る爲体只看れば溢染笠も面の見へぬと袈裟法衣着つ脚半を結し草鞋がけの行脚の僧と見る

もの、我から氣遣ふ兩人の兎角も問答も及ぶべき捉れし袖をふり拂ひ疾く馳せ去るを強ち
 ん追ひかけをせず佇立僧と兩人の影を川端も隔て、見へずありよけり

第五十四回

却て説く糸政の馴染かさねし野晒を他人も身請されしよりいと本意なく思ひ居しよ該野晒
 が墨八と校書もなりを替りしよ計らず邂逅再度起る煩惱の直も儂が圍ひ妻もと容易も思
 量りしも兎や角辭を左右よして墨八が承引べもをあらぬよりいや増りよ慕ひしく恚てぞ他
 人の周旋をも迂遠しとして一日の事微醉さげんも任せつ、直接も説かばやと墨八が住居を
 訪ふも我より先も容あつて言罵しるも躊躇つ計らず聞知る蝙蝠も安が金催促の云々を宜さ
 し會とし此場をバ處置し爲体の前回既も詳らも説ね然して後日毎墨八が返事を促し否と
 いへぬ金書狼婆の出入をバ前門も禦と云ふをその思からして虎威を張る糸政が情夫わ
 るを知りぬいて生木を裂ても男の意地と通退させぬ手詰の難儀借社と墨八の綾次郎情死
 せばやと計しよてそを又締の爲体の前回は説盡せり其日は是非の返答あらんと糸政が心待
 せしよ左のちくて井が翌日も墨八より日頃より似ず媚めさし文言なる迎ひ状を送り越し例

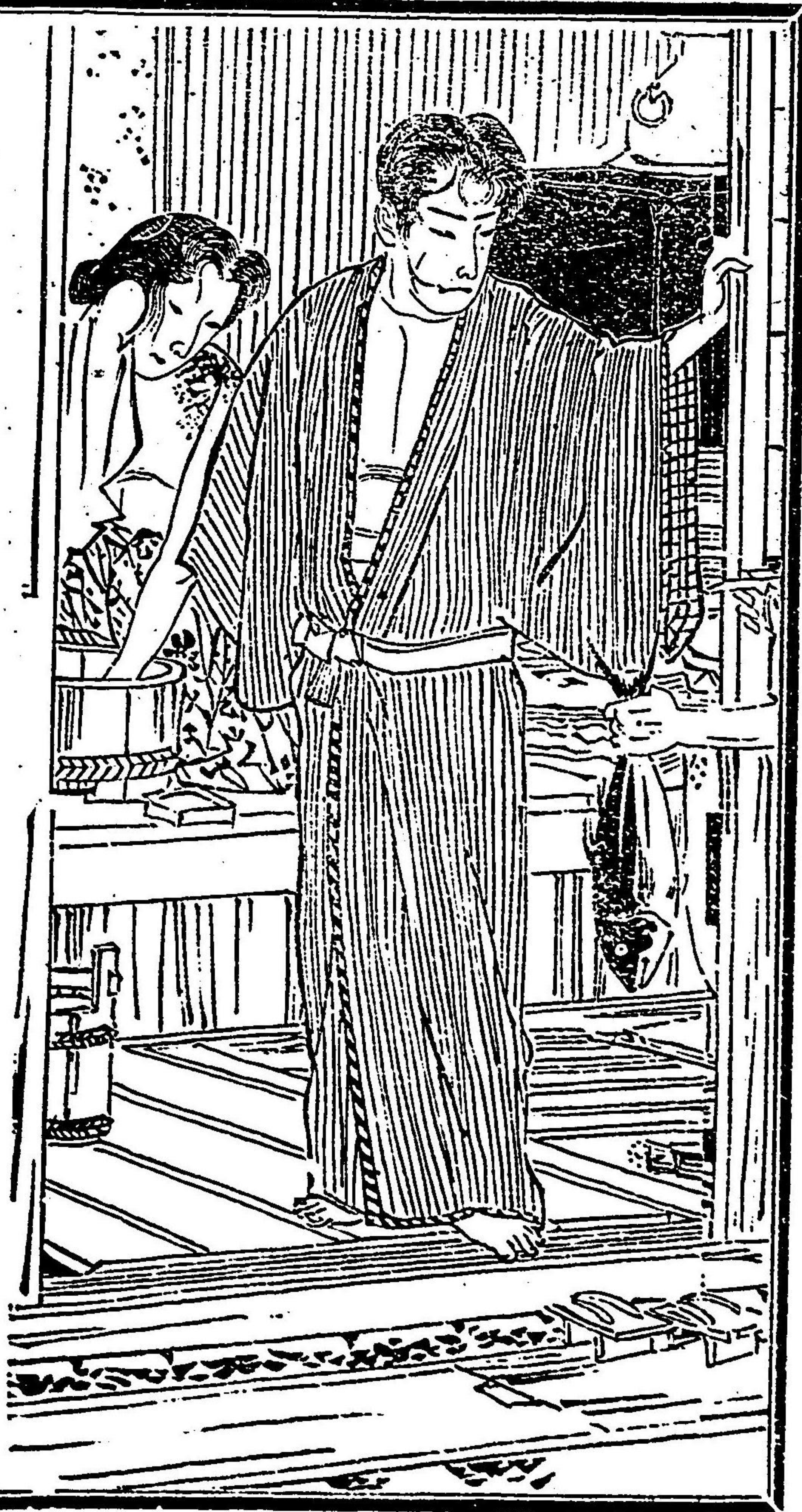
の船宿も待上り、と認めあれ、雀躍し忙しく吾家を立出て、到處の柳橋々の邊の船宿なり、
 ナイ姉へ奥二階、系政の目的が潛居たる鳥渡逢て、へから一坐して居る墨八が知り人とい
 いさへすりやア先方合點だつひ云々と通して、くんなと此船宿の表縁、片膝あげて腰をかけ
 いつか去らぬ其体の廣袖、三尺帯刺さへ面部、刀痕一癖あるべき人物、ゆへ名指といへど
 然とり次で故障いながら、かと家婢甲乙の懸念で立ちかねつ、おづくするを忙がして疾く
 せよと促がす、是是非非なくも言傳けん、此方へ來ませと案内、つれツカ、通る奥二階、系政
 墨八居あらびて、酒くみかわす坐の真中へは免ナセト、片膝坐傍若無人の爲体、系政キツト
 看るもの、度外置て無端とい谷めす墨八と見かへりて、「此人が今いつた綾どんか」と云ふ尾
 り退て、偽綾次の小櫻丹治小膝をすゝめ、「へい吾的が其の尋ねの綾次郎、邪魔の處へめへり
 やした實、吾的の出る幕じやアあり升まいが今日の墨八どの、談が差込吾的の身のうへで
 居ても立てをいられねへから、難苦破亂、目よかへり、どうせ寝がへりをうつた阿魔、い傾
 着はチへ、むしろ吾的の振方を附ておもらいもふとふと出かけたのでせへやすと云ふを打
 聞、系政は「それぞやア手切金の一件でか、左様でござんす、其手切金の目數さへ極れば、翌日とも

いわずつひ此席で未練、しし又文版をビタ、押て物別れ早く事が極ると云ふもの、墨八の
 口からは何といつたか知らず、へが吾的を元、此女、家庫までをいれ上て、斯の姿の成行、加
 之へて病わづらい箱屋を出來、チへ始末からころがり込で、墨八が細腕だのみ、喰てる身、それ
 を旦那、譲る日、やア米櫃をとられた同様の病、わがりゆへ二三年人並の稼、の出來、チへところ
 をツント察し、のうへ手切金の相場を極め、器用、渡ておくん、せへと、難題、文句の端を開きぬ

第五十五回

系政、それが語氣を猜し、苦々しく思ふ、よつけ綾次とい、我を見知りし様、思ゆ、優男の箱屋あり
 か、る癖者の然か、名告こそ、疑團と心、よの案するもの、虚心、あく答ふる、よ、「墨八よりを聞
 得たる、義理ある、情夫の、身、ゆへ墨八が、身代の、貸金、こめて、百五十外、お主が、手切として、五十
 圓併せて、都合二百圓、それで、文句が、あかる、ふが、ト云ふ、丹二の、冷笑、ひ「ナニ、手切金、が、たつた
 五十圓、文句が、あかる、ふを、すさまじい、タイ旦那、昨晚、からの、飲續、け、管を、巻す、よ、本音、とい、チへ
 掛引、沙汰、いよして、くれ、「誰が、掛引を、云ふ、を、んか、一体、身の、代の、其外、よ、手切、何ぞ、を出す、者が、當
 世、あらふ、と思ふ、のか、そこを、一番、我を、折て、い、さ、り、次第、よ、出す、手切、多少、はい、われた、義理、で、な

かるふ「イヤサ旦那を米市で手廣てひろまうつた名前なまえから今いまじやア相場あはだちの昂低あがりひも胸方むねかた寸すんで動うごす位
 と世間よかんの評ひやうも似にをやらす此方こなたの弱よわい日蔭ひかげの身據みよんどころも魂たまご膽だんを愧はぢ顔かほかゝせていわせて置おき三



72

年のおろか二年越しの米買錢も不足のたつ五十圓との情ねへ赤兒の腕を捻といふもの「それが不足で手切金何價をらふ了見だ」「左様廿三百圓とをいゝたいがやす目をつつて二百圓よ」「ム、跡元を見る破戸の魂情他人のしらす此系政へゆすつて金を出さそふとの目利のきか不へ奴でいある面を洗つて出直をせととら嘯ひて相手よあらねバ丹次はカット憤出て膝たて直して膝行り「コレ大增の表面をしやアがつて二百圓が出せネへのかイヤサ投機の懐中の斯ふしたものをか左様いわるゝが瀧觸なら金片切て話を纏めあ、ならずバ談の破れよしよう」と強面いゝかゝるを系政驚く氣色なく「左様さくからよやア手前より此方からして談の断る以前馴染のあるゆへは世話してやらふと思つた墨八縁又つあがる手前がある」と聞ての後日が夏蠅と手切金を出してやるふと甘言語を目的よとりいゝふりかゝる口占で墨八と慣合て企んだ事と知るうへは望みの通り手切金渡した所が表向此墨八を彼者よつかい悪計をかくか欠落か二ツよ一ツよ目的をつけれバ迂濶談よ乗られチへと墨八丹二を見廻りて肚裏を穿りてキツパリ言れ开が相談の纏まりを案じあがらよ默然たる墨八がギツツ胸よさすがの丹二をそれいと語り扣へしが猶懲すまふいわんとするを系政押て懐中より十圓

札を二三枚墨八が膝よ擲つて昨晩からの坐敷纏頭といゝ捨て其儘見向をなさず憤然として立歸りぬ

第五十六回

却て説く墨八の情夫綾次郎と情死を計しを不時よ丹二お支へられ無慘よを綾次の水よ濁れしを傷ざるよのあらねども墨八が當時の心を如何よとするよ一端は初恋よ馴染し彼の綾次が艶治郎よ戀々の情堪へぬよありしも彼は温和の性よして久しく同居なすからよ墨八が氣象との事渾て表裏なり去るからよ故人丹二が活潑ある舉動を日頃想起しつ追慕の念が止がたかり恚りけれバ死せしと思ふ丹二よ再會し容易よ心の選りつゝ再度睦語ふより系政を誑謀をふせて随意の歡樂を翫さんと企だてしを事成すして僅の所得よとどまれり元より不行儀を成し身の此地よ永く留まるよふさく有金若干ある中り都下東西よ移り住ひ魚は鮮さを撰喰ひ酒は兼好を特好で贅澤三昧よくらすものから墨八の氣質いつしか昔ようつるふて女俠客の舉動多く好事よも世禁せる刺繡すら誰よ囁ねけん右手の臂より肩へかけ櫻花幾片かを刺寫て丹二へたてる起證とし小櫻おすみと自ら呼りといゝ文化駭々の都下よかゝ

る遊人の横行すべくもあらざれば我から世間と狭區つゝ丹二が出生故郷ある上州として小
 櫻夫婦の旅出しつ幾日をあらで彼の地より國貞村の知己人許へ足を留めてより一當
 の景況を問ひ試むるより以前といいたく異なる風土人情怨みの同じ浦島が龍の都をどり來
 し心地せられて歎息せる丹二おすみの貯へを聊かなれば早や場あんとし詮術もあらざりし
 必竟丹二の吾故郷へ飾る錦事欠き零落なく戻り來たりしも賭博盛に流行る土地を目前
 の事よしわれハ公沙汰の嚴重さま、かゝる不正行爲を嗜める者の滅しが如く秘密賭博を
 催すものから其黨派あ非る外の探知ること甚だ難かり恐れ丹二は望を失ひ徒ら四五日
 を過せしが不圖途中にて其以前の袁彦道仲間の某選近より兎や角談の序をとて此頃の有
 況を問ひ試むるより私に賭場頭あるものあつて陰に其道の流行のをさく以前より異ならず當
 村の如きの其以前壺ふりをして見知りならん背高松が我持場としてアレハ古刹を借切
 て夜毎大分は賭場を張り己のいたく老込だれば堅氣とありてより附ねと所謂昔しの杵柄
 て已が巧者を慕いつゝ問ひ來る若輩あるより詳に賭場の景況の知れりと委曲な談を聞
 のから丹二の種々思案を廻らし開が計書をおすみと授け諸共其夜初更の時刻は彼の古

刹として出で去りぬかゝるべしどの何様知らん例の如く破戸男等が古刹に鳩集て背高松を
 上座よし盆座を圍て餘念なくときこの輪贏と争ふ折から案内もせで戸口を開け開が席上よ
 進むの誰ぞ例の次回譲るべし

第五十七回

該時圍坐の諸人の愕として回顧の妙齡二十七八もや淡粧麗として却て空を愛へ青黛痕濃
 かよして明眸秋水を醸すゆり髪洗ふて俚俗よとのムツレッタ結びよせり藍辨慶の襟附羽
 織袖帯を斜に結び手拭しどきて肩よりけたる女俠者の粧ひは諸人互ひ顔見る處よかゝる
 姐公の見慣ず姪姪者もあるものよ狐狸妖怪にあらずやと狐疑して未だ言語を出さず彼の婦
 人の毫を隠する氣色なく高坐せし脊高松も打向ひ「阿兄ハ此處の賭場頭かへ新参りの儀よ
 も極りのカスリハ與るから一勝負張して呉れ腕前されい賭錢よこだ見る様者者じやア
 いやと片膝立て居据りつ煙草輪は吹く爲体一癖ありとい猜するもたかが女性と設りて脊高
 松の大口開きて打笑ひ「最初の野干の悪る戯談と思ひしをよよく見れハ眞人間無敵のい
 へを打込で寺賭博の念佛講泣せてやらうナア野郎共と云ふ尾も付て居からハ甲乙こいハ

ア替つて面白し相手が姉とあるからよやア戀の手練の言目を立せ一番こつりとせよやからぬ「何しろ玉が上代物懐中金の有無も目的を附る迄を不へ臍下三寸儘か金匪然し絆が首尾過ぎて小氣味が重るい眉毛も唾を濡して置ふマア姉の何處から此處へ來たのか聞しねへ名前は何と談しなせへと右左り問ひ掛られて彼の婦人の冷笑ひ「そんなは出處や名前を聞たくはつひ云々と談ふが談す日よやアおめへたちの胆がひしげるのみならず第一この親分が株を擲よやアならぬ仕儀大層顔よかまへても鳥無さ郷の蝙蝠傘で仰見ぬからして自惚し禿山生長の背高松最初又覺期をしてお聞きと女は似氣なく大胆と言れて怒る脊高松面象かへて立上り「此狂氣阿魔何と吐言く二言といわば舌の根をとめてくれんと憤出と彼の婦人の耳も觸す落着て横目よッロリと見やりつ「静よおしな馬鹿らしい壯年ぞろいの丈夫の群へ女獨で飛込からの小腕奇がらも金鐵いりむざく手込よあらふかへ知らずの名告つて聞そふか女俠客の小櫻おすみと左様名告のの小櫻丹二は因縁の假土地の評語も隠れなく誰を知るある近年よ奇き博徒の大紛争丹二が獨り川向ひの嘉十が賭場も切込て一人を餘させ盛し手柄話しの借て置て此地邊の小櫻の持場であつたらへからの他國行の留守

中の兎も角も縁も繋がる儂でも歸つて來れば氣の毒ながらおめへの此處を去るとても去らずバ子分の頭數儂が配下よくつぼつて居る氣なら隨分とをよ目をつけてあげよふのいとあくまで見下げし嘲弄の言語を聞も得堪へずして脊高松の掴かみかいらんとする時遅く彼時早く大戸をハット蹴放ちて戸外よ窺ふ小櫻丹二は眞一文字よ跳り入り哮り立ちつゝ撃んとする脊高松が利腕丁と取り留めて「ふざけた事を仕やアがるナト突放ち誰だと思ふ吾社の今を評判の小櫻丹二「何よ迂奴がとい、敢ず再度襲い撃かゝるを右と左よ身をかきせ突とつけ入て脚がらみ腕を丹二の背高松を膝下よ押臥せ動かせず斯と見るより狼狽居し子分の甲乙力を添んと駭立目先へ丹二の腰よ狭みし菜刀キラリと振り閃めかし寄らば先早や脊高松を唯一刀よ突んとする刃が凝勢よ畏怖れ誰を手向ふ者をあく手を束ねつゝ扣たり

第五十八回

おすみの此場の爲体を事穩便よ落着と欲するより良人をおだめ四方の人をも懇切よ説諭し現在菜刀よ血を塗らさじと周旋よど丹二を元より事を好まず刺さへ押臥せたる脊高松が兩手よ合せて命を請よどさすがは無慘の處業を得果す却て言語を和らげて「汝等我が面体よ

疵あるともて見違ひけめ我能く汝等を見覺り故郷去りしを十年以前無事又遇こそ喜びなれ
 壺ふりの脊高松を害心あらずバ我ゆるさん諸人如何と見渡バ皆一樣又平伏て「今より後の
 親分とあがめまつれば疎忽なる罪ハ許してたびねかしと異口同音よぞ詫あけり纏て丹二は
 脊高松を扶け起して諸人と親分子分の盟を改めて契約し酒宴を開き借賑わしく志氣投合
 の輩こそ打解とも又た速かなり恚て後丹二は親分と崇められ従ておすみを如公と稱へ快樂
 又月日を送るもの、都下又慣たる身よし有バ片田舎又栖わびしく歎息する日を多かりし一
 日の事おすみの獨高崎の宿又物買又用事あつて夙又我家を出たりしを冬の日影の短くて路
 路はいつか黄昏て北風さへも吹すささ堪がたく覺ゆるより只見れば路傍へ又杉葉立たる酒
 肆あり彼の一休が道歌いふめる現世の極樂淨土とは此處あんめりと獨語て急ぎ此店又休
 憩て雜魚を炙らし殺として筒茶碗又傾ける味淡けさ田舎酒も時又取てハ甘藷と稱ゆ冷腸
 又灑ぐある無上の心地愉々快々瑜珈成就の快樂をかやくと舌鼓して傾くる一杯々々又た一
 杯最初又人よく酒を呑み稍々時遷れば酒よく人を呑とも云ふべし最後又いたれば呑む人の
 心の夢中又馳るより酒酒を呑む爲体くおすみの元來酒を嗜ざりしを花柳の巻又身を措しよ

り何時といなしは香習ひ今の女性又似氣をさく數升傾け飽ことさし今早醉氣充分又時世流
 行の小唄をばうさひあがらふ飲耽るも誰が相手ささ身獨又興のさめけん酒瓶蹴倒し珊瑚と
 よろ光さ出て去らんとぞ酒屋の亭主慌忙去く袖を捉らへ「女中大分気機の上ささ酒肴
 の價三貫六百打忘れ玉ひしかイヤ置たまへと出す手を打拂いつゝ見廻りて「俺が今の懐中
 の買物歸りの釣のこで銀錢二つか三つのみ明日まで貸てお呉アハヨと再度出んとするよこ
 の偽醉又かこつけて酒食を掠むる者なりと頓く猜するより氣早よ亭主の聲を荒立て「コ
 レ御客錢を拂つて行きささい貸賣一切仕つらずだ何處の馬の骨かしらねへ阿魔よと微聲よ
 いし口小言生憎おすみが耳又入れバ何狀聞捨てよおすまや其儘店又立歸り亭主を捉へ
 何をかいふ次回又説を聞ねかし

第五十九回

醉顔恰を露を帯し花の標致はありながら志象雄々しく語氣烈く刺の熱毒又比べさおすみ
 の酒店の亭主又向ひ口又課したる税さくとをいわせて置は出放題馬骨と嘲り阿魔と弄ひ嘲
 弄口をたゝきたる其趣意聞ん返答しなと詰問バ亭主は今さら後悔の頭を撫つひたすら言

誤りを詫言ふよぞ弁を得意よして不足ある酒食の錢をふまんすと本性たがいの生酔の口輕く
 を罵るよふ此人の迂氣ある巨圓ある眼を持ちながらまだ面識のつかざるや俺はたいの女ど
 思ふか評判も聞つらん國定村の小櫻おすみおまへ何ぞも卑下をくひ何顔もつて人中で姐
 公呼れよされよふか泥を塗れし全様よわしざまいじれたる其念晴よ斯ふしてと半分忝た
 る酒屋の亭主が頭頂をハツと擧つうたれて怒る亭主をバ助けて居合す小厮等がともくよ
 醉狂ふおすみをばさんくよ擧ちすへて以後のこらしめ身よこたへしか一昨日来よと戸外
 よ突出しドツと笑ふて戸を閉しぬおすみはたいさへ頓倒易き酔脚しど儀あるうへよ力任せ
 よ突れしかバ何かのつて堪べさや横方よ臥し轉び雲時の起も得ざりしがキト心附足手の
 傷を忍びつゝ漸くよ立上りいとくやし氣よ見廻りく初夜過る頃我家へ歸りぬ次の日わり
 し次第よ丹二初假子等よ告で意恨を晴とべさ便宜を右左相談しおすみの兩三人の假子を
 從へ彼酒屋へ押行て如何ある舉動を爲しと云よ假子兩三人分れ分れよ立寄り素知らぬ休よ
 て酒食を言付稍々小半時を過しけり時分のよしと小櫻おすみ美態て酒屋よ入來り故意よ笑顔
 を造りつゝ酒屋の亭主よ向ひ昨夜のいこふお世話ありと酒食の價三貫六百貫數改めて請て

お呉と投出したる釣繩錢心据れて亭主の困じ今さら詫言語もさく絆不用意を呆れ居るを
 さをこそあらめとおとみの音語を更ためて錢を拂への借金さし借ささうへの立派さは客
 テ俺より云ふ事ありとの昨宵の禮を返すため酒食の料を容易よかし刺さへ足手有らとさく
 接戸療治の手厚の潤待彼處よ掛たる辨慶齋の鯨魚よならぬがもつけの俸伴その返禮をとい
 さまよ有合ふ火桶をとるより早く亭主よ目がけ打つけたり

第六十回

時あらぬ灰の吹雪や炭を四方よ散せと目點の反たり是や合圖と覺しくて最前より酒食を
 さし居し兩三の若徒の此期一度よ起立り斟酌をさく膳碗皿鉢の種類より酒醬油の樽魚籃の
 鍋或の破壊或は顛覆手よ觸れ目よ遮ざるもの都て損害せざるのなく亂暴狼藉いんかたな
 し刺さへおすみが指圖よ從ひ周章騒ぐ亭主小圓を捕つと袋叩きよ打すへたり絆充分よ仕遂
 たればおすみが悦喜さへめならず若徒等を慰勞てこれよて恥辱を雪ぎたりいと退出べしと
 彼若徒等を從へ悠々此場を立去ぬ悠る振舞の儘あるより評判頼よ喋々しく且丹二の賭博
 よ耽り近郷を横行するよし公沙汰よなりしより追捕近時よ有べしと聞ものから小櫻夫婦

は此地の滞在覺束さしと早くも悟りフケぬ先さよ去ばやと談考頼又決するも目前貯へ金の
 のあらぬより進退不如意を如何よせんと互ひ肺肝をくだくもの、良策とて得浮ます過
 急の詮索書餅多かり此うへ詮術おし運々して事を誤つよりの手短な斯せんと丹二のみず
 み耳語バ開の屈強の事こそあれと密話時刻をうつしけり話頭轉運中山道の驛路中無比
 の繁華と稱ゆある高崎宿は年頃住ふ高梨金兵衛と呼ぶ賣藥屋あり家業の外は所藏金を諸處
 は貸附高利を貪り慈悲善根の行爲なく慾海は溺れたる嗚呼の匹夫あれども母金積々子金を
 産出して日よ加へ月よ積で物持の名は近郷は聞へたり且つ其性頗る色を好み妻亡かりし後
 の五十齡近き年よを取す炊女下婢を戀着不品行は長く此家よ有る者稀あり客かなれば算盤
 よかけて妾として別置すといふ閨門の醜聲四隣は喧すし俗て説く一日の黄昏は旅行女の容
 貌美のしきが急病の起りしや此店頭よ立寄つ寶丹一包を贈ひ素湯を請ふて服用せざる頻よ
 をだへ惱める体よて頓く去り難き有様よて片手は痰を押おから苦しき聲音を發しつゝ店番
 の夫よ請らく妻の東京の知己の許へ赴く者よして見給ふ如く獨旅あり生憎よを遮ふ持病の
 癩おこり一步を運びがたしなれども一二時間休憩されば醫者の手を煩らひさで病頼は癒る

を常とす一樹の蔭を多少の縁雲時が程お店の隅を貸たまへ情まころと他事をなく聞へるが
 ら帯よ挿みし結梗袋より小紙幣五片をとり出つゝこの席料よの足すとも枉て受取たまわれ
 と餘儀なき頼の一伍一什を奥より來かゝる主人金兵衛暖簾口より首さし出し見聞せる开が
 容貌の美のしきよ目を細くし唾を呑込で眺め居しが今又た半圓を惜氣なく謝儀として出せ
 しを見るものから我よをあらで聲をかけ女中よ不時の病は葉れさぞかし便おくそふらひん
 其處の端近此方へ入て心をささく休憩らい玉へと慈と色とをかけ言語推笑たらしく迎ゆる
 を辭おがらを再度いわれ彼の女の最嬉はしき風趣よてお慰の忘れ候らひと禮をのべつゝ
 誘れて奥へ伴ないれぬ

第六十一回

宵闇を幸として黒板塀を乗越ゆ塗庫の裏方へヒラリと身を跳らせ降立庭の木下蔭忍ぶ男の
 あるぞとを知るや知らずや表坐敷の戸をひそやかに内より外し外方へ出る女あり人待顔よ
 四方を見廻り縁て合圖の十一時時早や過て音信なきの便おしと獨語折から傍なる石燈籠の
 裏を廻りて顯れ出る男と女闇よすかしてそれと察し首尾の如何ふと問ひかくる男の即ち小

櫻丹二首尾云々と答ふる女の即ち小櫻の壽美として此所の藥屋高梨金兵衛が裏庭あり其時
 おすみの聲を潛め妾が先頃此高崎に來たりし折の風説さくが儘に案に附し今度の仕業
 病痾かこつけ此家へ入込先さよは一時の席料も過たる謝金を與置し時刻をうつして一宿
 亥後は主人が寐酒の相手酔ふ乗じて懸着るを兎や角く味あわしらいて夜深に忍び來るな
 ら妾の心を知らせんと向ひある表坐敷に我獨假寐おしたる首尾にして色と慾とを餌としつ
 斯まで計りあふせたり此うへは侍身の役あり心緩さずやり遂たまへと云ふは領く小櫻丹二
 互に耳をとりかわし示し合せて諸共表坐敷の椽側より足音ひそめて忍び入る斯といいか
 で猜すべき主人金兵衛は旅宿の女が容顏の麗しさは恍惚とうちつけ言寄る否やはあらぬ
 稻舟の舟底枕して待んと色よき返事よ魂飛び一度己が闇入ぞ眼澄胸悸き眠んとするよ
 いをねられず時器の刻報を何時よりか緩く覺てをどかしく人寐靜る真夜中を待ちつゝあり
 し氣勞れよつひらとくと一寐入り寐過ぎたりと忙しく起き吾家ながら忍ばれて廊下づ
 たへは彼旅女が寐まりし坐敷の襖をバ音せぬよふ打披れば立圍らせし屏風の傍は有明燈
 臺の影暗さの上衣と覆いしよて待戀の調度あらめと微笑れかゝる艶女と思わるゝの尻尾切

第六十二回

て今日まで身は覺へなき仕合かな我すら鏡を見る度嫌みし顔を醉興よも此艶女が惚た
 りしが否惚たるは全体の顔象はあらずして鼻の巨大よるものか嗚呼然かありと我は問
 ひ我は答へていそくと屏風片手は打披き臥したる女は道よりぬ
 雄戀ふ鹿か散る紅葉染摸樣せし小夜衾を掲げて云よと云へばいぬは差ての事あるか
 我より先寄添し女よりして小手をのべ掌根曳れて慄とせる戀風寒しと言題は婿入んとな
 す軀をバ再度グット引寄せられ女は似氣なき力量も呆ながら戀々堪ぬ情の舉動されと興
 あることと思ひつゝ曳る儘よしなだれ寄り嘸ぞ待ちわびてかわしつなん枕かわせて詫せ
 んといふ息いまだつかぬ問は開が掌根を逆反しし捻擧つゝ跳起る女はわらで一個の壯夫
 斯と見るより駭き慌忙つる金兵衛が驚嘆と叫ぶを聲立さじと手布とつて猿轡此時屏風の陰
 よりして顯れ出る旅宿の女の笑を含みつゝ頻に手段の敏捷を稱へ撲撲手先とくこれよと吾
 携へし手布を投げ與へ金兵衛を縛めさせたり是の別人あらぬ小櫻夫婦として纏て丹二の金
 兵衛は強て案内をさしめて開が起臥せる居間を搜索千圓餘百の紙幣を奪取り金借禮書の



類をバ火桶の埋火掻おこし皆打込で焔烟と消すも宋裏の仁思へバあらん丹二かすみり斯ま
 であ思ひし事を仕遂しかバ造化微妙と目ら稱へ彼の金兵衛を傍へある柱に結附け要あく時
 刻を過しちバ故障やあらんと危ぶみて跡白浪と丑満の鐘聞すて、出去れり恚て其夜は國定
 村の住居に立戻り翌日未明より數名の子分を喚集へ追捕の沙汰嚴重なるよし所詮此地に留
 まりおたく一舉我のあすみを伴ひ他國に赴かんと既よ心を決したり日頃の交前借むべけ
 れど離合時ゆりいかいのせん又こそ會合の幸をあらんか些少ながらを此紙幣にて旅の調度
 をまかのふて指方へ赴くべしと昨夜高梨許めて盗み得し紙幣若干を分ちとらせ離別の杯を
 酌かひせ今の心安しと小櫻夫婦の目たぬ装いでして开が翌日繁華なる東京さして發足ぬ
 る凶狀持の身柄は淺墓にして彼の夏虫の火虫に似たる証もれずをあるか意外の場
 所へ潜伏をよしと思ひし考もや又た罪劫早晚脱れ難しと覺期して开が有紙幣を頼み散し
 花一日の榮耀をバ竭すの都下へ限るべしと考へしものあるや其點まで問ふよしおけれど
 大胆を小櫻夫婦の高崎の往還あるかの藥屋金兵衛の店前を素知らぬ顔にて往過つ熊谷
 の堤よかより折はいつか日をたつふりと暮果ぬ此日の正午の頃よりして雪ちらりと降

り出て早や一二寸を積りつゝ、行方の路次覺束なく困するより忍ぶ身あれは、農家こそ屈竟なれ頼みて一宿せむとて四方を頼み見廻と銀界茫漠として屋造の影を見ず途方よく来て立折しを遙跡邊より兩三人早足よ來る姿を認め行方を問ふ便宜を得つと其處よ不立待受けた

第六十三回

待間程なく簀笠よ雪を凌ぎて馳來たる三個の人の近づくまゝ丹二の忙しく聲かけて事卒爾よのわかれとも降り積む雪よ路次を失なひ途方よ暮て東西の見定さへもつかずありぬいりて東京へ赴くべき路筋を教へさせ給われと慇懃よ小腰をかゝり頼むなる言語をいまだ畢ざるよ彼三人の端なくも簀笠脱ぎ捨て一様お羅紗筒袖の官服はいわでもしるき追捕の巡査前後を圍ふて呼わるよふ罪科分明の小櫻夫婦神妙よ縛着れど双方一度よ紐つくと心得たりと振はぐし丹二の手足を働せ兩人を相手よ操合ふ隙おすみは女の力弱く争ひかねて押伏られ天羅脱れず縛めの索よ牽るゝ姫瓜や心許のはやれども何となる子の音よ騒ぐ雀色時なるものゝ白晝を欺く雪皎明丹二の斯と見るよりも救ふ暇わらぬのみか思わす心奪られて我よ

もあらず雪踏入り双膝つくを獲たりとし兩個の巡査は折重あり丹二と腕と縛りぬ絆の体を案するよ小櫻夫婦が賭博犯罪のみならず彼の酒店を騒せし如き暴行縦心ある聞へあるより追捕近きよ沙汰せられんとする折から昨日又高崎の藥屋金兵衛の訴へよ云々の盜難ありと賊男女よ爲体く彼等よ似たりと推量せられ八方追捕の手配あつて斯なん捕縛よ遇ふものは自劫自得といわまくのみ恠て小櫻夫婦の當地縣の牢屋の中よ繋がれて嚴重よ吟味せられ犯罪白あるより日あらずして懲役何年と宣告されよき开が苦役中丹二の時疫を病て黄泉の客となり果ぬ同じ苦役よありながら男女の室を異よせしおとみり程歴て聞傳へ打復く事大方あらず我を共よ死んと啣ち又たつらくと越方を緬想せよ吾身程罪深き者いならず世をはかきみて一度あらず二度までも死かんとせしを怒いよ生存らへかゝる汚名を負ふ身の果は千度悔ひ萬度歎けど陰をさし二世までと契し夫の登固の水よ濁れて亡なり今の夫の丹二どのの墓なく牢死せられたれば頼む木の下露漏て我身獨をいかゝりせん是を又た前世の劫因か一端佛よ歸依しあがら心の在いよ念珠の緒を断つゝ穢土よ迷ひ出しは罰の程をおそろしやと再度感悟の初念よ返れは今更夢の覺たる如く是より念佛三昧よ亡き情夫等の後世を

吊んど思立し日頃経て服役の期を畢りおすみの恙なく出牢せしかバ他またよるべき人もあ
きより豫て聞知りし當地伊香保の山奥所の只在る寺院に近頃淨世を遷け行ひますます尊とさ
法師ありと开と心當よおすみの彼所へ赴きけり

第六十四回

枯木寒泉景色 寥漠たる處の名よし黒髪山开が麓に一箇寺あり住僧玄慈法師とて近頃此所
遷來て枯花微笑の春を送り指月黙諾の秋を迎へ禪の床は丹念の眼を閉れ山中日として
年の如く閑雲野鶴の外は伴なく今日しを終光をします机に居寄つゝ經卷を繕きて餘念をな
し門徒玄淨の學業の暇もをや箒木を撮て苦むせる庭の落葉を掃て居り恚る折しを柴の門を
ホト〜と叩く者あり誰と問へり面憔悴たる婦人よしして妻の師の坊さまみへ佛果の得度者
の授戒とらけ罪劫消滅を願わん爲め來たりし者なり彼所へ居ます御僧は目を傳へてたび
ねかしといふ顔見つゝ玄淨の箒木を杖も何か知らず頻る小首を傾けしが聽て云々と師の
坊ある玄慈法師は告るよと頼る傍邊近く呼びよせつ开が來由を尋ねつゝ眞と妄門に入んと
する心根を問ひ試るひるよ豈計らん其名のおすみと告のみか識悔罪の滅すといへば片言



單語を嘘わらず詳し身のうへを聞へんものと其始め家出せしより入牢の顛末を巨細に告る
 るまど玄慈法師の聞毎に驚嘆し語果つれども答へ得せで黙然たること半時許漸やくよして言
 葉を改めおん身の願ひ殊勝もよまをあるべけれど我も思へば戒を授けて黒髪と共に浮世を
 ふり捨て後世の營み緊要をらめいざと身を起し臙で剃刀を携へ來たりおすみが背後よ
 立寄て經解を説く事二三遍響り短よおしげをかく丈ある髪を剃落し法号を玄了と與たり此
 席は門徒玄淨を疾く罷出つゝ念珠と揉み類は稱名を唱へ居れり緯果て玄慈法師玄了尼の
 すみよ向ひ今の何をか隠すべき真と我のおん身の父親芳野紋太夫があれの果なり凡夫出離
 の直路を悟り煩惱の縁綱を断しうへに名告でもの事あれといはで叶わぬ物語あり開かん
 身の出家より佛果を得つる我身の如く不幸を却つて不幸は非ず幸いをまた幸いならず別
 人間輪會の理り塞翁の馬ならぬのちし死せしと思ひ誤つのみか圓頂黒衣は形容をかへし其
 處ある門徒玄淨を見忘れしかといはれて驚く玄了尼の名僧智識と思ふより蘇來たりし其人
 の年なほ若く別たる父親よおはせしかと何事を打忘れ悲喜差別なき折柄よ又もや傍に居据
 る玄淨を見忘しかと問るゝお心附て能く見れば是れ別人ならず隅田川の水の泡とし消た

りと今日の今まで思居し彼の綾次郎よてありしかは再度驚く玄了尼はこはそも如何よと
 かり思量り得ざる心を察し玄慈法師は其怪しき理りあり詳さよ語り聞せんと説出せし物語
 いかさらん次回よ記すを聞ねかし

第六十五回

時よ老僧玄慈法師の從客として念珠を爪繰り辭し歸り出るよふ回想れば早や三年を過ぬ老
 納東方諸國よある佛陀の靈場を巡拜おし歸期よ東都へ歩を遷し年歴て己が所生地を再度踏
 ば世外よ心置く身を何となく在昔しの忍れつ殊よ亡妻の望み今日某寺よあるものから并を
 吊らふて香華を手向け會向よ時を費やして黄昏近く渡船を呼び向ふの岸よ來て見れば堤上
 の櫻名のみよて空しく花の木根よ戻り川添ひ柳蔭寂びて閑ふ秋の枯風よ散る葉どいめぬ
 無常の状のとりも直さず人間の生者必滅會者定離の道理よ洩ざらめ斯くかん思へば現よこ
 の里よ名高き梅若塚の縁起よを能く似る我身のうへ先づ年最愛娘お壽美が不慮の事よりし
 て生死も知れず家出せし歎きの餘り計らずを法燈を心よ掲げかたくを己の悟るものゝ悟り
 かね物狂わしさまでありて病死せし妻といひ彼是脱れぬ前世の因果同じ怨の亡靈が後世と



弔ひ得させんと其夜の木母寺よもふでつゝ更闌るまで讀經して再旅舎よ立歸る开が途中怪
 しの男女が姿を見かけ此真夜半よ此邊りよ徘徊の煩惱の情線斷ちがたさよ身を淵川よ沈め
 んど思立し輩よのあらざるがそれかあらぬか問ひ試み事宜よよらバ説諭し命を救ふも沙門
 の本懐かく思ふ中彼方の兩人の我影を見かへりて足早よ去まくなるよ見通しかねて彼の兩
 人が袖を捉ふて曳きといひるを振拂ひ堤を西よ走り去るを追ひかけんよも老の身の遺憾く
 も其儘止みぬおそみが懺悔の物語と思ひ合すれば彼の兩人の其身と佐吉の丹二なりしかと
 語るをさして支了尼のあまたよび嘆息し其折出遇ふ旅僧の父公よておわせしかは髪と剃浴
 白鬚を長存たまひしは姿の今日すら一時の父君とも心附するものをまして夜眠よの知る
 よしおく現在父子再會の期ありあがら今までの夢よもしらす過ごこと是を又よ前世の劫
 因かそれよつけても不思議なるの其夜水よ濡れさくさられし綾次との、斯く借体して居た
 まふとのつや〜合點まいらす説聞かせ玉へかといふよ支懸顔きて傍よ坐せし支淨を見
 かへりて此事障の我よ代り親く物語したまへと指圖よ支淨小膝とすゝめ其夜さり我身の水
 よ突落され折から宵の雨あがり水層ませし河の瀬よ濡れさがらよ押流されしが未だ命數盡

ざる所か苦惱は換換の手先の涙よけ立木は観しかば一生懸命抱着き響つゝカントーと思
 月影たよりで漸やくと境への道ひ上りしを病身の猶さら勞れをまし且心の弛みしか我よ
 もわらず臥倒れ其後の覺へず過せしが誰かの知らず耳邊よてコヤのふくくと呼聲よ心附き
 て眼を開けバ一個の旅僧即ち師の坊を慰ぬし我をいたじり藥を與びての厚き介抱纏て人心
 地よなるものからおすみとのおん身が成行いかいあらんと案すれば禮をそとく立戻らん
 と軀を起すを心身勞て行き悩むを彼の旅僧の呼び留め懇ろよ我を慰め人を救ひ佛の道あり
 何地までも俱しまいらせん且心の急るゝ体の要こうあらん語さふらへ雲水行脚の世捨人
 よ遠慮したまふことかんと問われて黙止べふをあらねば己が名を告り次第をば言葉短のよ
 告るよあんどよ始めて旅僧の芳野大人が成れの果よて奇遇互ひよ駭くのみか最前男女よ
 出遇しのお懐お喜美でありつらんと开が爲体くを告げたまふよ感ふべくもなきおん身され
 と他の男のつや／＼解せず半信半疑しながらも扶け曳れて見覺へある元の渡し口よ來て見
 れバ人影あちで破たる傘の遺れるのみ又た詮よしをあらざめれば師の坊が旅舎り俱きはれ
 還ふかどみとのか生死の程の計りかねれと煩惱獄土の浮世を感悟し弟弟子とありて師の坊

が歸山は俱して現在の身としなりたる一伍一什云々ありと語るよぞ品字の團坐よ話柄を熟
 し各々了解なれものから尙過去方の物語りして諸行無常と悟らん恁て日數をよるまよ
 立了尼が信心堅固よして執着の念更よあさを玄慧法師を見抜れて心安しと佛道眞理を教た
 まへり其後幾程をなく立了尼の亡母丹二の申すまでなく非劫の死をとげし金八芳野が若徒
 等の菩提の爲め且の自己が罪はるほしよ廻國行脚よ出で父なり師ある玄慧法師の志しをも
 續んと云ふ殊勝の願ひよ玄慧法師をとめかね旅費はるけき旅費をぞ許されたるの明治十
 二年の秋よぞありけり

うら玉の黒髪山を朝越て木の下露よぬれよける哉

と人丸が古歌よもよめる山嶽よして二ッ嶽と共に巖立するも茂樹鬱蒼として黒髪の名よる
 むかず开が麓原の渺茫として叢芽穂芒一面よ生長たる荒涼たる景色よこそ頃去を秋の露深
 く山端東白曉天よ彼の立了尼の關寺よ落魄し卒塔婆小町よあらなくて濁世煩惱色慾界無明
 の夢よ延年の春と玄契る手枕も盧生が假寝の人生の長夜の夢とはかかみて姪娜紅粉を貞骸
 よ彩る詮を南無阿彌陀佛菩提心こそ頼みなれと我から悟りて黒染の今曉願く寺の玄慧法師

沙彌文浄しやみぶんじやうを別わかと告つげ野徑のやけいは戦いくさや秋風あきかぜは千草せんそうの我われを招まねけと西天さいてんは傾かたむく月代つきしろを千折せんせつとなし
て飄然ひょうぜんと行衛ゆくゑを知らずありよけり

野晒のひざしの墨花すみはなの曙終あけぼのしるべ

明治十九年五月三日出版御届
同年五月 日刻成

編輯人

堀田實之吉ほりた じつ之きち
北豊嶋郡千束村五百十三番地
太田喜兵衛方同居

出版人

武部瀧三郎たけべ たきみさぶろ
京橋區常盤町二番地

發兌人

鶴聲社つるこゑ しゃ
日本橋區橋町三丁目

大賣捌

春陽堂はるやう だう
南傳馬町

上田屋榮二郎かみうだや えいじらう
本石町三丁目

木村巳之吉きむら み之きち
上野北大門町

金 櫻 堂

辻 岡 文 助

兔 屋 書 店

文 事 堂

鈴 木 喜 左 衛 門

今 古 堂

鶴 聲 社 大 坂 支 店

同 橫 濱 支 店

兔 屋 大 坂 支 店

通 四 丁 目

橫 山 町 三 丁 目

南 鍋 町 二 丁 目

橫 山 町 三 丁 目

藥 研 堀 町

新 和 泉 町

